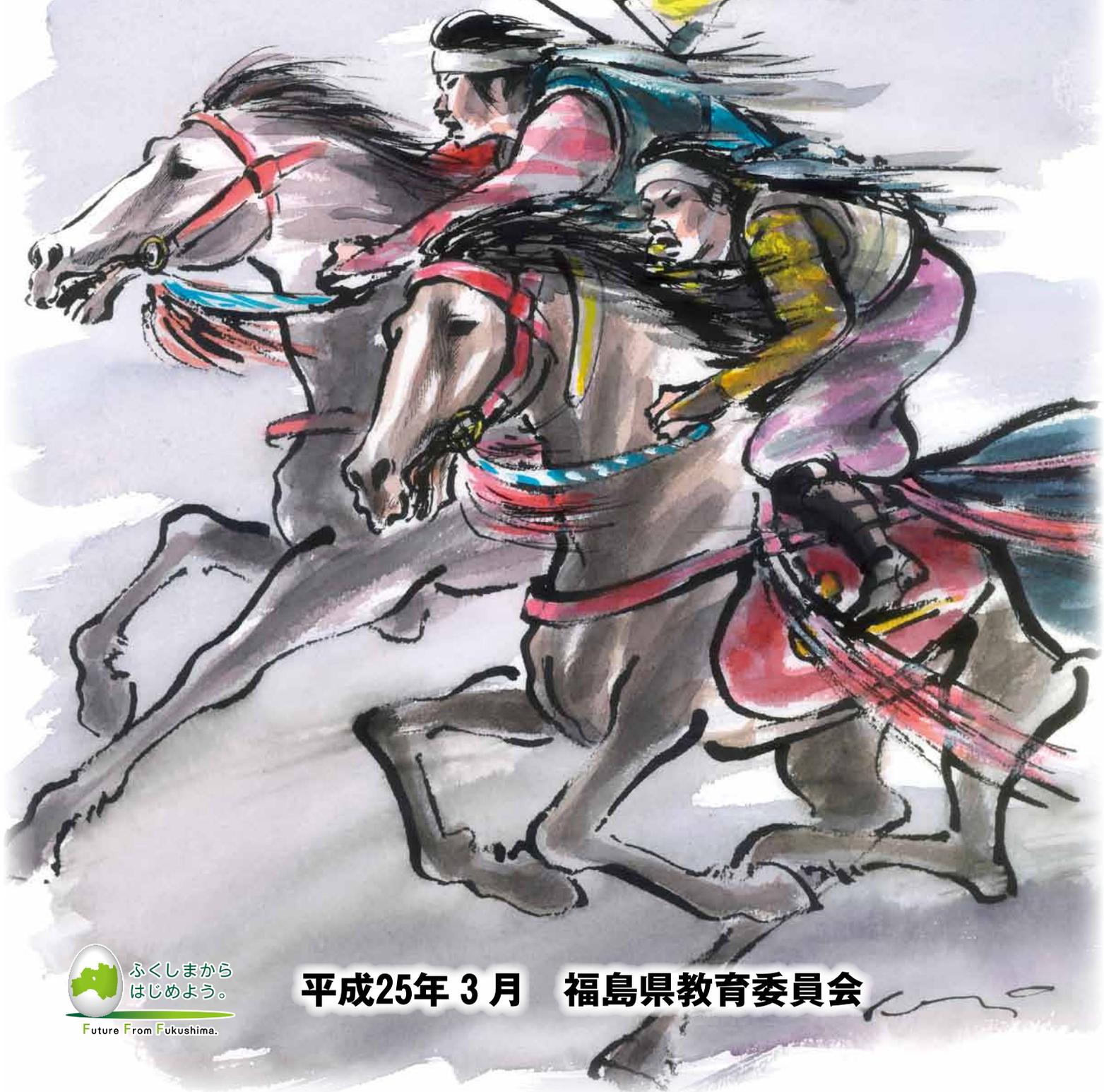


ふくしま道徳教育資料集

第I集

生かぬく・いのち



まえがき

東日本大震災から二年が過ぎました。本県は、千年に一度と言われる未曾有の大震災に加え、原発事故の発災により、未だに多くの児童生徒が避難を余儀なくされております。臨時休業中の学校、他市町村の仮校舎や仮設校舎で授業を実施している学校など、まだまだ厳しい状況が続く中において、子どもたちが嬉々として日々の教育活動に取り組むことができているのも、この二年間、様々な困難に立ち向かい、子どもたちを、学校を、守り続けてきた各学校の校長先生はじめ先生方の御努力の賜と心から敬意と感謝を申し上げます。震災からの復興は長い年月を要するものであり、震災に直面し、それを乗り越えてこられた先生方の思いを次代に受け継ぎながら、着実に進めていかなければならないものと思います。

さて、震災等の経験を通して子どもたちは、いのちの尊さや家族、郷土の大切さを実感することになりました。そうした今だからこそ道徳教育を通して、いのちの尊さや家族のつながり、自分を育んでくれた郷土への愛着、さらには人間が抗いきれない自然の驚異・畏敬などについて、子どもたちとともに、改めて向き合うことがとても大切であると考えました。

県教育委員会では、今回そのための道徳教育の教材として、「ふくしま道徳教育資料集 第1集 生きぬく・いのち」を作成いたしました。本資料は、三年間をかけて作成する予定であり、初年度の今年度は「いのち」をテーマとして編集いたしました。

小・中学校学習指導要領道徳では、内容項目の「3」に生命尊重に関わる価値が位置づけられておりますが、掲載された教材は、様々な価値から生命の尊重にアプローチできるような構成されています。それは、「いのち」を大切にすることは、「いのち」の存在を、他者との豊かな関係性の中で育まれるものであるとの考えによるものです。

例えば、本資料の小学校編の最初に掲載されている「きぼうの水族館 〈アクアマリンふくしま〉」では、飼育員の津崎さんが生き物たちの命を守るために必死にその対応に追われる姿や避難先の千葉県で生まれたゴマフアザラシの『きぼう』を通して、子どもたちは「いのち」が多くの人々に支えられ継がれていくことを学ぶことができます。ただ、そのことを自分自身のこととしてとらえさせていくためには、アクアマリンふくしまに寄せられる全国の水族館関係者からの支援、再開を願う全国からの多くの応援の声に応えるために、再オープンに向けてあきらめずに取り組む津崎さんたちの姿に着目させ、希望や勇気を持って最後まで頑張り抜くことが、「いのち」を継いでいくことにつながるということを子どもたちに気付かせていくことが大切であると考えました。そのようなことから、この教材の価値は「1の(2) 希望・勇気・不撓不屈」として設定されています。

また、掲載した資料は、その多くが未曾有の大震災、原発事故の中から生まれたエピソードを素材にしていることから、震災の記録でもあります。震災の体験を共有してきた子どもたちとともに、極限の状況の中で人間の美しさや崇高さ、しなやかさなどについて、資料を通して感動する体験を重ねることができると考えます。

各学校におかれましては、「第Ⅱ章 読み物資料の活用例」を参考にされ、子どもたちの発達段階や置かれた状況に配慮しながら、本資料集を大いに活用いただき、子どもたちの心に響く道徳の授業が展開され、本県の子どもたちにもどんな困難にも負けない強い心の基盤を培うことにつながることを切に願っております。

最後になりますが、この道徳教育資料集の発刊にあたりまして、玉稿を賜りました大阪教育大学名誉教授藤永芳純先生、御多忙の中福島に何度も足を運んでいただき監修にあたっていただきました上越教育大学大学院教授林泰成先生、同大学院准教授白木みどり先生、同じく早川裕隆先生、表紙の相馬野馬追を描いていただきました朝倉悠三画伯、挿絵を御担当いただきました本宮市立和田小学校教頭松本妙子先生、本資料のために素晴らしい作品とメッセージをいただきましたこおりやま文学の森資料館長溝井勇先生、そして、震災対応に追われる中、本資料集の執筆にあたっていただきました多くの作成委員の先生方、さらには、本資料の作成にあたりまして、取材等に快くお応えいただきました関係各位に深く敬意を表しますとともに心より感謝を申し上げます。

平成二十五年三月

福島県教育庁義務教育課長

吉田 尚

特別寄稿「いのちの尊重——授業者の理解のために——」

大阪教育大学名誉教授 藤 永 芳 純

I 「いのち」の「かたち」

「いのち」は多様な「かたち」をもつ。「いのち」が尊重されるということは、そのかたちが総合的、調和的に尊ばれることである。

1 「生命」としての「いのち」

① 動物的生命 心臓が停止したら失われるいのち。人間の死は、伝統的に三徴候（心停止・呼吸停止・瞳孔散大）で判断されてきた。現代では脳死で死の判定がされる場合がある。この意味でのいのちは生命現象の基礎であり、無条件に尊重されなくてはならない。「殺すなかれ。」は人類共通の普遍的理解事項である。

② 社会的生命 各自が所属する集団における役割、立場、居場所としてのいのち。たとえば、政治生命や教師生命などであり、教室における居場所である。「シカト」は攻撃の対象がその場にいることを否定するのであるから、社会的殺人行為である。

③ 精神的・文化的生命 人間としての尊厳、誇りの意味でのいのち。あるいは、生きがい、存在理由としてのいのち。人間としての尊厳が否定されたり生きていく意味が見失われたりすれば、人間は「生ける屍」になることがある。

④ 宗教的生命 自分が「生かされている」といういのちの自覚、あるいは有限的な人間世界を超えた世界の自覚、大いなるつながり、連続性としてのいのちの自覚。この意味世界に立てば、あらゆる意味でのいのちを包括すると考えられる。

2 「生活」としての「いのち」

日々の生活の在り方、暮らしぶり、クオリティ・オブ・ライフ（生活の質）という時の意味である。日々の生活が充実、向上することは、豊かないのちの具体相である。

3 「人生」としての「いのち」

人間の一生、生涯を意味するいのちの側面である。人間は過去を振り返り、未来を手元に引き寄せて現在を生きる。自分の人生を見通して生き方を考え生きることは、いのちの実践である。

4 「活力」としての「いのち」

刻々の活気、生気、元気としてのいのちの側面である。十分な睡眠、おいしい食事、学校では楽しい学習や友だちとの交友などの、生活の充実を支えるその時々々の活力が保証される必要がある。

II いのちの尊重の理由

いのちが尊重されるべき理由を考えてみる。

1 自己保存の本能 「生きていたい。」は、生物の本能的欲求である。この願いを他者に適用すべきである。

2 基本的人権としての生命権 人間は社会的存在であり、「生命権」という基本的人権の相互承認が必要である。

3 目的そのものとしての人間性の理念 人格としての人間は目的そのものとして無条件に尊い。

4 いのちの超越性・不可知性・神秘性 いのちの現象は人知を超えているがゆえに、畏怖の念をもち尊ぶべきである。

5 いのちの特徴 いのちの現象は、有限性、固有性、一回性、唯一性などの特徴をもつがゆえに尊い。

6 いのちの横断的関係性・支え合い 人間は他の生命体との相互依存関係にあり、また他の生命体のいのちを犠牲にして生きているがゆえに尊い。

7 いのちの縦断的歓迎性・連続性 生命体は、大いなるいのちの流れ、連続性のなかにあるがゆえに尊い。

8 宗教的指令 「いのちを尊べ。」の宗教的指令は絶対である。

9 周囲の願い・希望・連続性 人間は支え合いの存在であり、「生きてほしい」という周囲の願い、期待に応えるべきである。

III 資料におけるいのちの扱い

資料で描かれる具体的ないのちの場面は、動植物及び人間の誕生、生長・成長、発達、病氣・回復、死などに伴う歓喜、悲嘆、諦念、希望などである。授業に臨む際は、資料の何を契機にして、どの場面に注目して、何を指導するかを十分に吟味しておきたい。

IV いのちの授業

授業は学習である。いのちの授業では、いのちの真理、真実、本質についての、新しい学び、納得、確認が児童・生徒に保証されなくてはならない。資料の趣旨を踏まえて、他人事でない、いのちの授業を実践したい。

参考文献 藤永芳純「生命はなぜ尊いのか」文部省「初等教育資料」No.666

（本稿は、第二回道德教育教材作成委員会での講義に依る。）

本書の構成について

本書は、道徳教育資料集として作成され、四部構成で編集されております。

第Ⅰ章は、小・中・高等学校の読み物資料です。いずれも、県内のエピソードをもとに教材として開発されたものですが、読後感も大切にしたいと考え、学年順や内容項目ごとには配列しておりません。

東日本大震災後の福島県でたくましく生きぬく人々の姿を「いのち」を軸にして作成しました。

対象学年に関しては、弾力的に活用していただきたいと考え、小学校は、小学一・二年生（低学年）、小学三・四年生（中学年）、小学五・六年生（高学年）、中学校は、中学一・二年生（下学年）、中学二・三年（上学年）としました。

なお、本文中の漢字の表記については、それぞれ下の学年を基準とし、未習の漢字には、見出し初出にルビをふっています。

第Ⅱ章は、読み物資料の活用例です。資料は、全編福島県版によるもので、特に、東日本大震災に関連した資料に関しては、取り扱う児童生徒の実態に応じて、「五 指導上の留意点及び配慮事項」を設けました。被災した児童生徒、被災した児童生徒を受け入れている学校等、震災の影響に関しては広範囲に及ぶことを考慮して記載しております。

第Ⅲ章は、教材開発のための実践事例集です。事例一・二は、教材を開発するまでの手順や留意点を中心に、事例三は、実際に取り組んだ実践を振り返りながら、それぞれの視点で報告しております。

巻末には、平成二十四年度「ふくしま子ども夢宣言」作文コンクール及び「モラル・エッセイ」コンテストの優秀作品を収録しました。授業の導入や終末に紹介する以外にも、読み聞かせ等、幅広く活用していただければ幸いです。

魅力的な教材は、授業者自身が感動を覚えてこそ、よい教材であると言えます。本書が、福島県の児童生徒を勇気づけ、励ますことのできる資料となることを願っております。

目次

第Ⅰ章 読み物資料

1 小学校編

- (1) きぼうの水族館 ～アクアマリンふくしま～ …… 10
- (2) 外国からのメッセージ …… 14
- (3) 「はだかまいり」のはじまり …… 18
- (4) 三本えだのモミジの木 …… 22
- (5) クリスマスのおくりもの …… 26
- (6) 「までい」の牛 …… 30

2 中学校編

- (1) いま新しき力あふれて …… 36
- (2) 温かさを分け合って …… 40
- (3) 大切なひと …… 44
- (4) よみがえれ！ 安波祭^{あんばさい} …… 48
- (5) ヒューストン日本語補習校だより …… 52
- (6) 塩むすび …… 56
- (7) ありがとうの唄 …… 60

3 高等学校編

- (1) つむぐ命 …… 66
- (2) 生きている 生きてゆく …… 74
- (3) 長崎からの手紙 …… 76
- (4) チェーンメール …… 82
- (5) 福島に生まれて …… 84

第Ⅱ章 読み物資料の活用例

1 小学校編

- (1) きぼうの水族館 ～アクアマリンふくしま～ …… 94
- (2) 外国からのメッセージ …… 95
- (3) 「はだかまいり」のはじまり …… 96
- (4) 三本えだのモミジの木 …… 97
- (5) クリスマスのおくりもの …… 98
- (6) 「までい」の牛 …… 100

2 中学校編

(1)	いま新しき力あふれて……………	101
(2)	温かさを分け合って……………	102
(3)	大切なひと……………	103
(4)	よみがえれ！ 安波祭 ^{あんばさい} ……………	104
(5)	ヒューストン日本語補習校だより……………	105
(6)	塩むすび……………	106
(7)	ありがとうの唄……………	107

3 高等学校編

(1)	つむぐ命……………	108
(2)	生きている 生きてゆく……………	110
(3)	長崎からの手紙……………	111
(4)	チェーンメール……………	113
(5)	福島に生まれて……………	114

第三章 実践事例集

(1)	福島を「フクシマ」にはしない……………	118
	〈ゲストティーチャーを活用した道徳教育〉……………	

(2)	鎮魂と新生……………	124
	〈新聞記事を使って生き方を考えさせる道徳教育〉……………	
(3)	飯館校生の主張……………	129
	〈教科指導と連動した道徳教育〉……………	
	「ふくしま子ども夢宣言」作文コンクール作品集……………	139
	「モラル・エッセイ」コンテスト 作品集……………	142
	「道徳の内容」の学年段階・学校段階の一覧表……………	151
	参考文献……………	153

資料一覧

校種	対象	資料名	道徳の内容項目	ページ
小学校	5・6年	きぼうの水族館 ～アクアマリンふくしま～	1-(2)	10
	5・6年	外国からのメッセージ	4-(1)	14
	1・2年	「はだかまいり」のはじまり	4-(5)	18
	3・4年	三本えだのモミジの木	3-(2)	22
	3・4年	クリスマスのおくりもの	2-(2)	26
	5・6年	「までい」の牛	4-(4)	30
中学校	1・2年	いま新しき力あふれて	4-(4)	36
	2・3年	温かさを分け合って	3-(3)	40
	2・3年	大切なひと	2-(3)	44
	1・2年	よみがえれ！ <small>あんばさい</small> 安波祭	3-(3)	48
	1・2年	ヒューストン日本語補習校だより	4-(4)	52
	2・3年	塩むすび	2-(6)	56
	2・3年	ありがとうの唄	4-(4)	60
高等学校		つむぐ命	3-(1)	66
		生きている 生きてゆく	1-(2)	74
		長崎からの手紙	3-(1)	76
		チェーンメール（情報モラル）	1-(3)	82
		福島に生まれて	4-(8)	84

第

I

章

読み物資料

1

小学校編



きぼうの水族館

くアクアマリンふくしまく

「多くの命がなくなったことを考えると、ここで生きぬいた命をとにかく未来へとつなごうという一心でした。今でもその思いは変わらず、生き物たちに接してきます。」

飼育員の津崎さんは、あのとときの記おくをしほり出すように話し始めました。

二〇二一年（平成二十三年）三月十一日

福島県いわき市小名浜港にある「アクアマリンふくしま」の館内には、潮目の大水槽でのびのびと泳ぐ魚

たち、かわいらしく動き回る、ゴマフアザラシやトドなどの海獣類を見て、目をかがやかせる多くの来館者がいました。

午後二時四十六分

ゴオオン！ ドドドーン！ バリバリバリッ！

地ひびきのようなはげしい音を立て、巨大なゆれが水族館をおそいました。福島県では観測史上最大の震度六弱の地震が発生したのです。

「だれか助けて！」

「早く建物からにげろ！」

館内の電気は、地震によって全て止まり、来館者はきょうふにおびえていました。津崎さんたちは、トランシーバーを片手に、館



【津波でくずれたじゃの目ビーチ】

①しおめ

すいそう

① 黒潮と親潮という二つの海流が交わる福島県沖の海を再現した水槽。

② アザラシ、トド、セイウチなどの生き物をまとめていうときの呼び名。

内に残された来館者の安全を確保^{かくほ}するためけん命^{めい}に誘導^{ゆうどう}にあたりました。そして、来館者全員を津波^{つなみ}の心配がない安全な高台に、ひなんさせることができました。

まもなく、津波の第一波が海岸線^{かいがんせん}に到達^{とうたつ}しました。駐車場の車は次々に流され、建物の一階へ波がおし寄せてきました。何度もおそってくる津波のきょうふにおびえながら、津崎さんたちは、館内にいる生き物たちが心配で、なりませんでした。

三月十二日

生き物たちの確認^{かくにん}作業が行われました。ほとんどの生き物は無事でしたが、電気や水道などのライフライン^③の復旧^{ふつきゅう}の見通しは立ちません。水槽の水をきれいにする装置^{そうち}や温度を調節する機械は動きません。生き物たちの生活環境^{かんきやう}は悪くなっていくばかりでした。そのうえ、燃料^{ねんりやう}や物資^{ぶつし}はとどかず、館内のえさもなくなってきました。

津崎さんたちは、ガラスごしに今でも手がとどきそうな生き物たちが、ただ死んでいくのを見ているだけで何もできないことに、いらだちや情け^{なさ}を感じていました。

「今、元気な生き物たちだけでも、自分たちの手で何とか助けたい……。」「飼育員のだれもがそんな思いから、今後の対策^{たいさく}について話し合いました。」

「海獣類なら一週間はえさをやらなくても生きのびることができはるはずだ。」

「いや、生き物だってストレスがたまっている。あと一週間生きる保障^{ほしょう}もない。すぐに他の水族館に助けを求めましよう。」

「しかし、受け入れてくれる水族館だって、準備^{じゆんび}をする時間が必要^{ひつやう}になってくる。わたしたちの手で、このまま見守^{みまも}っていくほうがいい。」

津崎さんは、生き物たちを救いたいと願う飼育員たちの話を聞いて、だまって考えていました。

③ 電気・ガス・水道など生活に欠かせない資源やせつび。

そのときです。福島第一原子力発電所が爆発したという情報が入りました。真っ青な顔をしている職員たちを見て、津崎さんは力強く言いました。

「今、大切なのは、わたしたちの手で助けられるかどうかではない。一つでも多くの命を救うために、すぐに他の水族館に助けを求めよう。」

しかし、物資も十分にとどかないうえに、放射性物質がふり注ぐ福島に、はたして助けが来てくれるのだろうか。

「運送会社へ問い合わせても、断られました。」

「あきらめるな。生き物を思う気持ちはどこの水族館もいっしょだ。信じて連絡を続けろ。」

「この状況で、本当に来てくれるのでしょうか。」

きびしい現実の前に、津崎さんたちの不安はふくらむばかりでした。

三月十六日

「わたしたちに救える命があるなら協力させてください。」

千葉県の水族館の職員たちが、海獣類を引き受けにトラックでかけつけてくれました。

「千葉のみなさん、本当にありがとう。クララをよろしくお願います。」

「元気でいるんだぞ。必ず福島にもどしてあげるからな。」

その後、「アクアマリンふくしま」の生き物を助けようと、全国の水族館が次々に支援の手を差しのべてくれました。また、全



【千葉県へ運ばれるセイウチ】

④ にんしん中のゴマ
ファザラシ

国の子どもたちからは、たくさんのおうえんの手紙やはげましの折り紙などが寄せられました。津崎さんたちは再開にむけて夢中で働き続けました。

七月十一日

「うわあ。見て、見てよ！ ゴマファザラシの『きぼう』^⑤が泳いでいるよ。かわいいなあ。」

再開した「アクアマリンふくしま」では、千葉県で生まれたゴマファザラシのクララの赤ちゃん『きぼう』が、復興のシンボルとして、多くの人々に笑顔と生きる勇気をあたえています。

「わたしたちにとって、水族館の生き物は全て子どもみたいなものです。だから、できる限りの命を救いたかったんです。『わたしたちに、たくさん感動とえがおをくれてありがとう。』と、水族館の全ての生き物たちに言いたいです。」

来館者のえがおをうれしそうにながめながらそう語る津崎さんの目には、なみだがあふれていました。

（「教材作成委員会」作成）



【再開オープンでにぎわう館内】

⑤ 千葉県の水族館で生まれたゴマファザラシ、クララの赤ちゃん。千葉県の水族館の職員とアクアマリンふくしまの職員が相談して、名前が決められた。

外国からのメッセージ

二〇一一年三月十一日、日本列島を大きな地震がおそった。

わたしたちの町では、こわれた家があったが、幸いなくなった人はいなかった。しかし、水道がこわれたり、食べ物も買えなかったり、しばらくつらい時期が続いた。

そんなある日、わたしはインターネットであの写真を見た。それは、外国の子どもたちが、日本のためにいのりをささげている写真だった。

「わたしたちは、あなたたちと共にいます。」

「日本の深い悲しみを、わたしたちも分かち合います。」

英語でそう書かれていると知って、自然になみだがあふれた。

「ほくらも一年前、同じように大きな地震におそわれました。そのときから、これまで強く支ええてくれたのは日本人でした。チリは日本に感謝しています。」

「台湾で大きな地震があったとき、日本は一番早く、最も多くの救援隊を送ってくれました。本当に感謝しています。今こそわたしたちが恩返しをする時です。日本、がんばれ。」

たくさんの方から、多くの人々のはげましがインターネットにあふれていた。世界中の人たちが、日本を、わたしたちを応援してくれていたのだ。

① チリで二〇一〇年に起きたマグニチュード八・八の大地震。

② 台湾で一九九九年に起きたマグニチュード七・六の大地震。大地震が発生した夜、日本の国際消防救助隊が最初に台湾入りした。

しばらくして、わたしはこんな新聞記事も見つけた。

東日本大震災について、中国のメディアは、「日本国民の『落ち着いた行動』が、中国全土に強い感動をあたえている。日本人は、なぜこんなに冷静でいることができるのか。」と報じているという内容だ。

また、他紙では、「日本人の冷静さが、世界に感がいをおたえている。」「東京では、数百人が広場にひなんしたが、男性は女性を助け、街にはゴミ一つ落ちていなかった。」と紹介していた。

中国のテレビが、被災地に中国語の案内があることを取り上げて、「自分たちがこんなに大変なときなのに、外国人にも配りよをわすれない日本人に、とてもおどろいています。」と紹介した。その報道を見た北京市の女性は、「すばらしい。日本人の中には『道德』の血が流れているのだと思う。」と日本の新聞に語ったそうだ。わたしは、「『道德』の血」と言われたことに「はっ」とした。

確かに、被害がひどい中、日本人は落ち着いて行動していた。テレビでも、家に帰れなくなってしまった被災者たちが、整列して笑顔で「ありがとう。」と言って、順番にご飯を受け取っている



【インターネットをのぞき込む私】

様子を伝えていた。

自分も被災しているにもかかわらず、がれきのかたづけの手伝いてつだをしている人もいれば、ひなん所でおにぎりやにぎっている人もいた。家族が津波でなくなったのに、行方不明ゆくえの人を心配している人もいた。

しかし、それらは、外国の人から見れば、おどろくことなのだ。

あの大震災から、一年半が過ぎた。

その間に、ひなんして人がいなくなった家にどろぼうが入ったというニュースを聞いた。原子力発電所が爆発した後、福島県の人たちに対して、心ない言葉をあびせる人たちがいたことも知った。

「日本人の中には『道徳』という血が流れている」とほめてもらったが、果たして本当なのだろうか。次々と流れてくるニュースに、わたしは、日本はどうなってしまおうのだろうかと考え込んでしまった。



【給水車に並ぶひなん者たち】



〔教材作成委員会〕作成

【外国からのメッセージ】

「はだかまいり」のはじまり

「が^いつ七^なか。きょうは、ぼくの まちの「はだかまいり」の ひです。

ことしも おとうさんが さんかするので、ぼくは、おじいちゃんと いっしょに
みに いく ことになっ ています。

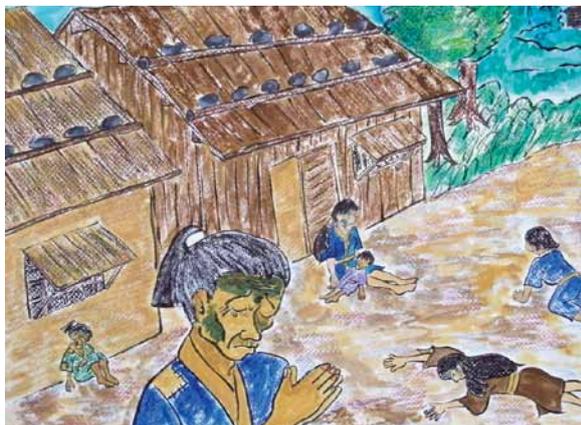
ぼくは、「はだかまいり」について ふしぎに おもって いた ことを、おじいちゃんに
きいて みました。

「おじいちゃん、こんなに さむいのに、どうして、はだか
おまいり するの。」

すると、おじいちゃんは、こんな はなしを して くれました。

いまから 千^{せん}ねんくらい まえに、やないづまちに わるい
びょうきが はやった。つぎつぎと ひとが しんで
いくが、どうする ことも できないで いた。そのとき、
こくぞうさまの ^①こえが きこえて きたんだ。

「ただみがわの かめいしの おく ふかくに すむ



① やないづまちに
あるふくまんこく
ぞうせんえんぞうじ。
にほん三^{さん}だいこくぞ
うその一つにかぞ
えられている。

りゅうじんの ところから、ほうしょうのたまを ② もらって くれれば、びょうきは すぐに なおるだろう。」

ひとびとは、よろこんで、このたまを とりによく ひとを さがした。

その けっか、『やよいひめ』と いう うつくしく、 かしこい おんなの ひとが えらばれた。やよいひめは、 りゅうじんに ところからの おねがいを して、 ほうしょうのたまを うけとる ことが できた。

このたまを こくぞうさまに おそなえすると、あの こえの とおりに びょうきは なくなり、へいわが もどった。

ところが、それから しばらくして、「ほうしょうのたまが おしくなった りゅうじんが、たまを とりかえしに くる。しかも、一ねんで 一ばん しずかな しょうがつの 七かの まよなかに やってくる。」と いう しらせが とどいたんだ。

ほうしょうのたまが とられたら、また、わるい びょうきが はやり、たくさんの ひとが しんで しまう。ひとびとは、たいへん しんぱいした。そこで、ちからを



② でんせつのなかで りゅうじんが もつ ていたとされる た からのたま。



あわせて、ほうしょうのたまを まもる ことに した。

「ほうしょうのたまを まもれ。へいわと しあわせの たまを まもれ。」

この かけごえで ひとびとは あつまって きた。

いよいよ、しょうがつの 七かの よるに なった。

こくぞうさまからの いちばんがねが なりわたると、
ひとびとは ふんどしひと一つの はだかすがたで、

「ヨイサ ヨイサ。」

と いさましい

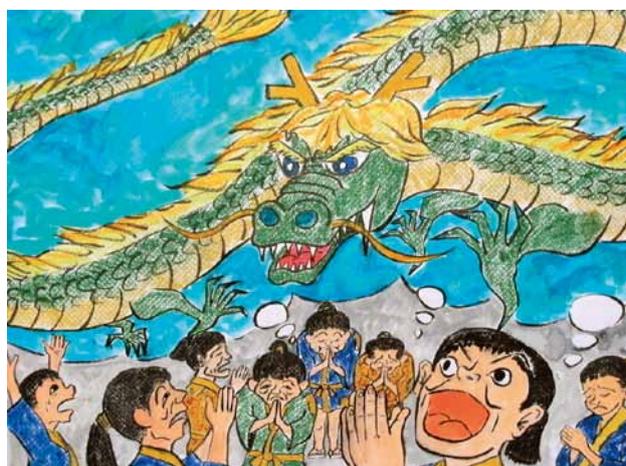
かけごえを あげて、

こくぞうさまの ほんどうへと かけのぼった。そして、
ほうしょうのたまを かこんで

「とられて なるものか。」

と おおごえを あげた。

りゅうじんは、ほうしょうのたまを とりかえそうと、
かめいしの うえに、ぬうつと すがたを あらわした。
ところが、こくぞうさまの ほうをみると、ひとびとの
こえが、やまを うごかすほど なりひびき、たきびの



ひかりは、ひるよりも あかるく ひかって いた。

「これでは、たまを とりかえす どころでは ない。いちねんで いちばん しずかな こんやでさえ、このありさまだ。ふだんの ひは どんなに にぎやかなんだろう。ともかく こんやは だめだから、らいねんまた くることに しよう。」

りゅうじんは こういって、ただみがわの おくふかく、しずんで いった。

こうして、りゅうじんが さつて まちの ひとびとは、へいわを まもりぬいた よろこびの こえを あげた。

おじいちゃんの はなしが おわった とき、はだかすがたの おとうさんたちが、つぎつぎと、

「ヨイサ ヨイサ。」

と いさましい かけごえを あげながら、ほんどうへと かけのぼって いきました。

ぼくは、その うしろすがたを みおくりながら、こぶしを ぎゅっと、にぎりしめていました。



〔「教材作成委員会」作成〕

三本えだのモミジの木

日曜日の朝、ぼくたちは町たんけんで知った、「三本えだのモミジの木」を見に行きました。

ぼくたちがとうちやくすると、おじいさんがおでむかえてくれました。おじいさんは、毎日ここに来て、木々や生き物の世話をしていました。

「よく来たね。あの池のわきにある大きな木が、三本えだのモミジの木だよ。モミジの木のまわりには、いろいろな生き物があるんだよ。今朝早く、羽化したばかりのセミがいるから見てみるかい。」

友だちはみんなよろこんでいましたが、虫の苦手なぼくは、気が進みませんでした。おじいさんについていくと、モミジの木の根元



三本えだのモミジの木
田村市竜根町のあ
ぶくま洞近くの五
郎ヶ池にある樹齢
百二十年のモミジの
木



① こん虫が、さなぎから成虫になること。
セミは、ふつう暗いときに羽化しますが、気温がひくいと日中でもとび立たないときがある。

に、羽化してまだとび立たないセミがいました。

「わあ、きれいだ。羽が光っているね。」

「ほうせきみたいだね。」

とみんなは大よろこびでしたが、ぼくはみんなの後ろから、そつとのぞくのがせいいっぱいでした。

おじいさんは、やさしいえがおでモミジの木を見上げて、

「このモミジの木は、百二十年も生きつづけているんだ。わたしが子どものころは、この木に登ってよく遊んだものだ。この木は、わたしに自然のすばらしさをたくさん教えてくれたんだよ。」

池のほりにある大きな三本えだのモミジの木は、空にむかって両手を広げたように立っています。おじいさんは、

「でも、年月がすぎると、竹やぶが広がり、土地はどんどんあれてしまった。『このままではモミジの木がかわれてしまう、なんとかしなければ……』と思ったんだ。そこで、このモミジの木を守りたい一心で、あれた土地をせいびすることにしたんだ。そうすると、くぼ地にひとりでに水がたまりだして、大きな池ができたんだよ。」

おじいさんの目が生き生きとかがやき出しました。

「池ができると、モミジの木もどんどん元気になった。その後、そのまわりにたくさん生き物が集まるようになった。夏が近づくと、モリアオガエルがたまごを産み、夜には、



② モリアオガエル

たくさんのホタルがとび回るようになったんだよ。」

気がつくど、ぼくは身を乗り出すようにしておじいさんの話を聞いていました。

「それがね、東日本大しんさいで池につながるほりがうまってしまい、たくさんいたホタルがへってしまっただよ。」

「えっ、かわいそう。ホタルは、もう見られないのですか。」

「わたしはね。どうしてもホタルをふっかつさせたいと思ったんだ。ホタルを見守ってきたモミジの木もがっかりするだろうからね。ほりを元のようにしたら、ホタルがまたふえてきたんだよ。」

「ホタルの命いのちが守られてよかったですね。」

ぼくたちの言葉ことばに、おじいさんはえがおで、

「あの大しんを乗りのこえて生きつづけているホタルは、とても美うつくしく光っているんだ。クロマドボタルというめずらしいホタルもいるので、また見においで。」
 ③
 どうれしそうに話してくれました。

三本えだのモミジの木に目をやると、モミジの木が両手を広げて、たくさんの命をつつみこんでいるように見えました。

おじいさんの話を聞いて、ぼくは、「あのセミも地じしんにたえ、今日やっと地上に出てきたんだ。」と思い、モミジの木も虫たちも、一生けんめい生きていることに気づきました。そして、もう一度モミジの木の根元ねもとのセミを見ました。



③ クロマドボタル

「ぬけがらにつかまったままじっと動かないセミは、とび立つ日をどんなに楽しみにしていたのだろう。」

とうめいにかがやくセミの羽は、太陽の光が当たり、キラキラとかがやいていました。ぼくは、すき通る羽を持ったセミにいつまでも見とれていました。



〔教材作成委員会〕作成

クリスマスのおくりもの

① あづま山のちようじょうに雪がつもり、二〇二一年がもうすぐ終わろうとするころ、^②県庁職員^①の吉田さんは、^②県庁^①に来た、たくさんの手紙の仕分けをしていました。すると、京都からとどいた手紙がありました。ふうとうの中には三まいの手紙と何まいかのおさつが入っていました。

一まい目の手紙は、えんぴつで力強く書かれていました。小学四年生の女の子、あかりさんからの手紙でした。

サンタさんへ

今年^{ことし}は、大しんさいがありました。そして、今でもたくさんの人たちが自分たちの家でくらすことができないままです。食べるものも、生活にひつような物も、何もかもつなみに流^{なが}されてしまっ
て、今のわたしたちとは、まったくちがうくらしをしていると思います。

わたしは、クリスマスでプレゼントがもらえてうれしくなりますが、しんさいにあわれた人たちは、「やった！ おもちやがもらえた。けれども家も食べ物もないな。」という気持^{きもち}ちになるかもしれませ
ん。同じ日本人なのに、わたしたちだけずるいような気がしました。

だから、わたしは今年^{ことし}は、プレゼントはいりません。そのぶん東北^{とうほく}の子どもたち^{こどもたち}にたくさんプレ
ゼントをあげてください。おねがいします。そして、わたしが東北の人に書いたお手紙をわたしてほし

① 福島市の西がわに
つらなる山々。

② 県の役所につとめ
る人。

いのです。どうかサンタさん、よろしくおねがいします。

あかりより

二まい目は、あかりさんが東北の子どもたち
にあてた手紙、三まい目は、あかりさんのお母
さんからの手紙がそえられていました。

あかりさんの家では、クリスマス間近になる
と、自分のほしいプレゼントを手紙に書いて、
まどにはっておくのだそうです。

ところが、今年のあかりさんの手紙には「自
分のプレゼントを東北の子どもたちおくに送ってほ
しい」と書かれていました。これを見たお母さ
んは、なんとかしてあかりさんのねがいをかな
えてほしいと、県庁にあかりさんの手紙を送つ
たのでした。お母さんの手紙の最後には、「サ
ンタクロースが、福島をはじめ東北のみなさん
のところへ、幸せをとどけてくれるように、わ
たしたちも遠くからいのっています。」と書か
れていました。

吉田さんは、会ったことのないあかりさんの



ことを思いうかべました。

福島から遠くはなれた京都で、一生けんめいサンタさんと東北の小学生に、手紙を書いているあかりさんのすがたや、それをそっと見守っているお母さんを思いうかべました。

吉田さんは、まわりの職員にこの手紙を見せて、どうやってあかりさんのねがいをかなえてあげられるか、相談そうだんしました。

「ひなんしている人たちのためにほきんしたらどうか。」

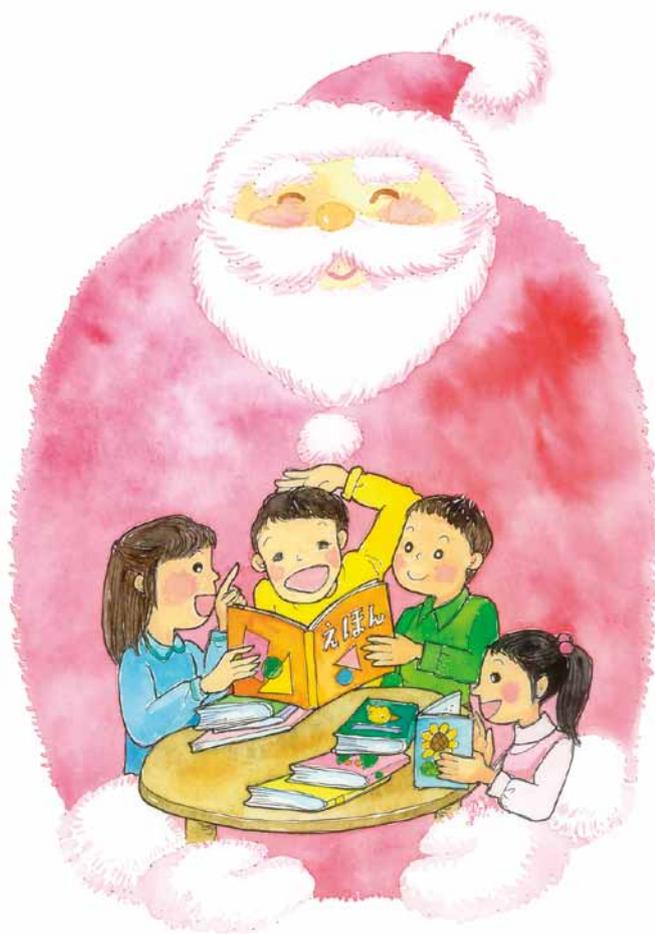
「こわれた学校を直すのにかうのはどうでしょう。」

「この手紙を福島県の子どもたちにぜひ見せてあげたいな。」

あかりさんの手紙を読んだ職員たちは、まるでサンタさんのように目を細めながら言いました。

それから二週間後、二学期がつきが終わるころのことです。となり町の小学校をかりて、じゅぎょうをしている小学校に、サンタさんから絵本がとどきました。

そこには、サンタさんからのこんな手紙がそえられていました。



小学校のみなさんへ

学校生活を元気にすごしていますか？ わたしは、世界中せかいじゅうの子どもたちにプレゼントをおくるじゅんびで、とてもいそがしくすごしています。

実はこの前、京都の女の子から一通つうの手紙がとどきました。

「自分の分のプレゼントを、元の学校で勉強べんきょうすることができない子どもにわたしてほしい。」という手紙でした。クリスマスには少し早いけれど、その女の子のやさしい気もちをみなさんに早く知ってほしいと思い、女の子からの手紙と楽しい本をプレゼントします。

みなさんをおうえんするたくさんの方がいることをわすれずに、来年もゆめに向むかって一生けんめい勉強してください。

サンタより

〔教材作成委員会〕作成

「までい」の牛

二〇一一年三月十一日、午後二時四十六分。大きな地ひびきとともに、あの東日本大震災ひがしにっぽんだいしんさいが起こった。

福島県飯館村いいたてむらでは、震度六弱のゆれが起き、屋根がわらが落ちたり、田畑に地われが起きたりするなど、たくさんひがいの被害ひがいが出た。しかし、飯館村の被害は、建物や物がこわれるだけではおさまらなかった。

福島第一原子力発電所の爆発ばくはつにより、放射性物質①ほうしやせいぶつしつをふくんだ雨や雪が、福島県内各地にふり注いだ。原子力発電所から三十〜四十キロメートルもはなれている飯館村にも、風向きや雨のえいきょうで、たくさんの放射性物質しじがふり注いだ。そのため、国から全村ぜんそんひなん（全住人が村から出て行くこと）を指示され、村民は村をはなれることになった。

これは、飯館村で牛を育てていた、小林さんこばやしの体験である。

飯館村には、「飯館牛いいたてぎゅう」というおいしくて有名な肉牛を育てる農家がたくさんありました。しかし、四月二十二日、国から、「二か月以内に村外へひなんしてください。」という指示があり、ほとんどの農家が、牛を手放すことになりました。わずか一か月の間に、牛を育てられる土地を見つけて、ひなんを続けながら牛を育てるのは、たいへんむずかしいことだったからです。

しかし、小林さんには、三十年間大切に育ててきた牛を手放



小林さんが育てている子牛

までいの牛

「までい」は「ゆっくり」「ていねい」という意味の飯館村でも使われている方言。ここでは、ていねいに育てられた飯館牛をさす。

① 放射線を出す物質ぶつしつのこと。

して生活することなど考えられませんでした。牛を飼う仲間を頼って、飼っていた二十頭の牛を、宮城県の牧場で預かってもらうことができました。それでも、小林さんの牧場には、八十頭近い牛が残っていました。「親戚や友達がたくさんいる福島県でなんとか牛を育てられないだろうか。」と、県内の牧場を探し続けましたが、都合のよい場所は見つかりません。一時は、「牛を手放して、牧場をとじた方が楽ではないか。」という気持ちにもなりました。

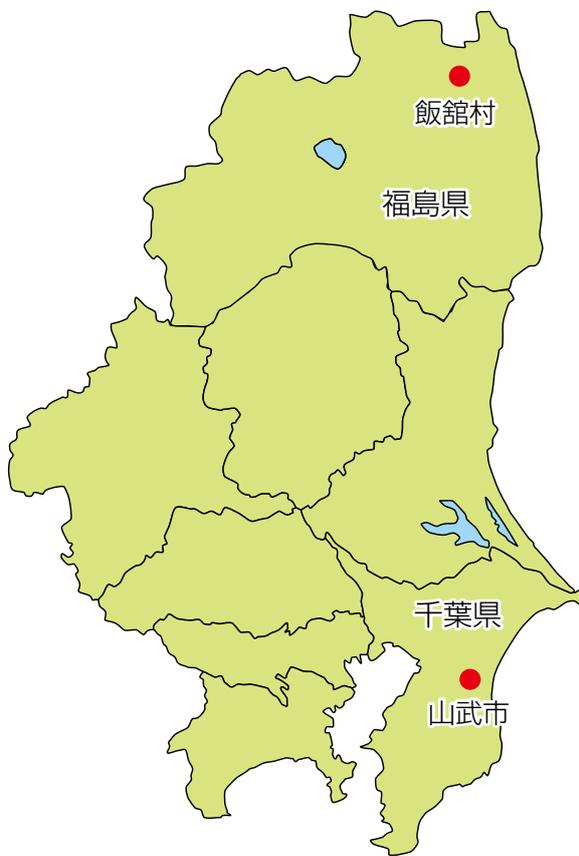
それでも、「自分が愛情をこめて育てた牛を手放さずに育て続けたい。」という強い思いが、小林さんに牧場さがしを続けさせました。

そして、やっと見つかった牧場は、千葉県山武市にありました。飯館村からは三百七十キロメートルも離れた場所で、福島県の親戚や友達とはそう簡単には会えない距離でした。

小林さんは、牛の命を守り、いっしょに生きていくためには、この牧場に牛をひなんさせ、夫婦二人で育てていくしかないかと決断しました。

それから小林さん夫婦は、大変な日々を過ごしました。

牛の移動には、専用のトラックを使わなければなりません。専用のトラックに乗せられる牛は多くても七、八頭です。片道



福島県飯館村から千葉県山武市までは370kmある。高速道路を使っても片道6時間かかる。

六時間かけて運べる牛は限かぎられています。さらに、おなかに赤ちゃんがいる牛や、生まれて四日しかたっていない子牛もいて、積み下ろしにも注意する必要があります。

そんな小林さんの大変さを聞いて、昔からの仲間たちが応援おうえんにかけつけてくれました。同じ牛を育てている仲間たちは、トラックを貸かしてくれただけでなく、牛の積み下ろしや移動も手て伝つたってくれたのです。そのおかげで、約八十頭の牛をようやく山武市さんむしに移動させることができました。

しかし、山武市の牧場は、長い間使われていなかった牧場でした。小林さん夫婦は、ここが、飯館村と同じような環境かんきょうになるように、こわれているさくを直したり、草をかつたりして必死に働きました。

あの震災から一年半がたち、移動や慣なれない環境でストレスをためていた牛たちもようやく落ち着き、小林さんも前と同じように牛の世話ができるようになりました。

小林さんは言います。

「わたしが育てた牛は、食べてもらえばちがいが分かります。牛への愛情はだれにも負けません。わたしが育てた牛を消費者が食べ、えがおになったり、幸せを感じたりしてくれることが、



毎朝、一頭一頭ひょうじょうの表情を見て声をかけながら、牛の健康じょうたい状態かくにんを確認する小林さん

わたしの仕事の大きな役割やくわりだと考えています。」
小林さんは、今日も早朝から牛の健康状態じょうたいを確認かくにんしながら、えさをあげていることでしょう。一頭一頭の牛に、まですいに声をかけながら。

〔教材作成委員会〕作成



中
学
校
編



いま新しき力あふれて

二〇一一年（平成二十三年）三月十一日金曜日、午後二時四十六分は、卒業式の余韻が残る時間だった。ぼくたちは、今まで体験したことのない巨大地震に襲われた。マグニチュード九という観測史上世界四番目の規模の大地震である。幸い僕の家は、本棚からCDが少し落ちた程度で大丈夫だったが、停電のため、暗い夜を過ごすことになった。

その夜、ラジオ、ローソク、懐中電灯、ランタン……。暖をとるためにも明かりをとるためにもありとあらゆるものが頼りだった。ぼくは生まれてはじめて感じる電気のない不便さ、そして情報のない不安を味わうことになった。

その夜は、親子四人で同じ部屋に布団を並べて寝た。遠くから、「ゴォー」という音が聞こえてくると、その直後大きな揺れの余震が何度も起きる。

「学校みんなは大丈夫なのかな。学校には行けるのかな。」と考えると、ぼくは、なかなか眠れなかった。翌朝、両親とともに車で様子を見に学校に向かった。

N中の校舎や体育館は見る影もなかった。壁のあちこちには、大きなひび割れが縦、横、斜めに走り、校舎の下の地盤は沈んでいて、亀裂が入り、学校は悲鳴をあげているようだった。

目の前の信じられない光景に、思わず声を上げた。
「こんなことがあっていいのだろうか。これからどうなるんだろう……。」

そして、原子力発電所の爆発事故が起きたのだ。

その日から学校は休校になり、仲間とも会えなくなった。しばらく校舎に近づかないようにとの連絡もあった。放射性物質が飛散したことは、ほくたちから校舎だけでなく、校庭やグラウンドも奪い去ってしまった。そして休みの間は、友人や野球部の仲間のことが気になり、落ち着かない日々が続いた。テレビでは毎日のように、原発事故の情報が流れるようになった。二重にも三重にも自由を奪われ、言葉にできない不安な日々が過ぎていった。

四月になり、N中は、地区の公民館で再開された。

それからしばらくして、多くの人々の協力により、仮設の校舎ができて、新しい学校生活がスタートした。フロアを仕切り、机や椅子を置いて教室を作った。仮設の教室は、隣の教室の音が聞こえ、初夏を迎える頃には、ものすごい暑さになった。また、体育の授業は、バスで移動して隣の体育館を借りて行われた。理科の実験や技術・家庭の実習、部活動も場所や活動時間が制限された。以前のような野球部の練習はできなかったが、僕たちは励まし合って欠かさず筋トレを続けることにした。

そんな中、ほくたちの旧N中校舎の取り壊しが決まった。全校集会で校長先生から、この決定の報告とともに、百歳の現役医師の日野原重明先生の言葉が紹介された。

「命は、きみたちがもっている時間です。」



血液を動かす心臓も大切、考えることのできる脳も大切です。

でも命そのものは、それを「使える時間」です。

そして、寿命とは生きている時間ではなくて、使える時間のことです。

使える時間をどう使うか考えることが、生きるということなのです。」

そうだ。僕たちには「命」がある。「使える時間」がある。そう思えたとき、僕の中で何か動き始めた。それまで、校舎が古くて不満を感じていたこともあった。でも、何よりもまた、こうして仲間と一緒に過ごせる場があり、勉強や部活動ができる場所があることの尊さに気がついた。

今回の震災では多くの命が失われた。未だ行方不明の方々も数多くいると聞く。家、職場、学校等を失った人々の中には、今なお過酷な避難生活を送っている人たちもたくさんいる。

だからこそ、今までいやいややっていた活動や、面倒くさいと思っていた勉強がとても愛おしく感じられたのだ。

今は校庭に建てられたプレハブの仮設校舎で学んでいる。二学期からは実験や実習の授業も少しずつできるようになってきた。そして、通常に近い学校生活を取り戻しながら、新しい校舎建設の準備も始まった。

屋外活動が制限される中ではあったが、野球部の活動も徐々に以前の練習メニューをこなすことができるようになってい



た。限られた時間の中で、集中して取り組んだ結果、三年の先輩は、中体連ちゅうたいれん県北地区大会で第三位という好成绩を収めることができた。ぼくたち一・二年生のチームも、中体連新人戦大会での支部大会で優勝し、県北地区大会でも第三位となった。

N中では、野球部だけでなく他の部も頑張り、素晴らしい成績を収めることができた。みんなが『N中魂』だましを見せてくれたのだ。こんな状況だからこそ、N中生一人一人が、校歌にうたわれるように「いま新しき力あふれて」、希望に向かって頑張っていると感じている。

ぼくたちは、与えられた時間を夢中で駆け抜けてきた。そして、今、活気に満ちた学校が取り戻されつつあることを誰もが感じていると思うのだ。

〔教材作成委員会〕作成



温かさを分け合って

「みっちー」。それが、新しい学校でのぼくのニックネームとなった。

四か月足らずの生活だったが、ぼくに色々なことを教えてくれた大切な日々だった。

あの三月十一日の東日本大震災は、ぼくたちの生活を一変させた。

南相馬市は原発の影響で屋内退避となり、生活面や健康面など様々なことを心配した両親は、祖父母とぼくたち兄弟を連れて埼玉の伯父の家に一時的に避難することにした。

伯父の家に着いても、両親は仕事があるため、早々に南相馬市に帰り、祖父母とぼくたち兄弟だけが埼玉に残ることになった。いつまで続くかわからない避難生活、両親の不在、そしてあまりにも急な転校の話にぼくは戸惑い、とても不安だった。

いつもは強気な小学生の弟も、心細そうにぼくにくつついていることが増えた。初めて過ごす伯父の家、初めての町、慣れないことばかりの生活が始まった。



そして、転校初日。これからの学生生活がどうなるのか不安に思っていたほくにとって、「みっちー」というニックネームは思いがけないものだった。初めてなのに、親しく声をかけ色々教えてくれる級友にほくはとても安心した。埼玉の学校でも頑張ろう、という気持ちがわいてきた。

そんなある日、ほくは新聞を見て驚いた。福島から来た小学生が、転校先で「放射能がうつる」と言われたというのだ。さらに、病院で診察を断られる、レストランの入店を拒否される、スクリーニング検査を受けた証明がないと入れない施設がある、いわきナンバーの車がパンクさせられるなど、放射能による差別があちこちで報道されるようになった。同じ福島県内ですら、浜通りから来た人に対して「放射能が来た」と言ったという話を聞いた時は、耳を疑った。

どうして、こんな差別をする人たちがいるのだろうか。放射能差別とでもいふべきニュースを見るたびに、ほくは怒りと共にとても悲しい気持ちになった。それを両親に話すと、「四月に入ってから、食料やガソリンなどを積んだトラックが仙台までよく来るようになったよ。でも、『放射性物質で汚染されるから、南相馬市まで運びたくない。』と言っている人もいるね。何とかお願いして相馬市まで運んでくれても、そこから先は危険だから行きたくないという人は、やっぱりいるんだよ。目に見えないから心配なんだね。」と話してくれた。食料がなければ店も開かず、食べるものが手に入らない。軽油がなければがれきをどかさ重機も使えない。地震や津波の被害をまぬかれ、町を何とかしようと思っっている人たちはたくさんいたが、生活することが難しくなり、町を離れる人は後をたたなかつたそうだ。

また、警戒区域では行方不明の家族すら探せない、遺体が見つかつて放射線物質などの関係で家族でも触れることができなかったという。それがどれほどつらいことか、ほくには想像もつかない。八月が終わろうとする今も、田んぼには漁船が転がり、がれきは集められたものの、あちこちに積み上げられたままだ。震災は当たり前と思っていた景色も生活も、すっかり変えてしまった。



ぼくは、これまで人権についてあまり考えたことがなかった。しかし、震災後の生活を振り返って、震災以前の当たり前と思っていた生活がどれほど大切なものなのか、ぼくたちを守ってくれていたものがどれほどたくさんあったのかに気づかされた。

家族と一緒に暮らすこと。学校に行って勉強したり、校庭で思い切り体を動かしたりすること。公園の芝生の上に寝転がること。原発の事故で差別されないこと。震災という出来事が、これほどたくさんの「人権」に関わってくるようになるとは思いませんでした。

千年に一度の大津波。起こることを想定していなかった原発問題。自然の驚異や科学技術の進歩によって、これから先も色々なことが起こるだろう。困っている人、大変な思いをする人がたくさんいる中で、全ての人権を守るのは、とても難しいことが今回の震災でわかった。しかし、だからこそ、放射能による差別や風評被害などを傷つけるような問題は起こってほしくないと思う。震災以降差別に関する残念なニュースは多かったが、それ以上に心が温かくなる話の方が多かった。大変な時だからこそ、助け合うことが大切

であることを、ぼくはこの震災を通して学んだ。たくさんの人に支えられて、ぼくたちは生きている。そのことを忘れなければ、人を傷つける言葉や相手を考えない言動をとることはないと思う。

「みっちー」と温かく迎えてくれた埼玉の友人たち、不安をなくすために温かい言葉をかけてくれた先生方を、ぼくは絶対忘れない。そして、大変な中でも普通の生活に戻そうと工夫してきた原町二中のみんなや先生方の強さも。ぼくもその温かさを他の人に分けられる人間になりたいし、どんなことがあっても強く生きていく心を持てる人になろうと強く思う。

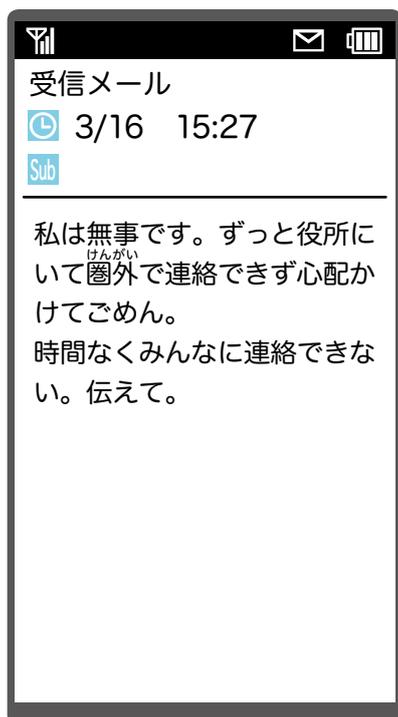
(平成二十三年度第三十一回全国中学生人権作文コンテスト「生徒作文」)

大切なひと

私のもとに一通のメールが届いた。

宮城県石巻市役所で働いている友人からのメールだった。震災直後から彼女との連絡が取れない日々が続いていた。

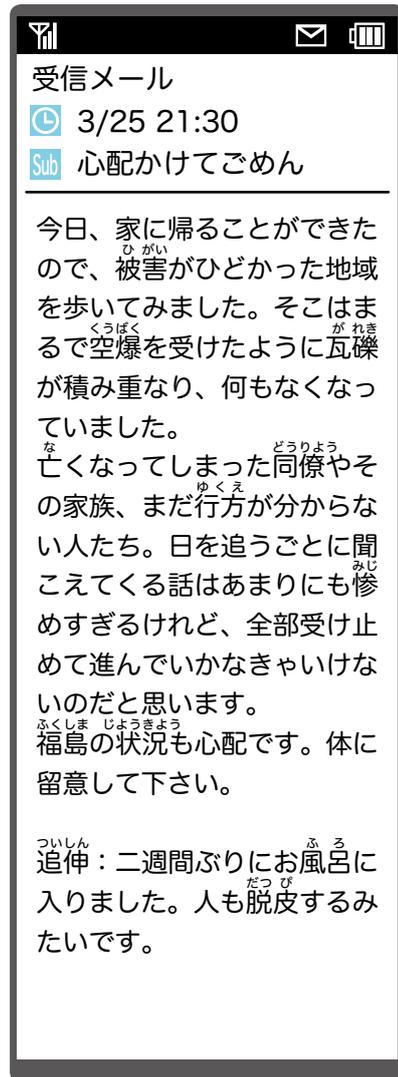
一向につながらない携帯電話、テレビで繰り返し流れる石巻市の悲惨な映像に、彼女の最悪の事態が頭をよぎっていたところだった。



私は、勤務している中学校の廊下にたたずみ、何度も何度も読み返した。涙があとからあとからあふれてきて止まらなかった。

この頃、福島では混乱が続いていた。原発事故の状況が悪化する中、水やガソリンを求めて、あちらこちらで行列ができていた。

そんな折、彼女からの二通めのメールが届いた。



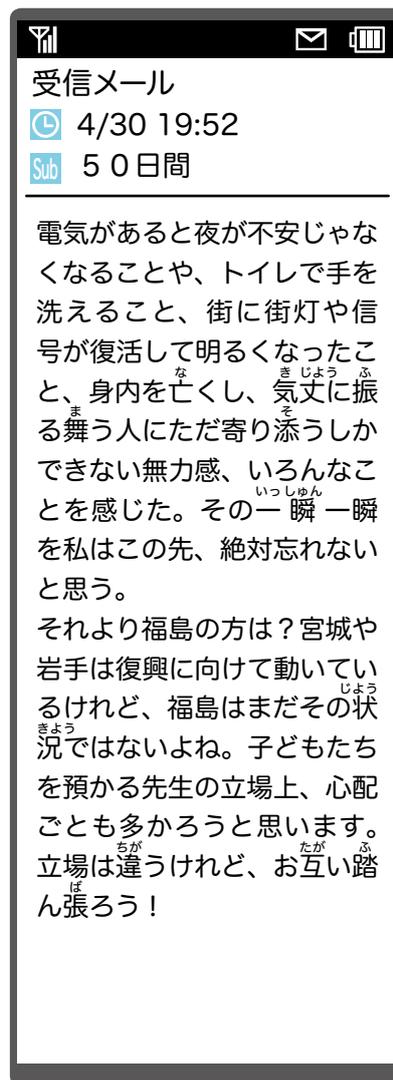
彼女は福島県出身だ。実家は原発から三十一キロ地点にあったので、ふるさとのことも家族のことも殊ことの外ほか心配だっただに違ちがいない。

彼女のメールには、壮絶な経験をしながらも泣き言はなかった。私は、友人に対してこれまで見たことのない強さを感じていた。

その一方で、不安ばかりを口にしていた自分が恥はずかしかった。私も目の前の生徒のためにできることを精一杯せいいつぱいしていこうと心を決めた。

それからひと月が経った頃、彼女からメールが届いた。





このメールの後、私は彼女に会いに行こうと心に決めた。

ガタガタの東北道を走って石巻市にたどり着くと、市内は、目を疑うような光景が広がっていた。津波で流され、民家に突っ込んでいる車や、炎が上がった地域では家々が黒く焦げていた。無数の車や家屋に「捜索済（中に人はいないという意味）」の貼り紙が貼られていた。待ち合わせの場所で互いの姿を確認すると、走って行って抱き合いながら互いの無事を喜んだ。彼女の笑顔に、心からほっとした。

震災直後から、彼女は、混乱した現場で必死に市民の対応に当たっていたそうだ。避難所の市民に最初の食料が行き渡るまで三日間。その間、彼女が口にできたのは、机の引き出しの中にあつたあめ玉だけだったそうだ。そして最初のメールは、バスの運転手から「途中五分ほど電波の届きやすいところを通ります。連絡したい人がいたら、今のうちにメールの文面を作っておいてください。」と言われて、やっとの思いで送ったものだった。

私は、思わず最初のメールを読み返した。そして声を出して泣いてしまった。

その日の夜、視界が様変わりした。照明が津波で全部流されたために、海と陸との区別がつかない暗闇が



受信メール
 10/8 18:56
 Sub いま思うこと

同い年の同僚どうりょうが震災による火事で亡くなりました。今までいた人が突然とつぜんなくなるということは、あの震災以来、有り得ないことではなく、私たちは生かされているんだと思うようになったよ。

今一番強く思うことは、いつ何があってもおかしくない毎日だから、人と別れるときには、できるだけ名残なごりがないように「ありがとう」とか「ごめんなさい」とかちゃんと言うことは言って別れなきゃならないなと感じます、強く。

一人では何にもできない私だけど、自分の役割をちゃんと見つけて生きていきたいです。

〔教材作成委員会〕作成

広がった。

「こんな状況の中で、頑張がんばってきたんだ。」

彼女の今日までのことを思うと、私は胸がいっぱいになった。彼女は、私にとって今まで以上に大切なひとになっていった。石巻市を訪れ、彼女に会えたことは、私にとつて確実に大きな力を与えてくれたからだ。

その後、転勤があり、私には新しい生徒との出会いがあった。新しい学校には、避難ひなんしてきた生徒がいる。これまで頑張った生徒たち。今なお頑張っている生徒たち。

私の「大切なひと」である彼女への思いを重ねながら踏ん張った毎日を思いだし、今度はこの子どもたちと踏ん張ろう。

震災しんさいから半年が経過した十月、彼女からメールが届いた。

よみがえれ！

安波祭

それは、一枚の写真を欲しがったしげさんの思いから始まった。

「安波祭の写真をお持ちの方、どうか譲っていただけませんか。津波で流されてしまって何も残っておりません。私のふるさと請戸の祭りの写真です。」

しげさんの想いは、やがて新聞にも取り上げられ、多くの人々からしげさんのもとに、写真が集まった。写真は、その後、祭りを復活させよう、請戸を復興させようという思いにつながっていった。

私が安波祭の田植踊りに参加したいと思ったきっかけは、離ればなれになった友達に会えるという気持ちからだった。避難先の学校には、もとの学校の三分の一しか友達がいない。仲のよかった尚ちゃんたかは東京に転校し、彩ちゃんあやは二本松市の仮設住宅から学校に通っている。私は、郡山の叔母の家から新しい中学校に通い始めた。

しげさんが二本松で田植踊りに参加する子どもを探していると聞いたとき、私の心は、「みんなに会いたい。」という思いでいっぱいだった。お祭りは、どこでやろうと構わない。また、みんなに会える。彩ちゃんに会いたい。そのことが私にとっては大切なことだった。

もちろん、新しい学校で友達もできた。ただ、時々何か足りないと思う。いつも波の音を聞いて育ったからかも知れない。請戸を出たあの日から、やっぱり何かが違う。なんで請戸には帰れないんだろう。



安波祭
双葉郡浪江町請戸
に伝わる祭り。



田植踊りの役は三つある。まず太鼓たたきの「中ぶち」^{①なか}である。音でみんなをリードする、いわば、音頭^{おんど}取りである。

花笠に赤い着物を着るのは、「早乙女」^{②さおとめ}と呼ばれる女性役。参加する子どもの中でも小さい子の役だ。手ぬぐいではちまき姿の「才蔵」^{③さいぞう}は、力仕事を得意とする男性役。だから大きいお姉さんたちが役をになう。

練習会の前日、私はなかなか眠れ^{ねむ}なかった。二本松市の仮設住宅にいる彩ちゃん^{あやちゃん}と会うのは半年ぶりだ。話すことがいっぱいある。しげさんの話だと、彩ちゃんは中ぶちを希望しているらしい。私も太鼓たたきかな。彩ちゃんとなら息も合うはずだ。

練習会の朝、予定より早く公民館に着いた私は、子どもたちの輪から少し離れた^{はな}ところに彩ちゃんを見つけ、駆け出そう^{はな}としてはっとした。

少し背が伸びた彩ちゃんが、困ったような顔をして立っていた。

「彩ちゃん、元気だった。」

「うん。」

「部活、何に入ったの。」

「入ってない。」

話は弾まなかった。私の知っている彩ちゃんじゃないみたいだ。

彩ちゃんは、津波でおばあちゃんと家を失った。あんなに大好きだったおばあちゃんが亡くなったんだもの。彩ちゃん、私に何ができるだろう。

「中ぶちを引き受けてくれた彩と佳奈^{かな}。こっち来て太鼓持ってみな。」
 気まずい二人を取り持ってくれたのは、保存会長のしのじいだった。



③ 才蔵



② 早乙女



① 中ぶち

「そうか。そうか。赤い着物で踊っていた彩と佳奈が中ぶちに昇進とは、しのじいも年をとるわけだ。」

私は、彩ちゃんと話せないもどかしさをしのじいにおつけてみた。

「安波祭は港の祭りだったんでしょ。請戸でやらないと意味がないんじゃないの。」

「そうだな。しのじいも昔はそこにこだわっていた。だけど、今は少し違うんだ。堤防作って津波に備えてはいたけれど、結局は役に立たなかった。」

十八歳で漁師になったしのじいが、遠くを見ながら言葉を続ける。

「請戸の海岸は、春は穏やかだが、秋ともなれば、怒とうのごとく、波が白い牙となって砂浜に押し寄せる。安波祭は、もともとは海を鎮める漁師の祭りだった。だから船方以外は参加できない祭りだったんだよ。」

しのじいの話によると、海上の安全と豊漁・豊作を祈る安波祭は二度、中断の危機に見舞われている。一度目は、祭りをつかさどる漁師たちの生活の変化によるものだった。一年の半分は漁に出て、半分は耕作する生活が、祭りを時代とともに変えていった。そして祭りをつかさどった船方衆から、町の青年会に所属する若者へと変わっていった。

二度目は、町に残る若者も時代とともに少なくなって、田植踊りの踊り手が消えかけたときだ。祭りをつかさどる若者がいない。この事態に保存会は、田植踊りを絶やさないために、踊り手を女性や子どもたちに引き継いだ。豊漁と豊作を祈る祭りは、いつしか若者から子どもに託され、途切れることなく続いているという。



② 荒れ狂う大波。激しい勢いで押し寄せる様子のたとえ。

③ 船に乗って働く人。船乗り。

彩ちゃんがぼつりと言った。

「しのじい、そんな大切なお祭りなのに、私でも役に立てるのかな。」

「ああ。安波祭はどんな困難も乗り越えて千年以上も受け継がれてきた祭りなんだよ。祈りはどこにいたって通じるもんさ。さて、彩と佳奈は、何を願いながら踊ってくれるのかな。」

しのじいの言葉に私たちは大きくうなずいた。さっきまでの彩ちゃんの不安な表情は消えていた。

「佳奈、さっきはごめん。」

「彩ちゃん、佳奈には遠慮しないでね。」

「新しい生活で、自分に負けそうだった……。」

そういって、彩ちゃんは涙ぐんだ。

「佳奈は彩ちゃんに負けないからね。だから、彩ちゃんも佳奈に負けないで。そうしたら、きっと二人とも強くなる。」

「本当だ。」

彩ちゃんが笑った。

「彩と佳奈もこつちへおいで。衣装を合わせてあげるから。」

しげさんの甲高い声かんだかが響く。

「佳奈、私、負けないよ。」

勢いよく走り出す彩ちゃんの背中を追って、思わず私も駆け出した。



〔教材作成委員会〕作成

ヒューストン日本語補習校だより

中学一年生のぼくは、父の転勤でヒューストンにやって来た。小学校時代の友達は、日本での楽しい中学校生活を手紙に書いて送ってくれる。それが羨ましいぼくは、なかなか返事を書く気になれずにいた。

三月十一日は晴れていた。ぼくが、東日本大震災のことを知ったのは、テレビのニュースからだ。ぼくの目に飛び込んできた映像は、映画の世界のようで衝撃的だった。特に福島は、原発の事故が追い打ちをかけていた。

「日本は、福島は、大丈夫なのだろうか。」



一週間後、^①中学部と高等部の生徒が中心となって義援金活動を始めるところになった。ぼくは内心、募金はそんなに集まらないのではないかと思っていた。

準備が進み、募金活動の初日。ぼくは、おこづかいの中から一ドルを持って、急いで学校へ向かった。昇降口では、中学部の中島くんが一所懸命に募金を呼びかけている。校地内では、送迎する保護者の車を洗っている生徒もいた。

「なんで朝から車なんか洗っているんだろう。」
よく見ると、高等部の先輩は、道行く人にチョコレート菓子^{かし}を売っている。ぼくは、昇降口でとりあえず一ドルを募金して、教室に向かった。後か

ヒューストン日本語補習校

テキサス州ヒューストンにある、日本人に対して国語等の内容を土曜日に補習授業として行う学校。全日制の日本人学校とは異なる。

① 日本の中学校・高等学校のこと

ら分かったことだが、中学部と高等部の生徒は、みんな働いてお金をもらい、そのお金を募金していたらしい。ぼくは驚いた。何もせずにお金だけ持ってきて募金をしたぼくは、何だかきまりが悪かった。

翌週も募金活動は続いた。まだ、友達らしい友達がいなくてぼくにとっては、車を洗ってお金をもらい、そのお金を募金する活動に参加できずにいた。

一歩が踏み出せない。

「ぼくもやるよ！」

のひと言が言えないのだ。ぼくは、そそくさと募金箱に一ドルと今朝カバンの中から見つけた五十円玉を入れて、昇降口で振り返った。楽しそうに車を洗う友達の姿がまぶしく見える。思わずため息が出た。

すると、ぼくの後ろから校長先生の声が聞こえた。

「君はやらないのか。遠慮するなよ。よいことは、堂々とやればいいんだよ。」

ぼくは、何か自分の胸の中にあってもやもやしたものが、すっと消えていくような気がして、慌てて校長先生に会釈した。

次の土曜日、ぼくは、今日こそは車を洗おうと決めていた。しかし、「ぼくもやるよ。」のひと言がどうしても言えない。

そのときだ。送迎で来ているお母さんに声をかけられた。

「私の車もお願いできないかしら。」

ぼくは思わず、「少し、少し、待っていただけますか。」と答えると、思わずみんなのところに駆け出した。

それから夢中だった。助けを求めるぼくに、みんなは喜んで手伝って





くれた。おまけに中島くんは「ミノルが初めて請け負ったお客さんの車だよ。」と紹介したから、みんなはおおいに張り切ってくれた。

ぼくの気持ちとは裏腹に、喜んで協力してくれたのだ。

ぼくは、びしょびしょになりながら車を洗った。はじめは照れくさかったが、やってみると面白い。そして、少しずつ慣れてきて、車がびかびかになる頃にはすっかり楽しくなった。今まであまり話したことがなかった友達とも、自然に話すことができた。そして、洗車が終わると、友達のお母さんはニコニコしてぼくに二ドルを手渡した。二ドルはぼくの手の中で重たかった。

ぼくは初めて自分で稼いだお金を募金した。そして、やっとぼくもヒューストン日本語補習校の一員になれたような気がした。

学校だよりに掲載された募金額の合計は、三千二百七十六ドル十六セント（日本円にして約二十六万円）と五十円。おまけのように記された五十円玉は、ぼくの入れたものだった。

あの時の校長先生のひと言が耳に残っている。

「よーいとは、堂々とやればいいんだよ。」

気がつくとも土曜日が待ち遠しい自分がいた。そうだ。日本に手紙を書こう。このことを日本で頑張っている友達にも報告しようと思う。ぼくのヒューストン日本語補習校だよりとして。

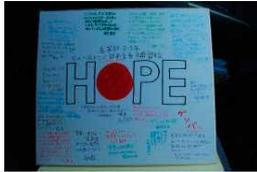
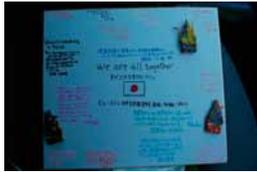
〔教材作成委員会〕作成

平成23(2011)年8月6日第99号

学校だより

ヒューストン日本語補習校
 Japanese Educational Institute of Houston
 12651 Briar Forest Drive, Suite 105, Houston, Texas 77077
 Tel. 281-531-6743 / Fax. 281-531-6795 (事務局 火~金曜日)
 Tel. / Fax. 713-973-0659 (職員室 土曜日のみ)
 E-mail: jlssh@jeihouston.org Home Page: www.jeihouston.org

東日本大震災義援金 福島県教育委員会に届けました



健康診断等の用務で一時的帰国中の中島満校長は、去る7月11日(月)、帰省先である石川県から北陸自動車道、磐越道、東北道経由で福島県教育委員会まで、往復約1,000km車を走らせました。昼少し前に福島県庁に到着し、学校生活健康課を訪れました。事前に到着時間を連絡してあったので、吉田尚課長さんをはじめ関係者と面談し園児、児童生徒、保護者等からの義援金と中高等部からの激励色紙5枚を福島県教育委員会に届けました。

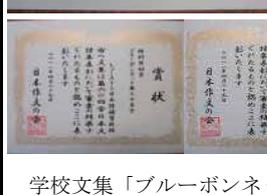
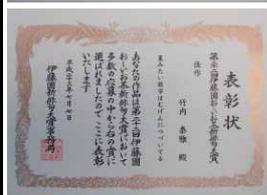
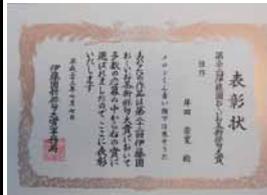
ヒューストン日本語補習校での募金額は3,276ドルと50円でしたが、円高と換金手数料1ドル当たり2円、と言う事で、255,888円となりました。

「遠くからわざわざ届けていただいた・・・。」と大変喜んでいただき、「福島県の子もたちの教育に使わせていただきます。」と課長さんは話していました。また「ヒューストンの皆様」に心から感謝していることをお伝えください。」と依頼されました。

募金活動にご協力いただいた皆さんの熱い思いをしっかりと伝えることが出来たと実感致しました。ご支援をいただいた多くの皆様に心から感謝申し上げます。

表彰状・賞状が届きました

～伊藤園新俳句大賞事務局・日本作文会から～



第2回伊藤園お〜いお茶新俳句大賞で、佳作に入賞した3名への表彰状が補習校に送られてきました。佳作入賞者は岸田崇寛君(小3A)、竹内泰雅君(小3B)、川瀬直輝君(帰国・中1年)の3名でした。

ほぼ在校生が揃う9月3日(土)表彰状を伝達致します。また、漢字検定の結果も届いたので結果の配布・伝達を本日8月6日に行い、伝達式を9月3日表彰状の伝達と合わせ行います。表彰を受けた3名に大きな拍手を送ります。

また、前にも学校便りに掲載しましたが、日本作文の会に応募した学校文集等の賞状も送られてきました。

学校文集「ブルーボンネット第35集」は特別賞、「平和について考えよう」(佐藤暁子先生編著)は学習文集賞、「卒業文集平成22年度」(宗吉康子先生編集)は新人賞、「学校便り平成21年度」・「学校便り22年度」(中島満編著)は特別賞です。先生方のガンバリに拍手致します。

以上、表彰状等を写真で紹介します。(学校便りの賞状略)。写真上から、岸田君・竹内君・川瀬君。そして、賞状は、左から学校賞のブルーボンネット・佐藤先生、宗吉先生。児童生徒の皆さんが一生懸命に学習に励んだ成果です。今後の益々の活躍を期待します。

塩むすび

三月十一日の東日本大震災から二か月、避難先を二度移動した祖母と母、私の三人は、K市にあるY小学校の体育館での生活が続いていた。布団が敷き詰められた居住スペースは、相変わらず窮屈だが、ここでの生活にも少しずつ慣れてきたところだった。

この避難所は人の入れ替わりが激しい。新たにできた仮設住宅へ移る人やアパートへ転居する人、県外へ避難する人など様々である。はじめは百二十人程いた人々も今では七十人程度である。昼間は仕事を探して留守にしている場合が多いが、夕方になると戻ってくる。

避難生活が始まった当初は、支援団体による生活の支援があったが、徐々に自分たちで仕事の分担をするようになった。朝のゴミ捨て、掃除、支援物資の運搬、積み込み、入浴施設の清掃等。それらの中でなんといっても大変なのは、一日三回の食事の準備だ。食事係の募集が呼びかけられてもなかなか決まらない。ようやく食事係が決まっても人の入れ替わりが激しかったり、都合で食事係ができない場合があったりで、食事の時間は混乱する場面が多かった。

転校先の中学校が決まり、学校に通い始める少し前のことだった。二回目の募集の際に、母に促されて私も食事係を担当することになった。これまでは、できたものを取りに行くだけで、片付けだけでも面倒くさ



いと思っていた。それなのに自分が作る方の立場になったのだ。実際、調理場は慌ただしい。栄養士さんが献立と分量を決める。それに合わせて食材を切ったり、味付けをしていく。いざその一員になると知らない人ばかりだし、どう動いていいかわからない。私は思わず母に、

「学校が始まるんだよ。忙しいんだからね。」

と当たっていた。

食事係になって二日目。調理場では、最近残菜が目立ってきたことが話題になっていた。疲労がたまつて体力も落ち、一日動かずに過ごす人にとっては、お腹も空かないらしい。毎日の食事の量は、目に見えて減っていった。当然、作り置きしている冷たいご飯は、そういう状況では食欲をそそるものではなかった。

「ずいぶんせきをしている人が増えたみたい。このままではみんなの健康が心配だわ。」

「なんとかみんなに喜んでもらえる食事を提供する方法はないものかしら。」

「ああ。早く避難所を出て、自分の家であつたかいご飯とおみそ汁が食べたいな。」

「そうね。ここでは、温かい食べ物は何よりもごちそうよ。」

「明日の朝は、私たちが温かいご飯とおみそ汁を出しましょうよ。」

「おにぎりなんてどうかしら。朝早いから塩むすび。」

（えっ、もっと早起きして集まるの。しかも塩むすびだなんて。具ものりもないおにぎりなんておいしいのかな。）

やっと今の仕事に慣れてきた私は、心の中で賛成しかねていた。けれども、避難所にいる人々の先の健康を考えると他に思いつくアイデアはなかった。

結局、この提案にみんなが賛成し、朝の集合時間を早めて、炊きたたのご飯でおにぎりとおみそ汁を作るこ

とになった。眠い目をこすりながら調理場に行くと、すでにみんなそろっている。ご飯も炊き上がっていた。

塩むすびを当番みんなで、「熱い、熱い。」と言いながら握る。おばさんたちの手はもう真つ赤だ。私も、おそるおそる握ってみる。形は悪いが、とにかく握った。七十人が二個ずつ食べるには百四十個も握らなければならない。私の手も真つ赤になった。

驚いたことに、おにぎりしたら毎朝たくさんの子どもが自分から取りにきたのだ。塩むすびは子どもだけでなく、大人にも人気があり、二個、三個とお代わりをする人も増えてきた。

「ありがとう。おいしかったよ。」と言われた私は、照れくさくてしかたがなかった。

ご飯は、いつもおばさんたちが交代で炊いてくれる。塩加減も抜群だ。どうしたらあんなに早く握れるのだろう。私が一個握るうちに三個は握っている。しかも、目に見えないところでもおばさんたちの気配りはずい。

塩むすびを配るときにいつも明るく、「いつてらっしやい。」と声をかける先崎さん。片付けの手際がいい高橋さんは、最後の人が食器を片付けるまで待っていて、汚れた床を雑巾でいつも丁寧^{ていねい}に拭く。夜に布巾^{ふきん}を干しているのも知らなかった。大和田^{おおわだ}さんは、食材を組み合わせて、得意のわさび漬^{づけ}けを振る舞^まつてくれる。おばさんたちの頑張り^{がんば}りを見たら自分も何かしなくてはという気になってくる。

自分の知らなかった世界で、初めて考えさせられたことがある。温かい塩むすびと食事係を勧めた母に感



謝だ。新しい学校への不安と期待はあるが、食事係で新しい世界を知った私のように、やってみなければ分からないことだってあるはずだ。

私は温かい塩むすびを一口頬張った。口の中に広がるお米の甘みと優しい塩加減が絶妙だ。何よりその温かさが体中にしみ渡る。そして温かい塩むすびに感謝したのは私だけではなかったようだ。あの日以来、朝の残菜はほとんど無くなったのだから。

塩むすび にぎり続けた 手が赤い
被災地で 心にしみる 塩むすび



平成二十三年度「十七字のふれあい事業」応募作品より

〔教材作成委員会〕作成

ありがとうの唄

四月六日。始業式。今日からいよいよ三年生だ。

その日、ナツちゃんが転校してきた。そして、タクがいなくなった。タクの家の引越しと共に転校していった。震災以降、転校する生徒がいる。中学校生活もあと一年。この時期に転校しなければならぬことを思うと切なくなる。みんなに挨拶することもなく、学校に置きっぱなしのこまごまとした荷物を片付けることもなく、タクは遠くの県に転校していった。

五月の連休が終わり、コウくんが転入してきた。これで四組は三十一名……と思ったら、またすぐにマーちゃんが転入してきた。これで三十二名。

一学期も終わりがけたころ、合唱コンクールで何を歌おうかという話になった。私は今年こそ伴奏者賞をとりたいと思っていた。去年、クラス合唱は金賞だったけれども、私は伴奏者賞がとれなかった。「目指せ、二連覇。伴奏者賞。」頑張るしかない。そう決意した矢先、先生が予想外のことを言い出した。

「自分たちで作詞・作曲をして、みんなで歌おう。作詞はみんなでひと言ずつ出し合って、それをまとめる。作曲コンクールで賞をとったことがあるからモモが曲をつければ大丈夫。それを、指揮者も伴奏者も立てないで、みんなで歌おう。」

とんでもない。できるわけがない。

きつと、ほとんどの人が直感的にそう思ったに違いない。二年生のとき、ほかのクラスの合唱はどれも上手だった。自分たちで作詞・作曲だなんて、金賞二連覇の夢を最初から諦めろとでもいうのだろうか。しかも、指揮者も伴奏者もないだなんて、無茶苦茶すぎる。作詞をみんなでやるのはともかく、なんでそれに

私が曲をつけるの。私がやりたいのは伴奏で、作曲じゃない。絶対にイヤだ。そんな提案は受け入れられない。

一進一退の話し合い。なかなか決まらない。意見は割れ、何も決まらないまま、何日かが過ぎていった。このままでは夏休みに突入にゅうしてしまう。早くしないと伴奏の練習だつてできない。もつとも伴奏があるのかどうかさえ決まらないのだが……。

そこで、今日は一人一人の気持ちをとことん発表しようということになった。

何人かの発言に続いてさらに一人が手を挙げた。マーちゃんだ。たったひと月あまり前に来たばかりのマーちゃんが、クラスの一人として手を挙げていることが何だかうれしかった。マーちゃんは遠慮がちに立ち上がった。

「私……このクラス大好きです。みんな温かくて……。」

私も、みんなもマーちゃんの言葉をじっと聞いている。

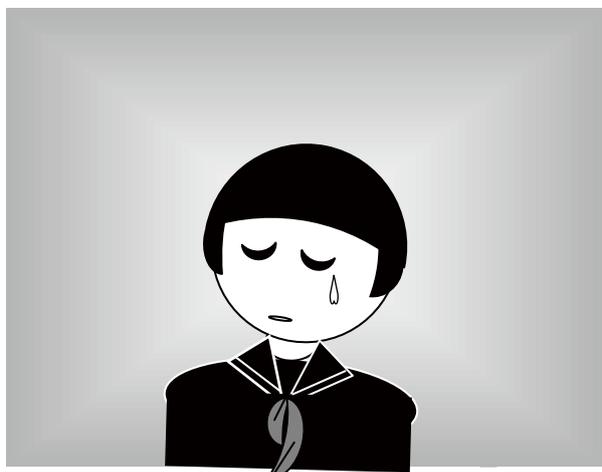
「私は、作詞・作曲をして歌う、というほうに賛成です。なぜなら……。」

マーちゃんは転校してきてひと月ちょっとだから、私がどんなに伴奏者賞をとりたいと思っているのか分かっていない。

「私、転校します。みんなといっしょのステージで歌えません。だから、だから……。」

マーちゃんが、また転校してしまうだなんて知らなかった。突然の告白に教室は静まり返った。

「せめて、作詞だけでも一緒いっしょにやりたい……。」



マーちゃんはぐしゃぐしゃに泣いていた。他にも何人か泣いていた。

私はとっさに手を挙げた。

「私は作詞・作曲でもいいかなと思います。」

あんなに迷っていたのに、そう言った。言ってしまった。

「——作曲……私はやりたくない、というわけじゃなく、ただ……こわくて……。」

私も思わず泣いてしまった。私の曲で賞がとれるのか、みんなが歌いやすい曲になるのか、なんて考えると、ここ最近、ずっと気になってしかたなかった。

最終的に、みんなで作った歌をア・カペラで合唱^①することが、全員一致で決まった。

二学期、マーちゃんの代わりに今度はミサちゃんが転入してきたので、四組は三十二名。みんなの思いを込めた、自分たちの歌を作ろう。誰^{だれ}ともなく黒板に出て、ひと言ずつ書き始めた。一人、また一人、黒板につづられる言葉は見る間にいっぱいになった。すでにここにはいないマーちゃんにも、タクにも連絡をとって言葉をもらった。この二人も、大事な大事な四組の仲間だから。

黒板を埋め^{うめ}尽くした言葉を何日もかけてつなげた。うまく収まらない言葉は、間奏部分でいうセリフにした。全員分の言葉が一つになった。歌のタイトルは『ありがとうの唄』に決まった。

コンクール当日。みんなで作った『ありがとうの唄』をみんなで心を込めて^{こめて}歌った。歌っている最中に思わずすすり泣いたサー



① 楽器の伴奏を伴わない合唱曲。

ありがとうの唄。

作詞・三年四組

泣いて 笑って 過ぎた日

三十五人の仲間とともに

あと もう一歩 届かない

あの夢を手に入れるために

後ろ向かず 前だけを見て

僕らは心に決めた

「絶対に負けない」と

夢は永遠(とわ)に 輝くから

どんなにつらくても

みんながいてくれたから 強くなれた

感謝の言葉が いっぱい

心から「ありがとう」

忘れない この言葉

あなたに伝える 「ありがとう」

強い絆と 強い気持ち

いつまでも 消えない 思いを両手に

苦い思い出が 脳裏をよぎる

あの日の記憶 悔やんだ日々

いろんな壁にぶつかり 四苦八苦

本気で泣いて

本気で笑って

本気で悩んで

涙をたくさん

流すのは 信じているから

とまどいながら

僕たちは 不確かな道を探す

互いを思い合うように

僕らの足跡は 僕らの中にあるんだ

「いつまでも」

生きてこそのお会い 「ありがとう」

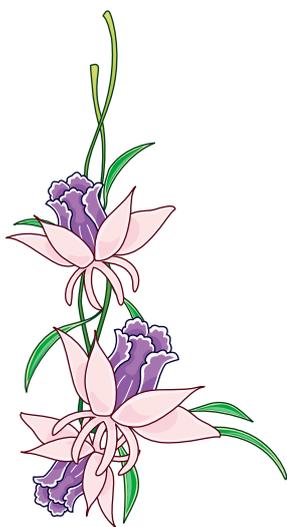
ちゃん。いや、サーちゃんだけじゃなかった。みんな泣き出しそうなのをこらえているようだった。会場からも鼻をすすっている音が聞こえてきた。

そして、表彰の時間。結果発表を待った。結局、何一つ賞はもらえなかった。けれども、みんなと一緒に連れだって帰ったあの日の空は、どういうわけか忘れられないくらいきれいな夕焼け空だった。

〔教材作成委員会〕作成



高等学校編



つむぐ命

東日本大震災以降、福島県警察は、災害現場における最前線で、住民の避難誘導活動や遺体の搜索活動、避難区域境界における検問や仮設住宅等に身を寄せる方々への訪問活動などを行ってきた。それぞれの立場で震災に立ち向かってきた記録を一冊の手記にまとめたものがある。これは、警察官や、その家族の思いを綴った手記の一部である。

「放射性物質対処班での勤務」(当時 警備部 K・T 二十代)より

〈前略〉……震災から一週間余りが経ち、私は県警本部警備本部内に

新設された放射性物質対処班での任務が課された。

当班の主な任務は

- ・ 警察職員の被ばく低減対策(被ばく管理・教養)に関する企画指導
- ・ 関係機関からの情報収集、連絡調整
- ・ 安全管理サポート班の運用計画の策定

等多岐に渡る。

これまで、放射線に関する基礎知識があった警察官はおそらくほとんどいなかったと思う。かくいう私も放射線に関する知識は皆無に等しく、初めて耳にする単位等に戸惑う日々が続いた。当初、あらゆる問い合わせが殺到し、受話器が鳴るたびにドキっとした。





しかし、今次大震災^①における警察活動の最大の障害が原発事故による放射性物質の大量放出であることから、現場で活動する警察官の不安感を払拭^{ふっしょく}することがその一番の任務だと考え、今日まで何とか踏ん張ってきた。

三月末、X線作業主任者の資格を有する者を班長に指定し、安全管理サポート班が編成された。

福島県警察が他の機関に先立ち、二十キロメートル圏内・十キロメートル圏内の捜索に従事することができたのも、「縁の下の力持ち」である彼らの活躍によるところが大きかったと思う。激務にも嫌な顔一つせず現場に向かって行った彼らを頼もしく、そして一緒に勤務できたことを誇りに思う。

現在、外に出れば多くの県外部隊の車両とすれ違う。全国警察が一丸となって福島県を支えている。本当にありがたいと、県外部隊を見かける度に胸が熱くなる。

これから、福島県警は様々な課題と向き合って行かなければならぬ
 と思う。

「お陰様で」の気持ちを忘れずに、微力ながらも私も一翼^{いちよく}を担^{たん}える
 よう真摯^{しんし}に自己の任務を遂行していく覚悟である。

「技術職としての震災対応」

（当時 科学捜査研究所 I・T 二十代）より

〈前略〉……震災から半月ほど経った頃から、私の業務に死者データベースの登録・管理が加わり、五月頃からは、その仕事に専従^{せんじゆう}することとなった。ここでは検視の結果を死者データベースに登録し、求めに応じて必要な統計を捜査面に還元するのが主な仕事であった。「君

① このたび。今回。

のパソコン操作の能力が本部に評価されたのだから精一杯やってきなさい。」と激励の言葉を受け、その意味するところを噛み締めながら、およそ二か月にわたる本部での業務に就いた。

遺体の特徴、着衣や所持品の情報、身元が判明すれば氏名や住所を入力するのだが、まだ幼い犠牲者を登録するケースもあり、とても心が痛んだ。そんな中で自分にできるのは、データを正確に登録して一日も早く遺族の元へお返しすることだと思い、ひたすらに入力を続けた。

五月に入った頃、これまでの仕事に加えて県警ホームページ掲載用の身元不明遺体リストの作成に携たずわることとなった。前述の死者データベースから身元不明遺体を抽出ちゆうしゅつして、遺品の写真を添付するまでの操作を自動化した程度のもので、手探りでこしらえたプログラムであった。当初は動作不良が多く、ちゃんと運用できるか心配しながらも、関係担当者との打合せを重ねて本運用にまでこぎ着けた。

後日、慣れないマウスを握りながら身元不明遺体リストで家族を捜すおばあさんの様子が、テレビで放映されていた。『家族を捜し出したい、でもできれば生きていてほしい。』というおばあさんの言葉から、リストを活用してもらえた喜びと、遺体で発見されたことを遺族に伝える心苦しさが交じった、複雑な感覚を覚えた。

現在は、この身元不明遺体リストをベースとして東北三県の遺体リストを組み合わせた『つむぎプロジェクト』で統合的な検索が可能になっているということである。遺体を捜す遺族に向けて、心の復興への手がかりになればと思う。……〈後略〉

「県民の安心のために」(当時) 高速道路交通警察隊 K・T 三十代)より

〈前略〉……外に出ると、道路のアスファルトは大きくうねりをあげ大きな亀裂きれつが生じ、周囲の家屋の塀や瓦が次々と落下していた。

今まで経験したことのない揺れと、悲惨な光景を見るや否や、参集しなければとふと我に返り勤務先の高速隊郡山分駐隊へと向かったのである。

分駐隊へ向かう途中、全ての信号機は滅灯^{めつとう}し、道路上にも壊れた塀や瓦が散乱し通行できない状態であった為、妨げになっている物をどかしながらやつの思いで辿り着いたのを覚えている。

分駐隊に到着すると私は直ぐさま磐越道の各ICの閉鎖、通行止めと通行車両の排除の下命^{②かめい}を受けた。

本線に入ると地震の影響で、路肩や車線上のいたる所に亀裂や陥落^{かんらく}・隆起^{りゅうき}箇所が点在し、到底高速進行は出来ない状態であった。

被害が大きい箇所では、車一台すらも通行出来ないほどの亀裂があり、本線上の全ての車両を排除しなければいつ大事故が起こってもおかしくない状態であったのである。

二次災害が起こる前に、いち早く通行車両に危険を知らせ、高速道路から出てもらわなければという逸^{はや}る気持ちで現場に急行している途中、反対車線に立ち往生している車列を認めた。

この車列は道路の大きな亀裂により通行できないで停止していたもので、その列は何キロメートルにも及んでいた。車両の運転者達は車両から降りて、怒鳴り散らしている者や取り乱している者もあり、反対車線の私たちのパトカーを見つめるや否や「何とかしろよ」「早く通してくれ」と大声をあげた。誰もが経験したことのない状況で現場は混乱^{こんらん}していたのである。

現場は、橋上^{きょうじょう}でもあり更なる余震により崩れる危険性もあったことから、私達は道路管理者との協議の上、中央分離帯のガードレールを取り壊し、反対車線へUターンさせ避難させる措置を講じるこ



② 命令を下すこと。
その命令。



とにした。

私達は緊急工事が終了するまで、本線に取り残された方に少しでも落ち着いてもらえるよう一台一台声を掛け続けたが、話を聞き入れない者や取り乱したままの運転者がほとんどだった。

しかし、ようやく中央分離帯を取り壊す工事が終了し車両が動き始めた時、どの運転者も道路管理者や警察に対し^{ねきら}労いの言葉を掛けてくれたのだ。

この労いの言葉は、動揺を隠せないでいた私にとって大きな励みとなり、自分自身を奮い立たせるきっかけとなった。

警察官である以上、私達はどんな状況でも冷静沈着に物事を判断し、対応していかなければならず、警察官が不安を隠せないで対応すればそれは相手にも伝わり、警察の任務を果たせていないのと同じである。

私は運転者に声を掛けていた時、自分自身が不安だったため、その気持ちが相手に伝わってしまったのだと思った。あの時もっと警察官としての職責を自覚し、不安でたまらない運転者一人一人に声を掛けていれば、少しは違っていたのかもしれない。

現在も避難されている方や、不安な日々を送っている方が多数いる中、警察に求められているものは多岐^{たき}にわたる。

今回の震災は私にとって、警察の立場、役割について今一度考え直すきっかけとなり、原点に戻らせてくれた。

震災を通して感じたことや学んだことを無駄にしないようしっかりと胸に受けとめ、県民のための警察官と

して少しでも期待に応えられるよう努力していきたい。

「震災で気づいたこと」(K・M 小学五年生)より

〈前略〉……両親が警察官だったことは分かっていましたが、今まで実感はありませんでした。

「悪い人を捕まえたり、パトロールしたり、人の安全を守ったり、すごいのかな……。」
ぐらいしか思っていませんでした。

しかし、この震災で、いろんなことが分かりました。

○津波から人々を守るため、自ら出動し、巻き込まれた警察官

○危険で、人の入ることのできない場所に行かなければならない警察官

○行方不明の人たちを、必死に探す警察官

○みんなのために、命をかける警察官

こんな大変な仕事だとは分かっていませんでした。

父は以前、

「お父さんは、もしかしたら、明日、悪い人にやられて、死んじゃうかもしれないんだよ。そのかくごはあるんだよ。」

と言っていました。それは冗談ではなかったのです。

この時私は、

「かくごってなあに。それだったら、私だって、明日交通事故で死んじゃうかもよ。」

と返していましたが、今思えば、とても失礼だったと反省しています。でも父は、そんな危険な立場にあるにもかかわらず、私達のことをいつも心配してくれているのです。

会津ではとてもよい生活ができました。水は止まっていなかったし、電気はつくし温かくおいしいご飯が食べられたので、福島に比べればすごく幸せでした。それでも、マスクは絶対着けて、毎日テレビの端でくる放射線量を調べてノートに記入するのが日課でした。

何日かに一回くらいは、父や母から電話がきましたが、妹たちは、電話では聞こえないように泣いていました。一番下の妹は寝る時、たまに、

「ママに会いたい。ママと寝たいよ。」

と祖母に泣きついたりしていましたが、祖母は、

「今、お父さんとお母さんは、みんなが早く、安全に普通に暮らせるように、がんばっているんだよ。」

と頭をなでていました。

普通がいかに大切ですばらしいか、しみじみと分かりました。

そして、学校が始まるということで、四月の始めに福島に戻り、

お父さんも五月に福島に帰ってきました。

福島の生活は、だんだんと戻ってきましたが、放射線や、風評被害などで、たくさんの問題をかかえています。家に帰りたくても帰れない人がたくさんいます。

今回の震災がなかったら、人と人が助け合うことや、普通の暮らしがいかに大切か、物のありがたさなど、分からなかったかもしれません。また、両親の仕事も理解できなかったかもしれません。

お父さんお母さんが、仕事に行く時や帰ってきた時は、感謝をこめて大きい声で言いたいです。

「行ってらっしゃい。」



松本本部長様へ

この1年間をふり返って

大きな地震があり津波があり、その影響で原発事故があり、多くの人が心を痛め、それが今もまだいえることなく続いている人が、たくさんいます。

当時、僕たち、普通の人ができることは、ほんの少力で、自分の力のなさや存在の小ささを感じた人はたくさんいます。

海の近くで生きてきた人たちを助け、心を支えるのに、警察の存在はとても大きかったと思います。

福島をはじめ全国から心を痛めて助けを求めている人のために、頑張ってもらっています。毎日毎日多くの車両と警察官が朝早くから被災地に向かっています。僕たちは、手を振って応援しています。

どれだけの人が助けられ、心を救われ、明日への希望につなげることができたのでしょうか。

帰りは、夜遅くに帰ってきます。「お疲れ様でした」と声をかけると、「いつもありがとう」「ただいま」「かぜひかないでね」など無線で声を返してくれました。

心も体もすごく疲れているのに、元気に声をかけてくれました。

警察官はとても強くて、それに優しいです。そんな警察官に、僕は、なるのが夢になりました。

僕はサッカーのスポ少に入り、やっています。僕のチームは試合で勝つことが多いです。チームのみんなが1つに向かって頑張っています。キャプテンをはじめ、みんなで声をかけて努力しています。

かんとくは、常に厳しいし、練習はきついけど、いつも僕たち一人一人を見て、アドバイスをしてくれます。勝った時、プレーがうまくいった時には、ほめてくれます。だから、次も勝ちたいと思えます。

かんとくは、いろいろなことを教えてくれます。あいさつの大切さ、気配りの大切さ、努力の大切さ、感謝の大切さ。だから、僕のチームはとても強いです。福島の警察もとても強いと思います。

松本本部長をかんとくに、キャプテン、チームのみんなが福島のために、勝つために頑張っているからです。

警戒区域という、人が立ち入ることのできない所を守ってくれています。

いつか帰れるその日のために、福島のためにありがとうございました。

そして、松本本部長のチームはもっともっと強くなっていくと思います。ずっと応援しています。そして、そのチームに僕も必ず入ります。警察庁にいつでも頑張ってください。

今回まとめられた手記の最後には、平成二十四年度に異動した松本県警本部長宛てに、福島県の子どもより送られた手紙が紹介されている。

「お帰りなさい。」

生きている 生きてゆく

東日本大震災後、約二五〇〇人の避難者を受け入れたビッグパレットふくしま。富岡町と川内村の人々が六か月近い避難生活を送りました。避難所内は悲しみと苦しみの声であふれていました。しかし、人々が力を合わせて避難所を一つのコミュニティにつくりあげていく中で、少しずつ、感謝と喜びのつぶやきが生まれてきました。人と人が出会って生まれたコミュニティ。困難を乗り越えていく人々のつぶやきは、私たちに「生きてゆく」勇気を与えてくれます。

初めは涙が出た。
ごはんを食べてても
ポロポロ落ちてきて、
なんで私だけと思ってた。
夫が心配して
優しい言葉をかけてくれた。
(六十代・女)



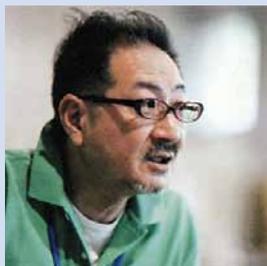
ああ温泉の香りいいねえ。
こうやって話聞いてもらうと
心が楽になる。
私はいつも相手のテンションに
合わせるようにしているの。
元気のある人には元気に。
気持ち下がっている人には
私も合わせてね。
(五十代・女)



今みたいに笑うことって
ないんだよな。
泣くことはあっても。
今後どうすっぺと思うとな。
笑うっていうのはいいことだ。
この足湯って、
話すことが大事なんだな。
こうやって話して笑うことで
心がすーっと軽くなるよ。
(五十代・男)

ビッグパレットふくしま避難所の中に生まれた支援の拠点「おだがいさまセンター」は、「ふるさと」を遠く離れて避難をしている住民の命を守るため、人々の心がつながったところに生まれる「コミュニティ」をもつ一度よみがえらせるため、今もその活動を続けています。住民の中には、避難所をつながりを保ちながら「サロン」などの自主的な運営活動をおとして、希望を見出し歩き始めている方々もいます。困難な中であっても、「ふるさと」をあきらめない、それが一人一人の命を輝かせることにつながっていると思うのです。

元ビッグパレットふくしま避難所県庁運営支援チーム 天野 和彦



毎日こうやって親切にしてもらって、本当にありがたい。
郡山の人たちには本当に感謝している。音楽聴いたり、友だちとしゃべったり、花植えたり、暇なしなんだ。
本当にそれだけで幸せなんだ。
昨日の夜は足が痛かったけど、こうやって温かいと痛みがとれる。
本当にありがたい。名前、忘れないからね。
(八十代・女)



ホント、「諦めない」って大事だと思うよ。
若い人は可能性しかないわ。
何でもできるもの。しがらみがないから。
今から、新幹線に乗って、東京行って、アメリカにだっていけるでしょ？
あなたも若いんだから、頑張って！
(六十代・女)

『生きている 生きてゆく』（ビッグパレットふくしま避難所記）刊行委員会より抜粋して掲載しています。
※つぶやきは、足湯から生まれました。その様々なつぶやきが避難所の運営に生かされました。
※本文と写真は、直接の関係はなく、したがって被写体の方の発言ではありません。



振り返って、良かったと思える人生に
しなくてはいけないよ。
退職するまで
いろいろあったけど、
いい人生だったって、
かみさんと言ってるんだ。
(六十代・男)

長崎からの手紙

「母に最後のよい思い出をつくっていただきありがとうございます。ありがとうございました。」

手紙はそう締めくくられていた。恵美子さんの死を知らせてくれた息子さんの手紙は、今も私たちの心を支え続けている。

二〇一〇年十月 出会い・「相思樹の歌（別れの曲）」

私たち、郡山商業高等学校二年生は、長崎平和公園の平和祈念像の前にいた。高校生活の最大のイベント、修学旅行で長崎を訪れ、平和を祈る歌を歌うのだ。曲は太田博作詩「相思樹の歌（別れの曲）」である。

微笑みて 吾等おくらん

すぎし日の 思い出秘めし

澄みまさる 明るきまみよ

すこやかに 幸多かれと

幸多かれと

「相思樹の歌」の作者太田博さんは、郡山商業高等学校の同窓生である。太平洋戦争末期、地上戦により多くの住民が犠牲になった沖縄に、一九四四年（昭和十九年）陸軍少尉として赴任し、米軍との決戦を前にして、動員されたひめゆり学徒隊を傘下に高射砲隊の陣地構築の指揮をとった。①そのことが機縁となり、ひめゆり学徒隊との間に交流が生まれ、卒業を祝う餞の詩として「相思樹の歌」を贈った。相思樹とは、ひめゆり学徒隊が通った学校の正門に至る一本道の両側に植えられていた樹木の名前で、この詩には曲がつけられ、戦場で過酷な運命を強いられる中、学徒隊の女子生徒によって歌われた。

沖縄戦では、ひめゆり学徒も、沖縄の住民も、そして太田博さんも亡くなった。しかし、「相思樹の歌」は、生き残ったひめゆり学徒隊の方々に歌い継がれるとともに、鎮魂歌ちんこんかとして、沖縄のひめゆり平和祈念館にも流れ、今も生き続けている。

そして、郡山商業高等学校では、先輩の功績をたたえて、平和を祈る歌として在校生に歌い継がれ、私たちも、修学旅行先の長崎で、原爆で亡くなられた方のご冥福と世界の平和を祈り、大きな声で、そして心を込めて「相思樹の歌」を歌ったのだ。

恵美子さんとの出会いは、その時訪れていた。

二〇一一年一月 長崎からの手紙

寒中お見舞い申し上げます。学校とはおめもじのない老女でございませう。②昨年こぞの十月下旬だったと



① 航空機を撃ち落とすための大砲。

② お目にかかることをいう女性語。手紙文などに用いる。

思いますが郡山商業高等学校生と出会いがあり、一筆御礼を申し上げたく筆をとりました。私も、被爆者の一人で、ただいま一人で生活しております。外出も一人では出来ませんので、長男夫婦が時折、北九州から来て、私を歩かせております。やっと車から降り、平和公園へ歩行器でついた時の出会いです。高校生の後ろ姿を見つけました。

まもなく、大合唱がありました。その歌声が、六十五年前のあの惨事と交差して涙が溢れ、今までにないこのころ温まる感動を受けました。その時の私の感動でございます。

鎮魂の詩 声天へ 身にぞ入む

(恵美子 九十四歳)

像の前には大きい花輪、遠方からの学生さんだったことを知りました。ありがたき奉納に一礼しての帰路でした。いまままでにない感動ありがとう。皆様の御健闘を長崎の空よりお祈りいたします。

あの時歌われた歌詞を心の支えにしたいので、よろしかったら教えてください。

私たちは、思いがけない手紙に驚いた。私たちの歌を聴いてくださった方がいる。私たちの思いを受け止めてくださった人がいる。それは、合唱を介して私たちと恵美子さんが、福島と長崎がつながった瞬間だった。

私たちがあの時に歌った詩は、先輩である太田博さんがひめゆり学徒隊に、卒業後もお互いに助け合い、協力し合ってたたくましく生きていってほしいと願って贈ったものであること、恵美子さんにこれからもずっとお元気でいていただきたいこと、そんな思いを込めて同級生に呼びかけ一人一人が手紙を書くことにした。もちろん、太田博さんの詩集「太田博遺稿集」と「相思樹の歌」のCDを添えて……。恵美子さんに送った「太田博遺稿



集」は、郡山商業高等学校の創立九十周年を記念し、その年の十月、同窓会が発行したばかりのものだった。

二〇一二年二月 結ばれていた絆

前略 お手紙ありがとうございました。

皆様に喜ばれましたこと、うれしい限りです。三十年前になりましたでしょうか、私と主人は摩文仁の丘^③へ慰霊の旅に出ました。丘には全国の県の石で碑が建っております。いささかの花と水、線香を供えてお参り致しました。丘から見る大海原は心なしか涙をさそうものです。今になってみると、太田少尉様とはその日からなにかつながりがあったように思われます。

私の長兄は日中戦争の時、山西省で、戦死しております。昭和十三年八月二十三日、二十八歳でした。黄砂が降ってきますと、兄が踏みしめた土ではないかとなつかしく思うことがあります。主人は十六年に中国北部に出征しましたが、負傷の身で帰りました。造船会社に復帰して一年後に原爆に遭いましたが、私たちは命だけは助かりました。今では平和を祈るだけでございます。私も三十年前に相思樹を見ているのでしょうか。今おぼろげに思い出しております。九年前に主人を亡くしました。皆様からのお手紙を話しかける様に読んできかせました。喜んでいらっしゃるようでした。

早速CDを聴かせていただきました。私の九十四歳はなんと素晴らしい年だったと喜んでおります。孫よりも若い友達ができたことを喜んでおります。皆様の手紙は私の宝でございます。

二〇一二年三月十一日、午後二時四十六分。東日本大震災・福島第一原子力発電所事故が発生した。この

③ 沖縄戦最後の激戦地で沖縄県糸満市にある。現在は平和祈念公園となり、各県の慰霊碑が並ぶ。

年の十一月、私たちは、恵美子さんの息子さんからの手紙を受け取った。

二〇一一年十一月 別れ

拝啓 急に寒さが厳しくなり、九州もいっぺんに冬らしくなりましたがいかがお過ごしでしょうか。

私は昨年平和公園で修学旅行の子ども達の歌声に感動していた恵美子の歩行器を押していた息子です。残念なことですが、今月十九日、恵美子、九十四歳十か月で安らかに旅立ちました。

まだすっかりした会話が出来る今月上旬、沢山土産話をしたいのにお父さんはまだ迎えにきならんとよ。あの郡山の詩の本を棺ひつぎに入れておいてね、と念押ししていました。

原発事故のあと、TVニュースを見て、あの子達はどうしているかね、元気かね、もう一度あの歌を聴きたいね、と度々話していました。自分の被爆体験を思い出しながら、ニュースを見ていたのではと思っています。

母も私も、爆心地から三キロメートルのところまで暮らしていました。直接の放射能汚染、直後の原子雲による黒い雨、その雨水を集めた水道水、爆心地周辺の芋が主食でした。当時のデータは何もありません。今のレベルでどのくらいの放射能に汚染されたのでしょうか。直後の一か月は真っ黒い下痢便等、影響は多々あったと思いますが、医療設備もない当時の長崎で生き延び得たのは、人がもっている自然治癒力のおかげだと思っています。母は九十四歳まで元気でしたし、私は七十歳、まだこれからです。人は逆境を乗り越えるすばらしい治癒力があると信じています。

これから更に厳しさが増してくることでしょう。またどんなことが起こるか予測もつきませんが、

それらをはねかえして強く羽ばたいて欲しいと願っています。

母に最後の良い思い出をつくって頂きありがとうございます。皆様のご健康を心から願っています。

私たちは言葉が出なかった。恵美子さん、こちらこそ、ありがとうございます。どうぞ安らかにお眠りください。私たちはしっかりと生きますから。

沖繩戦で失われた命、長崎の原爆で失われた命、東日本大震災で失われた命、恵美子さんの命、そして恵美子さんが気にかけてくださった私達の命、それらすべての命を、ひとりひとりの心に刻んで。

※ひめゆり学徒隊

第二次世界大戦末期の一九四五年四月、沖繩にアメリカ軍が上陸し熾烈な地上戦が展開され、当時沖繩にあった二十一の学校から生徒達が動員され戦場に送られた。そのうち沖繩師範学校女子部、沖繩県立第一高等女学校から陸軍病院に動員された生徒・教師たちを戦後、「ひめゆり学徒隊」と呼ぶようになった。学徒たちは、弾の飛びかう戦場で、負傷兵の看護、水くみ、食糧の運搬、伝令、死体埋葬等の仕事を行った。生徒二二二名、教師十八名のうち、一三六名が戦場で命を落としたが、その多くは六月十八日の「解散命令」以降であった。

〔教材作成委員会〕作成

チエーンメール

突然リビングの照明がついた。震災発生時から続いていた停電が、三日ぶりに復旧したのである。僕の家では、ロウソクやキャンドゥ用のランタンの明かりを使って食事をつくろうと、ペットボトルの水と買い置きのレストラン食品を出してきて、夕食の準備をしている最中だった。

「ノブ、テレビつけて。」

姉に言われて僕は急いでテレビをつけた。地震や津波の映像とともに、福島第一原子力発電所が爆発した映像が突然目に飛び込んできた。

僕は、ラジオや新聞で断片的に情報を得ていたものの、自分の中に一気に情報が入ってきて混乱した。

「これからどうなってしまうのだろうか。」

今まで味わったことのない感覚に僕は襲われていた。急いで自分の部屋に戻ると、パソコンを立ち上げて僕はメールをチェックした。受信トレイを見ると、震災直後から携帯電話などで安否を確認するメールが、学校の友人などから送られてきていた。

その中に、親友のヤスシからのメールがあった。

「原発事故からの被害を少しでも少なくするためのメールです。福島第一原子力発電所の事故の影響で、大量の放射性物質が拡散しています。今日以降の雨には絶対にぬれないでください。少しでも多くの人にこのメールを送ってあげてください。」

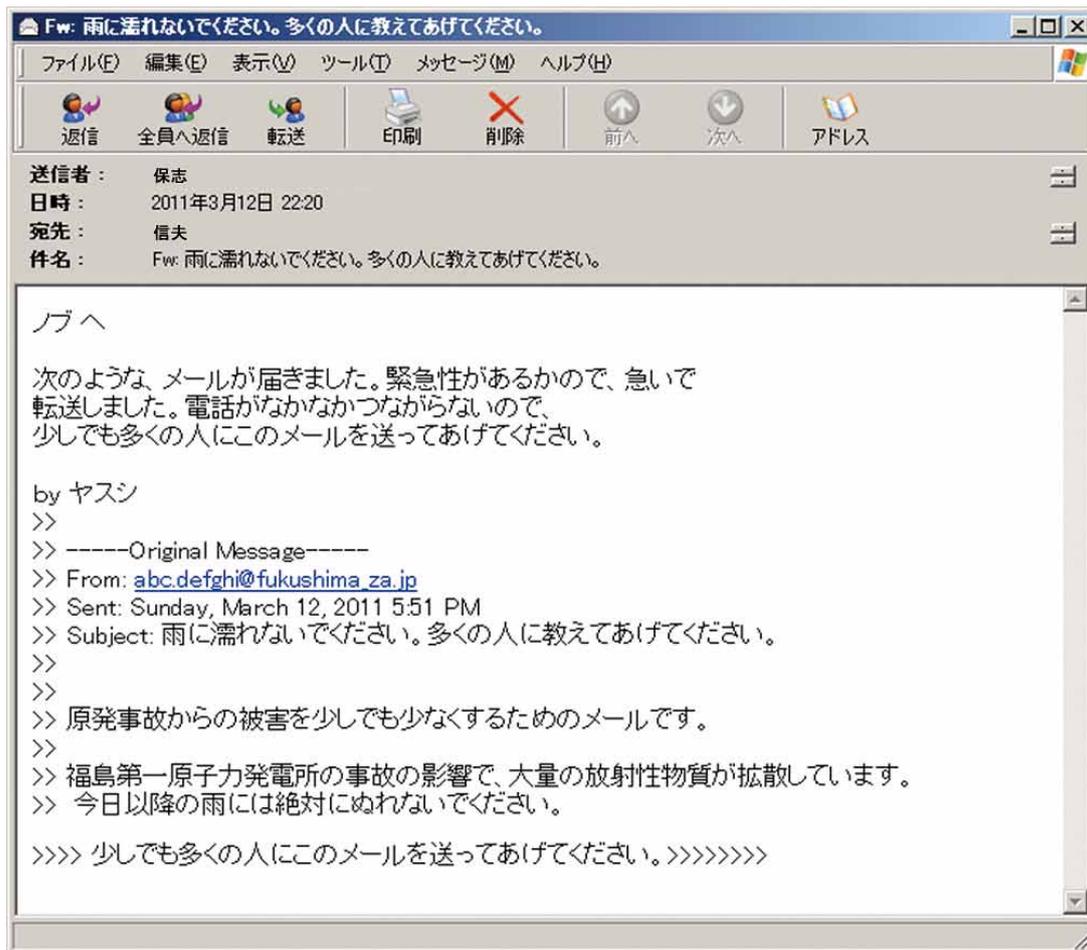
僕は、先ほど見たテレビの映像を思い出し、夢中で部活の仲間にヤスシのメールを転送した。

母や姉にも教えずにはと、急いでリビングに戻ると、二人がテレビを見ながら深刻な顔をして話していた。

「チエーンメールで、ずいぶんとデマが流れているんですって。」

僕は、耳を疑った。そして、しばらく動けなかった。

〔「教材作成委員会」作成〕



東日本大震災時の情報通信の状況

地上テレビ放送の状況の例

東北6県を含む全11県^{ていは}で停波が確認

最大時120か所 (損壊2か所、停電118か所)

NHKでは緊急地震速報につづき、総合テレビをはじめ、教育テレビ、ラジオ第1など全8波で、地震発生の2分後より災害報道を開始した。

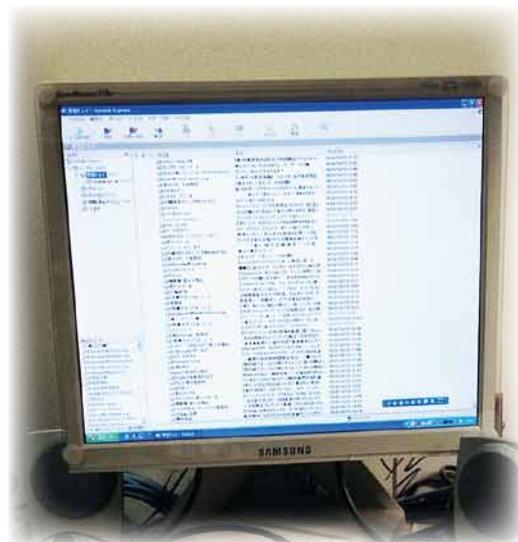
総合テレビ 約254時間放送

[地震発生から3月22日までの12日間に放送された震災関連放送]

※停波…電波の送信を止めること。

通信手段確保に向けた取組の例

- ① 災害用伝言サービスの提供
- ② 特設公衆電話の設置等
- ③ 衛星携帯電話の貸与
- ④ 移動通信機器の貸与
- ⑤ アマチュア無線の活用
- ⑥ 避難所への無料インターネット接続サービスの整備



参考資料「平成23年度版 情報通信白書
第1部 東日本大震災における情報通信の状況」

福島に生まれて

あの忌まわしい東日本大震災の発生から五か月が過ぎようとしていた平成二十三年八月四日。昼下がりの太陽がじりじりと照りつける中、真っ青な空にそびえ立つ會津風雅堂の大ホールでは、第三十五回全国高等学校総合文化祭「ふくしま総文」の総合開会式が行われていた。当日の最大の演目、「構成劇」には、県内の高校生約五百人が参加した。四十七年に一度巡ってくる総文の名物ステージだ。

普段は全く別々に活動している県内の演劇部、合唱部、オーケストラ、ダンス部、応援団の高校生たちが、リーダー役を務める実行委員の生徒とともに、この舞台のために力を結集させる。

構想から二年以上の歳月をかけて準備を進めていた構成劇『ほんとの空』の上演は郡山市民文化センターの被災により断念せざるを得なかった。そればかりか県内各地で部門大会を行う予定だった「ふくしま総文」そのものの開催も危うくなっていたのだ。しかし、可能性はほんのわずかに残されていた。震災直後の混乱の中、総文実行委員会事務局のFAXには続々と、ある「メッセージ」が寄せられていた。これまで総文の準備をしてきた県内の高校生約百名からの熱い言葉の数々だ。これらの言葉は演出家の手を経て、全く新しいシナリオ『ふくしまからのメッセージ』としてよみがえった。上演までの準備期間はわずか二か月。事前リハーサルも万全ではないまま、全国からのお客様を迎えて、まさしく「一発勝負」の舞台となった。

〈オープニング——オーケストラのチューニング音〉

〈ナビゲーター役高校生「庄助」に続き、舞台中央に「桃子」登場〉

桃子 庄助、何してんの？ 最後の点検、終わったんじゃないの？

庄助 あ、いや、俺さ、今日のこの日を迎えられるとは思わなかったな、なんて思ってた。

桃子 うん、私も。時間もないし、部活も出来ないし、福島で総文祭なんて、無理だっと思ってた。でも、

やれるんだね。

庄助

ここまで来たんだな。みんなのおかげだな。

桃子

庄助、オーブニング曲さ、「レクイエムも入れよう」って賛成してくれてありがとうね。

庄助

何だよ。今頃。

桃子

うん。今頃なんだけど、今言いたかったんだ。

三月十一日の震災から、私「今出来ることは何だろう」って考えるようになった。

震災で犠牲になった人々に、私たちが出来ることは祈ること。祈りを歌にして届けることかなってね。それまで準備してきたのと違っちゃって、今のほんとの気持ちを大切にしたいって思うようになった。

庄助

俺は、祈るっていったら、黙って手をあわせることだと思っていたけど、皆で歌うってすげえよな。ほんとに天まで届きそうだなー。

桃子

さ、庄助、みんなに声かけてよ。あんたの第一声で始まるんだからさ。

庄助

よっしゃ！ みんな！ 準備いいかな？ 空と大地の魂に俺たちのメッセージを届けような！

〈オーケストラの演奏に、大合唱団の歌声がつづく。緞帳があがる〉

〈ステージ上には、キャンドルライトを抱いた演劇部の生徒たち〉

〈レクイエムが静かに終了すると、生徒は観客席に向かい、一人ずつ語り始める。〉

男子 A

三月十一日金曜日、今まで誰も経験したことのない地震にみまわれた。家にいた人、学校に来ていた人、街に出ていた人、いろいろな場所で……。マグニチュード九……。連続で起こった震度六以上の地震。その時起きた大津波。たくさんの人が大切なものを一瞬で失った。津波で家族を失った。家も思い出も流された。

女子 A

私は今、自分がどんな感情を持っているのか、あまり理解が出来ません。普段だったら「楽しい」と感じることに、ためらいを感じてしまうのです。



私よりも「当たり前」の生活が出来ていない人たちがいるのに、「楽しい」と感じていいのか。また災害が起きて、この「楽しい」と思う感覚はなくなってしまうのではないか。今までどうやって自分の感情を理解してきたのだろう。

私は今、何を「思い」何を「感じ」ているのかが、この地震が起きて以来、分からなくなりました。

男子B

三月十一日は、あなたにとつてどんな日ですか？ 朝御飯ちゃんとお食べしましたか？ 学校に行きましたか？ おはようって言えましたか？ 大切な人に大好きと言えましたか？

女子B

今まであたりまえだと思っていたこと、それが失われてしまったことがくやしい。私たちの日常がこんなにも大切で、こんなにも脆くて、崩れ去ってしまう。私の最後の高校生活はこれからどうなるんだろう。そして私の好きなこの街はこれからどうなるんだろう。

男子C

ライフラインを整備してくれている方々に感謝の気持ちがありました。

女子C

人に優しくしようと思いました。

女子D

震災を通して将来の夢が変わりました。私たちの愛する福島の役に立ちたいです。

男子D

世界中からの支援に涙が出ました。

男子E

家族がいる当たり前、家がある当たり前、大切な人がいる当たり前。その大切な人を守る当たり前。その人が笑っている当たり前。もし震災の日にこの「当たり前」たちが消えてしまおうと分かっていたら、もっとたくさん優しくできたんじゃないかな。私たちは当たり前のことに慣れすぎてしまっているのではないだろうか。

この震災をきっかけに「当たり前」のことが当たり前でできること」は、当たり前ではないんだと、たくさんの人々に気づいてほしい。

〈合唱曲『小さな空』(作詞/作曲 武満 徹)〉
 〈生徒は、一人一人に問いかけるように話す。〉

女子 E

私は福島県のいわき市というところに生まれ、そして住んでいます。海と山に挟まれた小さな町です。海に遊びに行ったり、おじいちゃんとおばあちゃんと山に山菜を採りに行ったり、おじいちゃんが海で採ってきた貝で味噌汁を作ったり、今はそれがすべて出来なくなりました。砂浜は黒く汚れ、海は汚染され、自然までも汚染されてしまいました。最近「ゴジラ」という存在が放射能と関係があるということを知りました。

私たちはゴジラなのか？ と考えるようになりました。

「私たちはゴジラではありません」おかしなことを言っていますが、本気です。

私たちは、大好きな福島で、今、この時も生きてます。

伝えたいことはそれだけです。

男子 F

原発はいまだ、不安なままである。放射能を浴びてでも自分の地元のためだと思って頑張り続けている人もいる。私はその人達に感謝したい。

勝手な情報にまどわされて、ただ周りの人と合わせて、結局何も知らないで毛嫌いするのは、かわいそうな人です。うまいこと言えないけど、とにかく知ることから始めなければならぬと思う。そして考えて、これからの事、自分は何が出来るとかなどを。

女子 F

福島は世界の一部です。原発のあの事態、私は、全日本、全世界の人々が責任を負わなければならぬのではないかなと思います。みんなで考えてみんなで解決していききたいです。そのために本当のことを知りたいです。

〈合唱・弦楽合奏『つながり』 作詞/作曲 佐藤賢太郎〉※ふくしま総文委嘱作品



本当のことは見るのは　なんて難しいのだろう
 本当のことを思うのは　なんて一人ぼっちなのだろう
 本当のことを伝えるのは　なんて勇気がいるのだろう
 そして嘘うその向こうで　悲しい風に涙する人に
 差し伸べられた手は　なんて温かいのだろう……

〈生徒たち、捜さがし物を求め動き出す。友と出会い歓喜かんきする。〉
 〈やがて、いくつかのグループでモニュメントを作り始める。〉

女子G

あなたは今、何を感じて生きていますか。
 大切なもの、笑顔、温かさ……たくさん消えました。
 ですが、希望は残っています。

一人一人のその手で出来ることがきつとある。
 きつとまたあの日に帰れるから、その日まで強く生きることを
 忘れずに、負けないで今と向きあおう。福島はここから……。

男子G

いつまでも後ろ向きに考えていても、事態は何も変わりません。
 大人に任せるのではなく、一人一人が自分のすべきこと、今自分にできることをやり、一日でも早く「日常」に戻れるよう努力していくことが重要だと思えます。

“One for all and all for one”　また皆で笑いあえる日はきつと来ると信じています。

〈全員、正面を向く〉

人はいつ死ぬか分からない。どんなにお世話になった人でも。あとでめいっぱい孝行こうぎょうしようと思つていた両親でも。だから私は思う。ありきたりだけど、今、この一瞬を、本気で生きていたい。そして目の前の人を、最大の努力をもって愛していたいと。



女子H 福島に「ほんとの空」を取り戻したいです。私たちはこれからも福島で生きていきます。自分の生まれたるさと、自分が成長してきた大切な場所が元通りになることを、心から願っています。願うだけではなく、行動……。おとなになる頃には絶対に、私たちが福島をよみがえらせます。

男子H 僕が避難していた三春町には、全国でも有名な「三春の滝桜」があります。

僕は、避難所の仲間と先生と、樹齢千年という桜を見に行きました。

滝桜は、今年も素晴らしい花を咲かせて、全国から集まった人たちはただ溜息をつくばかりでした。僕は福島に生まれ育って、こんなすごい桜があることを今まで知りませんでした。

千年も生き続けている桜の木は、毎年花を咲かせては散りながら、何を見てきたのかと思いました。僕が高校生で体験した大地震も、大昔あったのかな……。

そして、百年とか千年先はどんな未来なんだろうと考えました。

滝桜は、黙って咲いていましたが、その姿は堂々として、晴れ晴れと優しく、誇らしげでした。いろんなことを許してくれているようにも見えました。

男子I 震災は人々から多くのものを奪い、もう戻ってこないものもたくさんあります。でも、同時にこの出来事が私たちに与えてくれたものもきつとあるはずですよ。

それを信じて、ほんの少しずつですが、皆さんに元気な福島を見せられる日が来るよう、歩んでいきたいと思っています。

女子I すごく水がきれいで、空気もきれいで、海も湖も。

女子J 私のおばあちゃんの田んぼも畑も自然も、とっってもきれいです。

女子K 私は、福島が大好きです。福島の温かい人達も、福島の方言も……。

女子L 笑顔も。

女子M 素敵すてきだばい？ 福島！

女子N いつか私がおとなになって、福島を離れたとしても、絶対海や田舎いなかへ遊びに来ます。福島に来てください。今、すごく警戒けいかいされているけど、私たちは福島に住んでいます。ぜひ来てください。

男子K 福島に恩返しおんがえをする日が来た。

男子L 福島の桃はうめえぞ！

女子O 不安なときでも。苦しい時でも。

女子Q 震災にみまわれた時でも。

女子R (全員で) まわりには仲間がいる！

男子M 小さな力でも、たくさん集まれば大きな力になる。

〈フルオーケストラ+合唱『今』〉

〈「桜の精たちのダンス」が終わり、桃子が歩み出る〉

桃子 福島に生まれて、福島で育つて、福島で働いて、

福島で結婚して、福島で子供を産んで、

福島で子供を育てて、福島で孫まきを見て、

福島でひ孫ひまごを見て、福島で最期さいごを過ごす。

それが私の夢なのです。

あなたが福島を大好きになれば幸せです。



庄助

不安な日々が続き、
なかなか前へ進めない、何も出来ない苛立ちもある。

それでも、一歩ずつでも、

少しずつでも、前へ進みたい。

大きな一歩じゃなくてもいいから……。小さな小さな一歩でもいいから、

勇気を出して踏み出そう。

俺達には支えてくれる仲間がたくさんいる。

共に手を取り合い、今を精一杯生きて、

素敵な未来を必ずつくるんだ。

やまない雨はない。明けない夜はない。

平和なときには気づけなかった

「本当に大切なもの」。

俺にとっては兄弟でした。

あなたにとっては、誰ですか。

気づけましたか。

今、気づくことが出来たその気持ちを絶対に、

絶対に忘れないでください。

〈合唱+オーケストラ『前へ』作詞/作曲 佐藤賢太郎〉

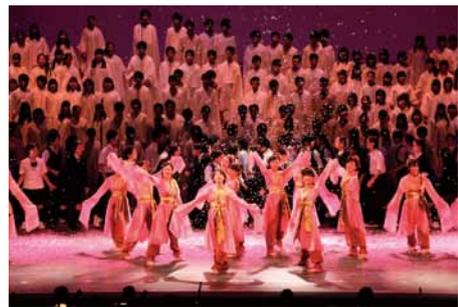
【フイナーレ】

〈応援団によるエール 〉『上を向いて歩こう』永六輔作詞/中村八大作曲

〈ふくしま総文イメーჯソング『思うがままに』菅野友里江作詞/相樂純作曲〉

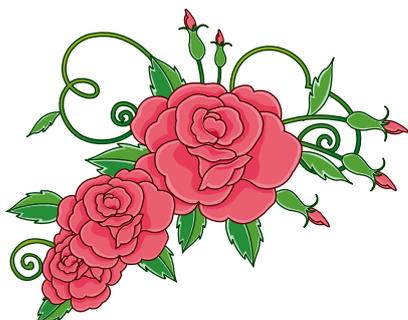
—幕—

※構成劇「ふくしまからのメッセージ」より



第
II
章

読み物資料の活用例



きぼうの水族館 ～アクアマリンふくしま～

1 ― (2) 希望・勇気・不撓不屈（小学五・六年）

一 ねらい

より高い目標を立て、困難や失敗にもくじけることなく、常に希望をもって、理想に向かって前進しようとする心情を育む。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

何事をするにも、多少の困難はつきものである。地震・原発事故という困難な状況にあつて、悩み戸惑いながらも、力強く再オープンに向かって歩み出そうとする津崎さんたち。その生き方について考えることで、目標意識を強く抱き、困難や失敗にあつてもくじけることなく、夢や希望を信じてやり通すことの大切さを感じさせたい。

(2) 資料の概要

震災後、アクアマリンふくしまでは、燃料や物資の不足から、次々に大切な生き物たちが命を落としていく。何もできずにいる津崎さんたち。飼育職員は、海獣類を自分たちの手で救うためにと立ち上がるようになった。そんな矢先に起きた原発事故。津崎さんたちは全国の水族館に助けを求め、復興を誓った。困難な状況にもくじけず、わずか百二十日という短期間で再オープンを果たした津崎さんたちの生き方を共感的に味わわせることで、希望をもって努力し続けることの大切さを感じさせたい。

(3) 資料を通して伝えたいメッセージ

震災後の困難な状況にあつても、諦めずに生き物の命と向き合い続けた津崎さんたちの情熱が、約四か月というスピードでの再オープンにつながった。職員の献身的な姿から希望をもつことのすばらしさ、困難を克服する人間の強さについて自らの考えを深めさせたい。

三 展開例（○発問、◎中心発問、・主な活動）

- ・「水族館で、どんな海獣類を見たことがあるか。」等、これまでの生活体験を発表し合う。
- 飼育員の話聞いて黙ったまま考え込んでいた津崎さんは、どのような気持ちだったのか。
- ◎原発事故の後、どこへSOSを出しても断られてしまった津崎さんはどんな気持ちだったのか。
- 再オープンを果たし、来館者の笑顔をうれしそうに眺める津崎さんはどんな気持ちだったのか。
- ・自分の目標に向かっていくために、大切なことはどんなことかについて話し合う。

四 心のノートとの関連

心のノート「夢に届くまでのステップがある」（十六〜十九頁）を活用し、自分の夢について想起させ、その夢を実現させるために、今の自分にできることは何か考えさせる。

五 指導上の留意点及び配慮事項

- 導入の段階で、写真資料や映像資料を活用し、震災の危機的状況を把握させる。そうすることで、極限状況下にあつてもくじけることなく、懸命に働いた津崎さんたちの気持ちに共感できる素地をつくることも考えられる。
- 震災関連の資料であるため、被害に遭っていたり、身近な人が犠牲になっていたたりする児童がいる場合は、配慮を要する。

外国からのメッセージ

4—(1) 公德心(小学五・六年)

一 ねらい

社会の一員としての自覚をもって公德を守り、進んでよりよい社会をつくらうとする意欲を高める。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

震災時の「外国人から見た日本人についての記事」から、日本人の世界に誇れる美点について気付かせ、それを受け継いでいくことの大切さについて考えさせたい。

(2) 資料の概要

被災した日本の人々が冷静に落ち着いて行動していたことが、外国でニュースに取り上げられた。中国での報道から、非常時においても人間らしく生きていくために何が大切なのか考えさせるのに適した資料である。

(3) 資料を通して伝えたいメッセージ

自分たちが当たり前に行っている行動が、世界に賞賛されている。それは親から子へと脈々と受け継がれてきたものであり、これからも大切にしていきたい日本人のよさである。大震災の最中にあった報道から、よりよい社会をつくるためには、一人一人が社会の一員であることを自覚していくことが大切であることを伝えたい。

三 展開例(○発問、◎中心発問、・主な活動)

○外国からの応援のメッセージを読んだとき、私はどんな気持ちになっただろうか。

○「日本人の中には『道徳』の血が流れている。」とは、どういうことだろう。
◎最後に「わたし」が考え込んでしまったのはなぜだろう。
・心のノート「ぐるりとまわりを見渡せば……」を読み、社会のマナーを守ることの大切さについて考える。

四 心のノートとの関連

「心のノート」の「ぐるりとまわりを見渡せば……」(八十八〜八十三頁)を活用し、きまりやマナーを守ってよりよい社会をつくらうとする意欲を高めさせる。

五 指導上の留意点及び配慮事項

○被災した日本の人々が冷静に行動していたことが取り上げられた外国の記事を紹介して、日本人の『道徳』の血とは何か、日本人が大震災のよさな非常時に世界に賞賛される行動を取れたのはなぜかについて、考えられるようにする。

○住人が避難した家での窃盗事件や、福島への風評被害などの事実を踏まえ、よりよい社会をつくるには一人一人がきまりやマナーを守ろうとする心がけが大切であることを自覚し、日本人のよさを受け継いでいこうとする意欲を高める。

「はだかまいり」のはじまり

4 — (5) 郷土への愛着 (小学一・二年)

一 ねらい

郷土に対する愛着を深め、郷土の文化や生活を守っていこうとする心情を養う。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

現在も柳津町の有名な行事として受け継がれている「七日堂裸詣り」にまつわる神話である。

ニュース映像や写真を活用するのが効果的である。また、神話の挿絵を拡大し紙芝居として提示することもできる。

(2) 資料の概要

祖父に促され裸詣りを見に行くぼくは、祖父にその由来を尋ね、神話を聞くことになる。「只見川の竜神の元にあった宝照の玉を供えたことにより疫病が収まった喜びの後、竜神の逆襲が知らされる。疫病のない平穏な日々を守るため、多くの町の人が一丸となって宝照の玉の元、下帯姿でかけ声をかけ本堂へと駆け上った。その勢いで竜神が退散する。」この話を聞いた後、ぼくの行事を見る目が変わる。

(3) 資料を通して伝えたいメッセージ

先人たちが郷土を守ろうとして力を尽くしてきた姿から、今日の生活があることに感謝したり、町のよさに気付き、自分も次の世代のために力を尽くそうとしたりする気持ちを高めたい。

三 展開例 (○発問、◎中心発問、・主な活動)

- ・町探検を思い出させ、自分の町で誇れるところや気に入っているところ

を自由に話し合う。

○吹雪の中「はだかまいり」を見に行くぼくは、どんな気持ちだったか。

○人々が次々と死んでいくのを町の人が目にしたと聞いたときのぼくは、どんな気持ちだったか。

○裸で本堂を駆け上り竜神から宝照の玉を守ったと聞いたときのぼくは、どんな気持ちだったか。

◎どんな思いでぼくは、こぶしをぎゅつとにぎりしめたのだろうか。

・町の歴史に詳しい人等、ゲストティーチャーの話を聞く。

四 心のノートとの関連

「心のノート」の「あなたがそだつ町」(八十八〜八十九頁)を活用し、各教科や領域との関連を図りながら郷土についての自分の考えをまとめさせる。

五 指導上の留意点及び配慮事項

○生活科の「町探検」で気付いた町のよさと重ねて考えることのできる授業を構想する。

○町の活性化に力を注いでいる身近な人をゲストティーチャーに迎え、話と現実をつなぐ。

三本えだのモミジの木

3—(2) 自然愛・動植物愛護(小学三・四年)

一 ねらい

自然のすばらしさや不思議さに感動し、自然や動植物を大切にすることを育てる。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

児童は自然や動植物の命を大切にしなければならぬことは知っているが、命の大切さを意識したり生きる喜びを感じたりすることは少ない。本資料は、自然の中の命のつながりについて取り上げている。自然と動植物がかかわり合いながら共に生きるすばらしさについて考えさせたい。

(2) 資料の概要

本資料は、僕が、町探検で知った樹齢約百二十年の三本枝のモミジの木の話を聞く中で、羽化したばかりのセミの命の大切さに気付く、自然の中の命のつながりや尊さに気付くという内容である。

(3) 資料を通して伝えたいメッセージ

三本枝のモミジの木の命が他の生き物の命も守っているという「命のつながり」に気付かせ、おじいさんの動植物を守る姿から自然やその中に生きる生き物の命を守るために自分にできることは何なのかを考えさせたい。

三 展開例(○発問、◎中心発問、・主な活動)

・心のノート(六十二～六十三頁)を活用し、動植物に触れた経験を想起する。

○虫が苦手なぼくは、セミの羽化の様子をどんな気持ちでのぞきこんだのだろう。

○ぼくは、震災後、ホタルを守ったおじいさんの話を聞いたとき、どんなことを思ったのだろう。

◎ぼくは、どうして苦手なセミに見とれていたのだろう。

・心のノート(六十～六十一頁)を活用し、自分たちの生活を振り返り、動植物の命を守るために自分にできることを考える。

四 心のノートとの関連

「心のノート」の「植物も動物もともに生きている」(六十～六十三頁)を活用し、これまでの経験を振り返り、生命の誕生などを通して命について考えたことをまとめさせる。

五 指導上の留意点及び配慮事項

○導入では、心のノートを活用し、動植物への関心を高めて資料につなげる。

○展開では、自然や命に対する見方や感じ方が揺さぶられ、それを一層深めることができるよう、話し合わせる。

○「書く活動」を取り入れ、自然や動植物の命とその中の自分の関わりに関心させ、自然と共に生きるために自分にできることをしっかり考えさせたい。

○各教科、総合的な学習の時間、特別活動などにおける生命尊重にかかわる指導を振り返り、本時の学習で児童が自己の生き方についての考えを主体的に深められるようにする。

クリスマスのおくりもの

2—(2) 思いやり (小学三・四年生)

一 ねらい

他人の痛みに共感し、思いやりの心を持って行動しようとする態度を育てる。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

震災後に実際にあったクリスマスにまつわるエピソードである。小学生の少女が書いた実際の手紙を基に構成している。

自分の幸せを困難な状況にある人々と分かち合おうとする少女の思いやりの心を通して、人間愛の精神を考えさせたい。

(2) 資料の概要

県庁に京都の小学生から手紙が届いた。被災した同年代の子どもたちへの思いやりの心がこめられている手紙を見た県庁職員たちは少女の純粋な心に感動する。やがて被災した小学校にサンタからのプレゼントが届く。

(3) 資料を通して伝えたいメッセージ

相手の立場を推し量り、自分の思いを相手に届けようとするあかりさんの姿から、相手の立場や思いを想像することが温かい人間関係を築くことを伝えたい。併せて、多くの人々から御支援をいただいていることへの感謝の気持ちを育てたい。

三 展開例 (○発問、◎中心発問、・主な活動)

・プレゼントをもらった経験など、日常生活を想起する。

◎あかりさんは、どのような気持ちでサンタクロースに手紙を書いたのだ

ろうか。

○サンタクロースから手紙をもらったあかりさんは、どんな気持ちだっただろうか

・「心のノート」(三・四年生)(四十〜四十三頁)を活用して、「思いやり」の心について考えたり、自分たちの行動を振り返る。

四 心のノートとの関連

「心のノート」の「思いやりの心をさがそう」(四十〜四十三頁)を活用して、「思いやり」の精神について考えさせたり、体験した事例を話し合わせたりする。

五 指導上の留意点及び配慮事項

サンタクロースの存在に関して個人によって認識の相違があると思われる。そのため、できるだけ児童の考え方を尊重するように配慮する。

六 補足資料(次頁)

「クリスマスのおくりもの」

(1) 東北の子どもたちにあてた少女の手紙

(2) 少女の母親の手紙

(3) 少女に届いたサンタからの手紙

「まじご」の牛

4 — (4) 勤労・社会奉仕（小学五・六年）

一 ねらい

困難な状況にあっても自分の役割を果たし、社会のために奉仕しようとする態度を養う。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

東日本大震災後の放射性物質の影響により、避難を余儀なくされた畜産農家の小林さんの姿を通して、命と向き合う生活をしている人々がいることに気付かせる。さらに、困難な状況にあっても自分の役割を果たしていくことで、自分自身のためだけでなく社会へも貢献していることに気付かせるようにしたい。

(2) 資料の概要

本資料は、東日本大震災により避難を余儀なくされた小林さんが、自分の慣れ親しんだ土地を離れて牛とともに避難し、愛情をこめて育てていく姿を描いている。牛とともに避難する小林さんの心の葛藤や、牛を育てるといふ決断までを追うことで、困難な状況にあっても、命と向き合いながら自分の役割を果たしていく小林さんの姿が心に残る資料である。

(3) 資料を通して伝えたいメッセージ

わたしたち人間の生活はたくさんの人との関わり合いで成り立っている。その陰には、作物や家畜など、命を育てている人がいる。困難な生活の中でも、自分の役割を見つけて一生懸命に生きる小林さんの姿を通して、自分の仕事を責任をもって果たした人たちのおかげで成り立っていることに気付かせ、働くことの意義を感じ取らせたい。

三 展開例（○発問、◎中心発問、・主な活動）

- ・ 毎日の生活を送るために必要なものは何かを考える。
- 国から避難の指示があった時、小林さんはどんな気持ちだったのだろうか。

- ◎ 小林さんは、どうして牛と一緒に避難しようと思ったのだろうか。
- 山武市で牛を育てている小林さんは、毎朝牛たちに、どんな言葉をかけているのだろうか。

- 小林さんの育てている牛はいずれは食べられる命だが、小林さんはどんな思いで育てているのだろうか。
- ・ 「働く」とは、どういうことか話し合う。

四 心のノートとの関連

心のノートの「働くってどういうこと？」（九十二〜九十五頁）を活用し、働くということは自分のためだけでなく、相手や社会をよりよくするために必要であることに気付かせる。

五 指導上の留意点及び配慮事項

- 牛とともに避難するか牛を手放すかの選択を迫られた小林さんの葛藤する気持ちを想像させ、多様な考え方を引き出すようにする。
- 小林さんはいずれは食べられる命をどのような気持ちで育てているのか話し合わせ、命と向き合いながら仕事をする人がいるおかげで、自分の生活が支えられていることに気付かせる。
- 食べ物だけでなく、着る物や日用品などがあるおかげで生活できることを振り返らせる。そのどれもが、人々が自分の役割を果たしたおかげで存在することに気付かせ、働く意義を考えさせるようにしたい。

いま新しき力あふれて

4 — (4) 愛校心 (中学一・二年)

一 ねらい

東日本大震災により学校が直面した困難な状況を乗り越えていこうとする生徒の姿から、学校に対する愛着や誇りを持ち、よりよい校風づくりに努めていこうとする心情を育てる。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

災害時における学校の役割はとても大きい。自分を取り巻くそれまでの生活環境などが急激に変化することを経験した生徒にとって、学校はそれまでの日常とのつながりを感じさせてくれる大切な場所であり、安心感・安堵感を与えてくれる場所であるところに大きな意味がある。

(2) 資料の概要

本資料は、東日本大震災を経験した中学二年生の作文を中心にまとめたものである。地震による校舎倒壊、原発事故等による困難で制限された生活の中から、「命」は「時間」であることを知り、前向きに生きることの大切さや学校の存在意義について考えさせることのできる資料である。

(3) 資料を通して伝えたいメッセージ

不慣れた学校生活の中でも創意工夫しながら取り組むことで、学校に一体感が生まれた。「僕」の気付きを通して、学校に対する愛着や誇りを持たせ、よい校風づくりに努めていこうとする心情を育てたい。

三 展開例 (○発問、◎中心発問、・主な活動)

○僕はなぜ、困難な状況を乗り越えたのだろうか。

○「命そのものは『使える時間』です。」という日野原先生の言葉を聞いたとき、僕はどう思っただろうか。

◎「僕の中で何かが動き始めた。」とあるが、「何か」とは何だろうか。

◎「いま新しき力あふれて」に気付いたとき、僕はどんな気持ちになっただろうか。

・自分の学校の「よいところ」を話し合う。

四 心のノートとの関連

終末段階で、「この学校が好き」(百十六〜百十九頁)の「校風とは脈々と受け継がれるものであるけど、私たちが気付いて行動することで、いっそう輝きを増すことができる」という部分を引用し、伝統の継承と新たな校風づくりについて考えさせる。

五 指導上の留意点及び配慮事項

○事前に「東日本大震災を経験してできるようになったこと」という短文を書かせ、震災直後の状況を振り返らせる方法もある。

○震災時及び震災直後における生活経験や感じ方は、生徒一人一人受け止め方が違うので、資料を扱う際には、生徒の実態に応じて配慮する。

○資料のタイトルは、N中学校の「校歌」の歌詞からつけたものである。各校の校歌を補助資料として活用する方法もある。

温かさを分け合って

3—(3) 生きる喜び（中学二・三年）

一 ねらい

人間が持つ心の弱さや醜さを自ら乗り越えて、誇りを持って強く生きていこうとする態度を育てる。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

大震災の影響で転校を余儀なくされた筆者の心境、放射能差別の報道やニュースを聞いた筆者の心境に触れながら、強く生きていく心を持つようとした筆者の心について考えさせる。

(2) 資料の概要

本資料は、中学三年生の作文である。

大震災の影響で埼玉への転校を余儀なくされた筆者が、不安を抱え埼玉県での学校生活を始める。そこで、震災を通して助け合うことの大切さを学び、たくさんの人に支えられて生きていくことを忘れなければ、人を傷つける言葉や相手の気持ちを考えない行動をとることはないと感じる。温かく迎えてくれた埼玉の友人達や先生方、避難する前の学校の級友や先生方の温かい言葉を忘れず、自分も温かさを他人に分けられる人間になり、強く生きていく心を持つ人になろうと考える。人間として力強く生きていく心を持つことについて考えを深めさせることのできる資料である。

(3) 資料を通して伝えたいメッセージ

差別や偏見について、人間の弱さや醜さを見つめながらも、経験に裏打ちされた自分の言葉で主張する筆者の姿から、人間として力強く生きていく心構えや生きる喜びを見いだそうとする力について考えさせた

い。

三 展開例（○発問、◎中心発問、・主な活動）

○埼玉に転校した時の筆者は、どんな気持ちだっただろうか。

○埼玉の学校でもがんばろうという気持ちかわいてきたのはなぜだろうか。

○放射能による差別があることを知った筆者は、どんな気持ちだったのだろうか。

○筆者は震災を通して何を学んだのだろうか。

◎どんなことがあっても強く生きていく心とは、どんな心だろうか。

・授業を振り返って、感じたこと、考えたこと、心に残ったことをまとめる。

四 心のノートとの関連

「かみしめたい人間として生きるすばらしさ」（八十〜八十一頁）を活用し、「人間としての生き方」について考えさせる。

五 指導上の留意点及び配慮事項

○大震災を通して経験したことを生かし、他人にも温かい心分けられるようになりたいという筆者の考えを大切にしたい。

○放射能の差別による事例を取り上げ、どんなことがあっても強く生きていく心とはどんな心かを問いかけながら自ら奮い立たせ、誇りある生き方を考えさせたい。

○差別や偏見については、震災後の生徒の生活環境や実態をよく把握した上で活用する。

大切なひと

2—(3) 信頼・友情（中学二・三年）

一 ねらい

友情の尊さを理解して心から信頼できる友達を持ち、互いに励まし合
い、高め合おうとする心情を育てる。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

大震災後、通信手段が復旧してから届いた友人のメールを軸に、私と
彼女の友情を描く本資料は、価値に直結する最後のメールの提示の仕方
を工夫したい。お互いの存在が、困難な状況下にあってもたくましく生
きぬく力につながっていることにも気付かせたい。

(2) 資料の概要

本資料は、震災直後に中学校教師である「私」が、市役所職員である
友人とやりとりしたメールやその後の交流を通して考えたことを中心に
構成したものである。メールの内容には緊迫感があり、厳しい状況の中
で命のありがたさや友人のありがたさが一層際立つものとなっている。
心を通い合わせることで、くじけそうな状況も共に乗り切ることのでき
る力強さを感じ取ることのできる資料である。

(3) 資料を通して伝えたいメッセージ

困難な状況も、友人の存在が共に乗り越える力にもつながることに気
付かせ、友人と心を通い合わせることの素晴らしさを伝えたい。特に、
大震災の混乱期に、相手の身を案じ、互いに励まし合い、高め合い、
努力を惜しまないという関係を、普段は気付きにくい身近な友人の存在
やありがたさに改めて気付かせたい。

三 展開例（○発問、◎中心発問、・主な活動）

- ・友人に関するアンケートを事前に行うなどして、価値の方向付けを図る。
- 私が最初のメールを改めて読んで、泣いてしまったのはどんな気持ちか
らか。
- ◎私は、「お互い踏ん張ろう」というメッセージを受けて、どんなことを
考えただろうか。
- ・友人の存在は、自分にどんな影響を与えてくれるか話し合う。

四 心のノートとの関連

「太陽みたいにくらきら輝く生涯のたからもの」（五十二〜五十五頁）を
活用し、日常生活との関連を図りながら「友だち」についての考えを深め
させる。

五 指導上の留意点及び配慮事項

- 資料を理解するために、震災直後の石巻市などの被災地の状況を予め知
らせておく。その際、同じような状況を経験した生徒には、十分に配慮
する必要がある。
- 登場人物である公務員が、災害時に務めるべき職務等について解説を加
えるなど、配慮が必要である。
- 友人の心情等も引き出しながら、主人公である私の気持ちの高まりが引
き出せるように、補助発問等を工夫して効果的に二人の友情の素晴らし
さが引き出せるようにしたい。

よみがえれ！

あんばんさい
安波祭

3 — (3) 生きる喜び (中学一・二年)

一 ねらい

人間には弱さや醜さを克服する強さや気高さがあることを信じて、人間として生きることにより喜びを見出そうとする態度を育成する。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

震災の影響で、生活の基盤や環境が大きく変わった生徒の中には、復興に向けて、社会や誰かの役に立ちたいという思いがある一方で、自分ができることは果たして何なのだろうかという迷いもある。特に、身近な人や家を失った寂寥感、復興への焦燥感を抱える中で、生きることにより喜びを見いだすことが難しい。

そこで、地域の伝統行事を復活させようとする人々の姿を織り交ぜながら、たくましく生きようとする姿を描き、これからどう生きるかを考えさせる資料とした。

(2) 資料の概要

震災後の福島第一原子力発電所の事故を受けて、避難指示解除準備区域(平成二十四年十二月現在)になった浪江町請戸に伝わる「安波祭」を復活せようと、保存会の人々と避難先から集まった子どもたちが、一生懸命田植踊りの練習に励んでいた。

久しぶりに再会した彩と佳奈は、始めこそ気持ちがいずれ違っていたものの、保存会のしじいの温かい言葉を通して、以前の二人の関係に戻っていく。

(3) 資料を通して伝えたいメッセージ

東日本大震災を経験したからこそ、生きることに向き合い、復興に向けてたくましく生きる姿を共有させたい。

誰の心にも弱さや脆さがある。再会した彩と佳奈のすれ違う心や思わ

ず吐露した彩の心境に寄り添い、佳奈らしく彩を励ます姿を通して、たくましく生きようとする二人の強さや社会とつながりを求めて生きる人間としての喜びを伝えたい。

三 展開例 (○発問、◎中心発問、●主な活動)

【佳奈に焦点をあてる展開例】

○「しじいの言葉に私たちは大きくうなずいた。」とあるが、佳奈はどんな気持ちでうなずいたのだろうか。

◎彩の涙を見たとき、佳奈はどんな気持ちだったのだろうか。

○佳奈はどんな気持ちで、彩の背中を追って走り出したのだろうか。

【彩に焦点をあてる展開例】

○彩はどんな思いで「私でも役に立てるのかな。」と言ったのだろうか。

◎「しじいの言葉に私たちは大きくうなずいた。」とあるが、彩はどんな気持ちでうなずいたのだろうか。

○「私、負けないよ。」は、彩のどんな思いから出た言葉だろうか。

四 心のノートとの関連

「人間として生きること」「いまからのわたし」「生命を考える」(八十七頁)と関連させながら、生きる喜びについて考えさせる。震災を機にさまざまな活動に取り組んでいる人々の姿、支援をいただいたことへの感謝の気持ち、生命の証をどのように刻んでいけばよいのか等、人間の弱さや脆さを克服する強さや気高さについても併せて考えさせたい。

五 指導上の留意点及び配慮事項

○文中に「津波でおばあちゃんと家を失った。」という表現があるため、震災でつらい思いや身近な人を亡くした経験のある生徒がいる場合は、事前及び事後に個別の配慮が必要である。

○郷土愛にも重なる要素がある。生徒の実態に合わせて、近隣の伝統行事を取り上げながら資料を提示するとより共感できると考えられる。

ヒューストン日本語補習校だより

4—(4) 役割の自覚(中学一・二年)

一 ねらい

自己が属する集団への理解を深め、役割と責任を自覚し、集団生活の向上に努めようとする態度を育成する。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

ヒューストン日本語補習校に通うことになって間もない主人公が、東日本大震災への義援金活動を通して、補習校の一員としての自覚を深めていく様子から、集団の一員としてのあり方を考えさせる。

(2) 資料の概要

ヒューストン日本語補習校に通うことになった内気な主人公は、東日本大震災に驚く。そんな時、義援金を集めるために友達が集ったたり、チヨコレート菓子を売ったりした報酬を募金していることに気付く。自分も友達と一緒にやろうとするがなかなか行動に移せない。校長先生の一言がきっかけとなって、主人公は一步を踏み出す。そんな主人公の心の変化から、集団への所属感について考えを深めることができる資料がある。

(3) 資料を通して伝えたいメッセージ

東日本大震災に関しては、国内はもちろん、海外からも多くの御支援をいただいた。義援金を集めるために働いて得たお金を募金する等、国による考え方の違いを通して、成長していく主人公の姿を考えさせたい。また、小学校時代の友達に手紙を書けるようになった主人公の心情の変化を通して、どのような環境に置かれても、人間関係を大切にして協力関係をつくりあげるために、自ら進んで一步を踏み出すことの大切さを

伝えたい。

三 展開例(○発問、◎中心発問、・主な活動)

- 「僕もやるよ。」が言えない僕はどんな気持ちだったのだろうか。
- ◎「よいことは堂々としていいんだよ。」という校長先生の言葉を聞いたとき、僕はどんな気持ちだったのだろうか。
- 車を洗った後で二ドルを手渡されたとき、僕はどんな気持ちだったのだろうか。
- ・「僕のヒューストン日本語補習校だより」の内容を想像しながら話し合おう。

四 心のノートとの関連

「集団、そして一人一人が輝くために」(百四〜百七頁)を活用し、集団の中での自分の役割についての考えをまとめさせる。

五 指導上の留意点及び配慮事項

- 導入の段階で、「良いことは堂々としていいんだよ」の意味について考えさせてから、資料を読むこともねらいに迫る上で有効であると考えられる。
- 本資料は、日本語補習校等の用語の解説が必要である。また、東日本大震災や原発事故の際に、世界中から支援をいただいたことにも気付かせながら授業を進めたい。

塩むすび

2—(6) 感謝(中学二・三年)

一 ねらい

多くの人々の善意や支えにより日々の生活や自分があることに感謝し、それに応えようとする態度を育てる。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

東日本大震災による避難生活が長期にわたっていることの大変さを感じながらも、厳しい境遇の中でも前向きに生きる人々の姿や、困難に向かっている態度に共感させるように資料を活用する。

(2) 資料の概要

主人公の私は、避難所の生活にも慣れた頃、母親にうながされて食事を担当することになった。避難生活が長期化している中、避難者のために温かいおにぎりやみそ汁を出そうとする食事係。

食事係の人々のがんばりやたくましさ、避難所生活での問題を克服する姿を通して、食事係の一員である中学生の私の心の変容を描いている。

(3) 資料を通して伝えたいメッセージ

避難所で支援される側から支援する側になって、初めて周囲の人々の努力や気遣いに気付いていく主人公の心の成長をとらえさせたい。そこから他の人とかかわりに始まり、集団の中での感謝の心、食事をいただくという自然への恵みについて考えさせたい。

三 展開例(○発問、◎中心発問、・主な活動)

- 母に食事係を促されたとき、私はどんな気持ちだったのだろうか。
- 私が「塩むすび」のアイデアに素直に賛成できなかったのは、どうしてだろうか。

てだろう。

- 塩むすびをおかわりする人々を見たとき、私はどんな気持ちだったのだろうか。

◎「食事係で新しい世界を知った。」ときの私はどんな気持ちだったのだろうか。

○「温かい塩むすびに教えられた。」ことは、どんなことだろうか。

- ・大人と子どもの二人一組で応募する「十七字のふれあい事業」から二作品を紹介する。

四 心のノートとの関連

「ふるさとに自分ができることはなんだろうか」(百二十二頁)について、考えをまとめさせる。

五 指導上の留意点及び配慮事項

- 避難所の生活が長期にわたっている場面を想起させるため、具体的なエピソードを紹介すると状況が捉えやすい。
- 実際に避難所生活の経験がある生徒がいる場合は、十分に配慮する。

ありがとうの唄

4—(4) 集団の向上(中学二・三年)

一 ねらい

集団の意義についての理解を深め、自己の役割と責任を果たし、集団生活の向上に努めようとする態度を育てる。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

集団は、一人一人の協力があつて維持されるものである。そのため、互いの人間関係を大切にするとともに励まし合う協力関係をつくりあげていくことに注目させ、一人一人がかげがえのない存在であることに共感させたい。

(2) 資料の概要

震災以降、転校する仲間、転入する仲間と、入れ替わりがある学級で迎えた最後の合唱コンクールでのこと。モモは伴奏を務めて金賞二連覇を目指したかった。様々な考えが交錯する中で、級友をはじめ、他者の思いに気付き始めた学級は、全員一丸となつて合唱曲を作り上げステージに上った。結局、賞は何一つもらえなかったが、担任や保護者、客席にいる地域の人々への思いも込めて歌った歌は、モモにとつても学級の仲間にとつても忘れられない歌となる。

(3) 資料を通して伝えたいメッセージ

合唱曲の歌詞にある「生きてこそその出会い」であることに、生徒自身が自ら気付く姿を通して、仲間に対する思いや他者を尊重する心、一つのことをやり遂げる困難さや成就感を味わわせながら一人一人が集団の中で自らのよさを発揮していることに気付かせたい。

三 展開例(○発問、◎中心発問、・主な活動)

○「モモが曲をつければ大丈夫。」と言われたとき、私は、どういう気持ちだっただろうか。

○「みんなそれぞれに思いを伝える。」とあるが、どんな思いを伝え合つただろうか。

◎マーちゃんの涙を見たとき、私はどんな気持ちだっただろうか。

○合唱曲ができあがつたとき、私はどんな気持ちだっただろうか。

○夕焼け空を見ながら私は、何を思っていただろうか。

四 心のノートとの関連

「思いやる心を他の人とかかわり」(四十〜六十九頁)を読んで、日常生活を想起する。

五 指導上の留意点及び配慮事項

○難しい決断を迫られた一人一人がどのように課題を克服したのかを考えさせる場合、転出入生の多い本学級に対して、周りの学級も寛容で温かかったことを情報として伝えたい。

つむぐ命

3 — (1) 生命尊重 (高校生)

一 ねらい

自他の命を守るため、使命感を背負いながら職務に全うする人々の姿を通して、自他の生命の尊さを理解し、かけがえない命をつむいでいこうとする態度を育成する。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

東日本大震災以降、最前線で活躍する警察官やその家族には様々な試練があった。使命感をもって自己の仕事に従事しながら、各々が成長し、命の重みを実感しながらも前向きに生きようとする姿を通して、勤労観や生命尊重の意味を考えさせる。

(2) 資料の概要

本資料は、福島県警察官やその家族の手記、および福島県の子どもの達の手紙を一部抜粋したものである。自分や家族、そして何より職責を全うするために、今できることを精一杯行う姿が描かれている。その結果として、自他の命を守り、仕事に誇りを持ち続けていることから、使命感や感謝の心、命を尊ぶ気持ちを深めさせることのできる資料である。

(3) 資料を通して伝えたいメッセージ

警察官の仕事を通して、人々の想いや願い、祈り、決意が見えてくる。これらを過去のものにせず後世にまで伝えていくことの重要性も理解させたい。

三 展開例 (○発問、◎中心発問、・主な活動)

- ・使命感と聞いて思いつくことを自由に想起させ、言葉の意味だけでなく、

具体的な経験や見聞きしたことを話し合う。

○ 四人の手記から、それぞれがどんな試練に立ち向かっていったか。また、そこからのような想いや決意が生まれただろうか。

○ 松本部長に宛てた手紙も含め、この手記はどのような思いから書かれたものだろうか。

◎ 「つむぐ命」とはどのようなことだろうか。

四 指導上の留意点及び配慮事項

○ 警察官の仕事に特化せず、全ての仕事人が人の役に立っていることを認識させることにより、将来の職業選択の動機付けにもつなげられると考える。

○ 本資料を扱う際には、東日本大震災や原発事故の際に身内や身近な人が亡くなった生徒に対しては十分な配慮が必要である。

五 補足資料 (次頁)

「つむぐ命」(平成二十四年 福島県警察本部) より抜粋

補足資料

「つむぐ命」

「過去」にならない現実が目の前にある

友達だと思っていた海は全てを飲み込んだ

あの日のままの町がある もと通りにしたい生活があるのに

私たち福島県人は、体感した「痛み」、そして「ふるさとに対する熱い想い」を
決して忘れてはいけない

「^{つむ}紡ぐ」とは、綿花や繭玉を^よ縫りあわせて1本の糸にすること

福島県人の「想い」「願い」「祈り」「決意」すべてを

私たちは、ずっと後世まで伝え、^{つむ}紡いでいく使命がある

紡いだ心を大きな和にしよう

負けない「絆」を互いに持った福島県人として

少しでも前に進もう

警察官は期待を胸に、今も活躍しています

そして、心の拠り所として、いつでもあなたの近くにいます

「つむぐ命」(平成24年 福島県警察本部)より抜粋

生きている 生きてゆく

1—(2) 希望・勇気・強い意志 (高校生)

一 ねらい

東日本大震災後の避難所で生活する人々の思い（やさしさ、人と人との絆、感謝、たくましさ、希望など）に触れさせることを通して、前向きに力強く生きていこうとする態度を育成する。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

避難所という苦しい状況の中でも、絶望に打ちひしがれることなく、現状を受け止め、たくましく生きている人々のつぶやきや写真が多数掲載されている。

読みやすい資料となっているため、一部分を取り上げてショートホームルームなどの短い時間で扱うことができる。授業者の工夫により様々な場面で活用できる。

(2) 資料の概要

本資料は「生きている 生きてゆく」(ビッグパレットふくしま避難所記)からの抜粋である。

ビッグパレットふくしまは、富岡町と川内村の住民約二千五百名の避難所となった。

避難所生活をしている人々の写真やつぶやきをもとに、様々な道徳的価値についての理解を深め、自分の生き方について見つめ直すことができる資料である。

(3) 資料を通して伝えたいメッセージ

人生には、様々な苦しみや悩みが伴う。困難な状況に出合っても、人と人が助け合い励まし合い、夢や希望をもって前向きにたくましく生き

ていくことの素晴らしさを伝えたい。

三 展開例 (○発問、◎中心発問、●主な活動)

- 夢の実現に向けて前向きに生きていくことの大切さについて考えていくことを伝え、自分の日々の生活や未来像について話し合う。
- どの写真に心を打たれたか。それは、なぜか。
- ◎どのつぶやきに心を打たれたか。それは、なぜか。
- これからの人生で大切なことはどんなことだろうか。
- 授業を通して「前向きにたくましく生きていくこと」について感じたこと、考えたことをまとめる。

四 指導上の留意点及び配慮事項

- 東日本大震災についての説明が必要になる。地震だけでなく、津波、原発事故なども関連してくる。現在も避難生活を強いられている人も多く、学校での取り扱いには配慮が必要である。
- 取り扱う際は、悲しみや苦しみにスポットを当てるのではなく、前向きに明るく生きていこうとしている人々のたくましさや力強さ、そして、人のやさしさに目を向けさせたい。

長崎からの手紙

3—(1) 生命尊重 (高校生)

一 ねらい

生命の終わりを迎えた女性と、高校生の間での、「生命」に関するやりとりを通して、生命の尊さや、生命が他の生命に与える影響について、改めて認識し、生命に対する畏敬の念を養う。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

時代と場所を越えて存在する生命が、ひとつの歌をとおして結びついたことを示す資料である。人の生命は、その生命が存在する時はもちろん、たとえ終わりを迎えても、生きている人の心を動かしたり、行動を起こさせたりする力があること、ひとりひとりの生命は、他の生命との関わりにより存在していることに気付かせる。また、人の意図や時間、場所を超えて関わり合う生命に気付かせ、その崇高さを感じさせる。

(2) 資料の概要

この資料は、福島県立郡山商業高等学校の二年生が、修学旅行で訪問した長崎で出会った、九十四歳の女性とその家族との交流の記録である。平成二十二年十月、長崎の平和祈念像の前で、郡山商業高校の卒業生太田博氏が作詩し、沖縄戦で悲劇的運命に翻弄されたひめゆり学徒隊の愛唱歌となった「相思樹の歌(別れの曲)」を合唱した生徒をみかけた九十四歳の女性が、その合唱に感動し、学校に手紙をくれたことから交流が始まる。震災、原発事故を経て、女性はこの世を去るが、その子ども(長崎原爆の被爆者)から、福島に生きる高校生へ、生きることへの力強いメッセージが送られた。

(3) 資料を通して伝えたいメッセージ

一人一人の命は有限であるが、その命をどう生きたかは、自分の意思を超えて、別の人に受け継がれていくものであること、だからこそ、限りある命をどう生きて行くのかを考えることや、他の人の命を尊重することが大切であることを伝えたい。

三 展開例 (○発問、◎中心発問、・主な活動)

- ・「命の大切さ」を感じたことを想起する。
- 高校生の歌が、恵美子さんの心を動かししたのはなぜか。
- 「母に最後の思い出をありがとうございました」という言葉を、高校生はどのように感じただろうか。
- 被爆者である息子さんからの励ましを、あなた自身はどのように感じたか。
- ◎ 自分自身の命と他の命が繋がっていると感じることに、話し合ってみよう。
- あなたが命を終える時、どのような人生だったと思いたいのか、考えてみよう。
- ・ 授業者の話(授業者の経験による、命の尊さや有限性についての説話)を聴く。

四 指導上の留意点及び配慮事項

○ ひめゆり学徒隊や長崎への原爆投下についての事実は、教科との関連の中で指導する。ここではエピソードを確認する程度とし、生命の尊さを中心に取り扱い、話題を広げすぎないようにする。

五 補足資料(次頁)

相思樹の歌(別れの曲)

相思樹の歌（別れの曲）

作詞 太田 博

作曲 東風平 恵位

目に親し 相思樹並木
 往きかえり 去り難けれど
 夢の如 疾き年月の
 往きにけん 後ぞくやしき

業なりて 巢立つよろこび
 いや深き 嘆きぞこもる
 いざさらば いとしの友よ
 何時の日か 再び逢わん

学舎まなびやの 赤きいらかも
 別れなば なつかしからん
 吾が寮に 睦みし友よ
 忘るるな 離り住むとも

微笑ほほえみて 吾等われらおくらん
 すぎし日の 思い出秘めし
 澄みまさる 明るきまみよ
 すこやかに 幸多かれと
 幸多かれと

「太田博遺稿集」二〇一〇年十月三十日

福島県立郡山商業高等学校同窓会

— 無名詩人遺稿集編集委員会編より —

チェーンメール

1—(3) 自律(高校生) 情報モラル

一 ねらい

震災時に送られてきたメールの扱い方を通して、自ら考え誠実に対応して、自分の行動については、率直に責任を取ろうとする態度を育成する。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方
情報の信憑性について確認し、適切な情報と方法により他者へ伝達するためのネットワーク上のモラルを守り、情報社会に参画する態度を育てる。

大震災の影響で情報が普段どおりに受信できない中で、緊急性を要する内容のメールが届いた時、何を根拠に情報の信憑性を判断し、どのように対処すべきかを考えさせる。

(2) 資料の概要

本資料は、大震災時に送付されてきたという想定 of 仮のメールと、そのメールに対しての予想される反応である。

大震災の影響で情報量が限られている状況を資料の数字から確認し、震災時の環境下において、資料のようなメールが届いた時に、情報の信憑性をどのようにして確認するか、その難しさを実感させる。

情報モラルの指導で、チェーンメールやネット利用のマナーなど、今までに教科等で学習した知識を踏まえながらも、内容や状況によって単純に判断ができないこと、また判断する難しさを踏まえた上で、自己の在り方生き方について考えさせたい。

(3) 資料を通して伝えたいメッセージ
チェーンメールは送信しない、自分で止めようということは、心理的

な葛藤からその場面になると難しいと言うことについて深く考えさせたい。

三 展開例(○発問、◎中心発問、・主な活動)

○なぜ僕は「情報が入ってきて混乱した。」のだろうか。

○今までに味わったことのない感覚とあるが、そのとき、僕はどんな気持ちだったのだろうか。

○パソコンでメールをチェックしたとき、僕はどんな気持ちだったのだろうか。

○ヤスシのメールを転送したとき、僕はどんな気持ちだったのだろうか。

◎母や姉の会話を聞いて、僕は動けなかったとあるが、それはなぜか。

四 指導上の留意点及び配慮事項

○情報モラルにおけるチェーンメールについての指導に留まらず、大震災時のような非常時における判断の難しさを考えさせたい。

○資料の「僕」の行為についての是非で終わるのではなく、判断した理由を考えさせ、話し合いを深めさせたい。

○情報を安易に流してしまうことによって生じる社会的な混乱等についても、思考の幅を広げさせたい。

福島に生まれて

4—(8) 郷土愛（高校生）

一 ねらい

生命の尊厳、助け合いと感謝の心、主体的な生き方、地域や集団における役割等についての人物の言葉を通して、生き方についての考察を深め、道徳的実践意欲を育成する。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

演劇シナリオをテキストに、震災によって得られた様々な教訓を振り返らせるとともに、道徳的精神に基づく生き方・考え方についての関心を深めさせる。

(2) 資料の概要

本資料は、本県高校生が寄せた生の言葉がそのまま演劇の台詞として活かされたものであり、同世代の児童生徒には共感をもって訴えかける内容となっている。ナビゲーター役の「庄助」「桃子」を軸に、生徒一人一人が震災をとおして感じたこと、学んだこと、郷土の復興にかける思い等を力強く訴える内容となっている。

(3) 資料を通して伝えたいメッセージ

震災体験によりあぶり出された「命の尊重」「他者への感謝」「責任の自覚」「郷土愛」等の道徳的精神は、平穏な日常生活においては意識されにくいものであるが、個々の人生や地域社会・共同体をよりよいものにするために欠くことのできないものであることに気付かせたい。

三 展開例（○発問、◎中心発問、・主な活動）

- ・「ふくしま総文」の概略と成果について知る。資料朗読により内容をつ

かむ。

・構成劇「ふくしまからのメッセージ」DVDを鑑賞し、各自で感想をまとめる。

○劇の中で、あなたが特に共感を覚えた、または考えさせられたセリフは何か。

◎震災を経て、あなたは何を学んだか。自分自身の体験をふまえて考えてみよう。

四 指導上の留意点及び配慮事項

○本資料の素材は本来、上演を目的に制作された舞台芸術であることから、ステージの感動を追体験出来るよう、可能な限り映像、音声資料等を併用することが望ましい。なお、DVDは再生時間が約六十三分となっているため、視聴を伴う場合は、二単位時間程度を活用されたい。

○各自で整理した感想をもとに意見交換を行い、他者の感じ方や考え方に触れさせ、一人一人に人間としての在り方生き方を考えさせたい。

五 補足資料（次頁）

「福島に生まれて」第三十五回全国高等学校総合文化祭「ふくしま総文」より

補足資料

「福島に生まれて」

構成劇は、感動の涙と万雷の拍手に包まれながら幕を閉じた。生徒一人一人が、メッセージに込められた思いのたけを全力でステージにぶつけた。

大会終了後も思いがけない形で反響が続く。

当日のステージを観覧された秋篠宮殿下は、異例のコメントを寄せられた。近藤文化庁長官には地元新聞2紙に特別寄稿をいただいた。福島南高校の生徒実行委員・佐藤季がつづり、桃子の最後の台詞として採用された「福島に生まれて」は、野田佳彦首相の所信表明演説にも引用された。

後日、生徒たちと面会した佐藤雄平福島県知事は、「舞台と観客とが何度も何度もひとつになった」としみじみ感想を漏らした。英語字幕版DVDができると、感動は、ついに海外へと波及する。各国の大使が次々と賞賛の声を寄せた。オリンピックと時期を合わせて開催された、ロンドンの「ジャパン・フェスティバル2012」でも上映されることとなった。

大会の熱気がようやく一段落し、生徒実行委員も解散すると、高校生たちは少しずつ日常を取り戻していった。

インターネットの動画サイトに残された構成劇「ふくしまからのメッセージ」は、いまだに再生数が増え続けている。「ふくしま総文」の記録を収めた「タイムカプセル」は、福島市街地を見下ろす日本庭園「浄楽園」に埋められている。開封予定日は、2022年3月11日である。

※構成劇の動画資料は、平成23年度末に県内各高校に配布された「ふくしま総文・記録DVD」に全編収録されている。著作権の帰属や、許諾に関する業務の所管は福島県教育委員会となる。

第
III
章

实践事例集



1 福島を「フクシマ」にはしない

ゲストティーチャーを活用した道徳教育

(中・高校生)

一 実施のねらい

東日本大震災・原発事故から、二年の歳月が経つ今、次第にあの出来事が少しずつ忘れ去られようとしている。しかし、今なお多くの人々が避難生活を余儀なくされ、戻りたくても戻れない状況の中で生活している現実がある。このような現状の中で、絶望にうちひしがれるのではなく、被災者に思いを寄せながら、生かされていることに感謝するとともに、自分たちを育ててくれた地域の人々に尊敬と感謝の気持ちを持ち、郷土のよさを受け継いでいこうとする態度を育成していきたい。

二 生徒の実態

東日本大震災・原発事故により、屋外活動の制限等、様々な面で制限される生活を強いられるようになった。生徒の中には、東日本大震災・原発事故によって身内や身近な人が亡くなったり、自分の故郷を苦渋の思いで離れ、県外に避難したり、県内の仮設住宅で生活したりしている者もいる。現在、東日本大震災・原発事故により、区域外から転入した生徒が在籍している学校は数多くある。これらの生徒の中には、週末になると身内が避難している地域に帰り過ごす生徒もいる。戻りたくても戻れない故郷、身内が亡くなり自分だけが生きているという罪悪感等、様々な葛藤を抱えながら生活を送っている生徒には、取り上げる資料についても配慮する。

三 教材開発の報告

今回の実践報告は魅力的な教材の開発という観点から取り組んだものである。魅力的な教材の開発という点では、東日本大震災・原発事故を扱った詩であり、生徒の実体験をもとに生と死の問題や自分を支えてきた地域や地域の人々への感謝の気持ち、これからよりよく生きることを意味を深く考えることができる本作品は、生徒の心に響くという点で魅力的な教材に成り得るものである。

教材化に当たり、まず筆者である溝井勇氏に、この詩に込めた思いや願いを聞きたいと考え、取材を行った。溝井氏は、「東日本大震災・原発事故以降、進まない復興と事故収束の見通しが立たない現状にあって、生きるということに危機感を覚えている。生きている実感を持つことは、自分の生を発見することである。それには、今回の出来事に口を閉ざすのではなく、言葉をつないで表現することが生きる意味を確認することになるのではないか。」と述べられた。実際に授業を行う際に、授業者はこの作者の思いを受け止め、授業を展開することで、生徒の思考にも深まりがでるものと考えた。

さらに、授業の終末段階で、ゲストティーチャーの活用場を設定する。溝井氏を教室に招聘し、ゲストティーチャーとして生徒に出会わせたい。作者である溝井氏から、震災で考えたこと、詩への思い、表現する魅力等を直接聞くことによつて、生徒の思考が深まるものと考えられる。

ゲストティーチャーの活用は、道徳の時間に授業を行う際に、資料の内容理解や生徒に道徳的価値を自覚させる上で効果的である。しかし、いつでも必要なときに同じゲストを招聘することは難しい。そこで、様々な学校でこの詩を用いた実践が可能になるよう、作者から生徒へのメッセージを書いていただき、広く一般化できるように工夫した。また、筆者からのメッセージは、授業の終末で道徳的価値の自覚を深めるために活用したが、中心発問との関連で活用することも有効であると考えた。

「福島を『フクシマ』にはしない」という詩は、東日本大震災・原発事故を経験し、生きていることの尊さ、生かされていることに感謝する気持ち、さらに自分を育ててくれた郷土と人々への尊敬と感謝の気持ちを深めさせるものである。

そこで、活用例についても、生命尊重に焦点を当てた場合（活用例1）と郷土愛について焦点を当てた場合（活用例2）について提示する。ゲストティーチャーからのメッセージを手がかりに、地域や生徒の実態に応じて、この詩を書いた作者の感じさせていきたい。

四 指導上の留意点

導入の段階では、生徒に道徳的価値を把握させるために、「心のノート」を活用したり、東日本大震災で経験した事柄を短文等で表現させたりする等、価値への方向付けをする。また東日本大震災の写真を提示することで、その時の気持ちを振り返らせるのも有効であると考えられるが、その際には、身内や身近な人を亡くした生徒もいるので、十分な配慮が必要である。展開の段階では、詩が描いている状況を感じさせ、生徒の素直な思い・気持ちを大切にしていきたい。ワークシートなどを用いて、書く活動を中心に自分の思いを客観的に把握させていきたい。他の生徒の思いとどう違うのか、同じ環境の生徒はどのような思いでいるのかなど、発表する場を設けて、それぞれの思いを比較させることによって、思考が高まり道徳的価値の自覚を深めることが期待できると考えた。

また、総合的な学習の時間での「地域学習」や各教科との関連を図るも大切である。

五 考察

東日本大震災・原発事故から、もうすぐ二年が過ぎようとしている。あ

の出来事を経験した私たちは、まだ以前のような生活を取り戻していない。もしかしたら、一生取り戻せないのではないかと不安の声もある。故郷に戻りたくても戻れずに、県内外に避難生活をしている生徒たち。故郷で遊んだ仲間にも、あの日以来会っていない生徒たち。大事な仲間や身内を亡くした生徒たち。区域外の学校に仕方なく転出していった生徒たち。残念ながら、これらのことが様々なメディアで語られることは少なくなり、記憶も薄れていっていると思う。

今回の実践資料には、未だ不自由な生活を強いられている生徒たちが、東日本大震災・原発事故を振り返ることによって、生きている事の意味を考え、人々への感謝の気持ちを持ち、これから生きていく上での糧としてもらいたいという願いを込めた。また、あの出来事を風化させないための記録集としての意味合いもある。今後、様々な学校で実践され、よりよいものへと工夫改善されていくことを願う。

六 資料（次頁）

七 資料の活用例（百二十一・百二十二頁）

- （活用例1） 生命尊重に焦点を当てた場合
- （活用例2） 郷土愛に焦点を当てた場合

八 作者からのメッセージ（百二十三頁）

福島を「フクシマ」にはしない

溝井 勇

I

恐怖の揺れから七ヶ月
あの日の記憶を片時も忘れさせまいと
余震が攻めてくる

友人からの悲報
Aの高校の体育館
数十体の遺体が安置されていた

Bの弟は
住民の避難誘導中に津波に攫われ
遺体は一ヶ月半後に発見された

悔しそうに言葉を絞り出す
悲惨な光景が目には焼き付いて眠れないという
私は受話器を握ったまま頷く

大地震と大津波
そのうえに 原発事故
月日が経っても
生きるこの意味を探し倦ねている

兎に角夜明けが待ち遠しかった
ただ時が経つのを
暗闇の中で余震に震えていた

玄関を開け放って
深呼吸することは出来なくても
朝が来たというだけでも嬉しかった
生きていることが実感できた

生き続けること
尊く
そして 愛しい

II

帽子を被りマスクで顔を覆い
スーパリーの入り口に並んだ

余震
表情が強ばる

店内は薄暗く
天井板の破片が散らばっている
陳列棚の少ない品数を
カゴに入れてレジに並ぶ

軋む家
萎む生活空間
原発情報のもどかしさ

身も心も疲弊している

「とにかく逃げろ！
……すぐに戻れるから。」
逃れなければならぬ理由はない
何処にもない

田畑は荒れ
村は季節の顔を失った
人々は去り
放たれた家畜は野生化した

思い出を取り戻してやろうと
捜索員が警戒区域内に入り
泥だらけのアルバムを拾い上げる

福島が悲鳴を上げている
福島の子どもたちが危機に曝されている
福島の土が水が空気が汚されている

福島に何の咎があるというのか
命を育んできた郷土が
呼吸が

見えない魔物によって脅かされている
福島が「フクシマ」であってはならない
忘れ去られることを拒否する
そのためにも
言葉を繋ぎ語り続ける

福島を「フクシマ」にはしない

3 — (1) 生命の尊重 中学二・三年〜高校生

一 ねらい

生きていることの尊さを感じ、自他の生命をかけがえないものとして尊重する態度を育成する。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

「忘れ去られることを拒否する」という強い意志を持って、「言葉を繋ぎ語り続け」ようとする筆者の生き方について考えることを通して、東日本大震災、原発事故を経験してもなお、絶望にうちひしがれるのではなく現状をしっかり受け止め、生きることの意味や尊さを考えさせる。

(2) 資料の概要

本資料は、以前とは変わり果てた福島の現状を詩をもって表現したものである。被災者に思いをよせながら、自分が生きている尊さ、生きていることのすばらしさ、生きていることへの感謝を考えさせることのできる資料である。

(3) 資料を通して伝えたいメッセージ

東日本大震災や原発事故で多数の犠牲者が出た中で、自分が生きていることの尊さ、生かされていることに感謝する気持ちを持つことの大切さを伝えたい。

三 展開例 (○発問、◎中心発問、・主な活動)

・心のノート(七十二〜七十三頁)を活用し、生命について感じたり、

考えたりしたことを発表する。

・詩「福島を『フクシマ』にはしない」を読んで、話し合う。

○この詩を読んで、どんな事を感じたか。

○筆者が「生き続けること、尊く」と感じたのは、どうしてだろう。

◎心に印象に残った言葉はどの部分だろうか。どうして印象に残ったのだろうか。

・今日の授業を通して、「生命」について感じたこと、考えたことをまとめる。

・ゲストティーチャーの話聞く。

四 心のノートとの関連

「心のノート」の「かけがえない命」(七十二〜七十五頁)を活用し、各教科や領域との関連を図りながら「生命」についての考えをまとめる。

五 指導上の留意点及び配慮事項

○作品の「I」に注目して、生命について深く考えさせ、生きていく意味を考えさせたい。

○終末でのゲストティーチャーの話は、ゲストティーチャーからのメッセージを代読することによって、ねらいにせまることもできる。

○本資料を扱う際には、東日本大震災や原発事故によって身内や身近な人が亡くなった生徒に対しての配慮が必要である。

六 補足資料(百二十三頁)

作者からのメッセージ

福島を「フクシマ」にはしない

4 — (8) 郷土愛 中学二・三年〜高校生

一 ねらい

地域社会への認識を深め、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬と感謝の念を深め、郷土の発展に努めようとする態度を育成する。

二 資料の特質

(1) 資料の生かし方

「忘れ去られることを拒否する」という強い意志を持って、「言葉繋ぎ語り続け」ようとする筆者の生き方について考えることを通して、東日本大震災、原発事故を経験してもなお、絶望にうちひしがれるのではなく現状をしっかり受け止め、生きることの意味や尊さを考えさせる。

(2) 資料の概要

本資料は、以前とは変わり果てた福島の現状を詩をもって表現したものである。変わり果てた郷土を目の前に、これまでの自分が地域の人々によって育てられてきた思いを抱き、それらの人々への尊敬と感謝の気持ちを深めさせることのできる資料である。

(3) 資料を通して伝えたいメッセージ

郷土の姿は変わっても、自分が地域の人々に支えられ、伝統や文化の中で成長してきた事実は変わらない。今まで自分を育ててくれた郷土と人々への尊敬と感謝の気持ちを深めさせたい。

三 展開例 (○発問、◎中心発問、・主な活動)

・心のノート(百二十〜百二十一頁)を活用し、「ふるさと」につい

て感じたり、考えたりしたことを発表する。

・詩「福島を『フクシマ』にはしない」を読んで、話し合う。

○作者が「福島が悲鳴を上げている」と感じたのはどうしてだろう。

○「命を育んできた郷土」とは、どういうことだろうか。

◎「福島が『フクシマ』であってはならない」とは、どういうことだろうか。

・今日の授業を通して、「ふるさと」について感じたこと、考えたことをまとめる。

・ゲストティーチャーの話聞く。

四 心のノートとの関連

「心のノート」の「郷土をもっと好きになろう」(百二十〜百二十三頁)を活用し、各教科や領域との関連を図りながら「ふるさと」についての考えをまとめる。

五 指導上の留意点及び配慮事項

○作品の「Ⅱ」に注目して、郷土についてあらためて考えさせること
で、生きていく意味を考えさせたい。

○導入の段階で、タイトルの中にある「フクシマ」の意味について考えさせ、展開に入るのもねらいにせまる上で有効であると考え。

○本資料を扱う際には、東日本大震災や原発事故によって身内や身近な人が亡くなった生徒に対しての配慮が必要である。

六 補足資料(次頁)

作者からのメッセージ

中高生のみなさんへ ～「言葉の力」を信じて～

2011年3月11日の東日本大震災により、数多の人命が失われ家々が流されました。そして、東京電力福島第一原子力発電所の全電源喪失から始まった水素爆発や炉心溶融による放射性物質の大量拡散によって、多くの福島県民が故郷を追われ、未だに長く苦しい避難生活を強いられています。

あの日から2年が経ちました。大地震と大津波、そして、原発事故によってもたらされた被害の大きさと、その衝撃に何をどう表現すればいいのか、言葉を失った一時期もありました。何気なく過ごしてきた日常の中に、本当に大切なことは何だったのか、と問いかけ続けた日々でもありました。

真の復興は、一人一人の経験を大切にしながらなされるべきです。深い悲しみや絶望のままに孤独に生きる人々にとっては、「頑張ろう」や「絆」という言葉が、かえってその人を苦しめる場合もあります。

私たちは、「未曾有」「想定外」「ただちに健康に影響はありません」等々、言葉の曖昧さに不信感を抱かざるを得ませんでした。低線量被曝のリスクを背負わされた私たちは、原発事故の背景を聞いたり調べたりして真実を知り、自分の言葉で語ることのできる力を習得すること、想像力と感性を育むことの必要性を学びました。それには、相手の話に耳を傾け、その内容をよく聞き取り、自分なりに考える習慣を身に付けることです。言葉を通して自分の思いを相手に伝え、共に学ぶことの喜びを感じ合いながら、物事を追求していく仲間づくりをしましょう。

みなさんは、震災後、自分たちの生活や、人と人との寄り添い共に生きようとするために、思いや考え方がどう変わったのかを見つめることができますか。それには、事実をもとに具体的に書き、記憶を自分で記録することです。そして、その礎を築いていくために、普段から新聞を読んだり、関連図書に触れたりする機会を持ちましょう。

現在、原発事故の記憶が忘れ去られようとしています。県内外に放射性物質が拡散し、故郷の美しい自然が汚染されたという事実は否定できません。そういう中で、私たちは、自分なりの拠り所を持って生きていくことが、福島の未来を考えるうえでとても大切なことを知りました。脈々と受け継がれてきた伝統と誇りある暮らしを守り育てていくために、コミュニティーを絶やすことなく、次の世代に繋いでいかなければならないと思います。東日本大震災を契機に、よりしなやかに、よりたくましく生きてゆくことが求められています。

こおりやま文学の森資料館長 溝 井 勇

2 鎮魂と新生

「新聞記事を使って生き方を考えさせる道徳教育」

一 実施のねらい

新聞のコラムを読み、命の大切さに気付き、自然への畏敬の念を深める。

二 生徒の実態

生徒は、中学校で、主に他人、自然や崇高なもの、集団や社会とのかかわりを通して自分自身を見つめてきた。高校生として、それをさらに深め、人間としての在り方生き方を考え、道徳的実践力を一層高め、最終的には未来を拓く主体性のある社会の形成者となるべく自己形成が行われなければならぬ。

現在の高校生は、自分の良さに自信が持てなかったり、相手に自分の考えを伝えることに苦手意識を持つたりする傾向が強い。道徳の学習の中で、友達と話し合い、友達の考え方や感じ方を理解し、自分自身のよさにも気付かせたい。それを通して、自己形成に欠かせない自尊感情を育てたい。

また、本県の高校生の多くは、震災を通して、健康に毎日をご過ごせることのすばらしさや生命の大切さを感じることを、直接的あるいは間接的に少なからず経験している。今生命について真剣に考えることは、生徒が生命の尊さに対する理解を深めるよい機会であると思われる。

三 教材開発の手順

(1) 「天声人語」の資料の分析

この資料は、南三陸町での出来事に基づいた詩を引用し、その詩につ

(2) 提示方法の検討

① 本時は、資料を読んで話し合い、「自然や生命に対する畏敬の念」へと展開させるといふ構想に基づき、授業を構成する。資料の提示の仕方によつては、中心となる価値から大きく離れる恐れがある。導入時に、東日本大震災について触れ、生徒の自分の体験に関連した資料であること、本時は「命」と「自然」について考えて話し合うことを明確にして、授業を進める。

資料を範読する前に、震災当日、南三陸町で起こったことの概要を知らせ、生徒の内容理解を促進する。

三月十一日の大地震の直後、南三陸町の防災対策庁舎二階の防災無線から、ある女性職員が「六メートルの津波が予想されます」「異常な潮の引き方です」「逃げてください」と三十分にもわたり懸命に放送し続けた。津波はその庁舎にも迫り、女性職員は屋上に避難したが、帰らぬ人となった。

範読後には、引用された詩の中の「わたし」など比喩として用いられている語(句)についても確認する。

授業の終末では、「教師の話などを聞く」場面を設け、震災当日に

資料と同様の事例で福島県でも多くの命が救われたことの紹介や震災当時と現在の街や人の様子の比較を通して、福島県民も復興に向けて努力していることを実感させ「新生」が身近に感じられるよう配慮する。その際、生徒の状況理解を補助する視聴覚教材や読み物なども必要に応じ使用する。

- ② 資料中には難解な語句が多いので、生徒の理解を助けるため、意味を教師から提示し、読み取りに負荷をかけず、自分の体験を踏まえて考え話し合うことに重点をおく。

(例) 美談……美しい話。聞いて感心するようなりつばな行いの話。
畏怖……おそれおののくこと。

悔悟……自分のした事が悪かったことを認めて後悔すること。

勁さ……ピンと張った弦のようなしなやかな強さを意味し、「強さ」(甲虫の殻のように堅い強さ)とは異なる。細くても強くて曲がらない、柔らかいけれど一本芯のある強さを表している。

鎮魂……死者の霊魂を慰めしずめること。

新生……新しく生まれ出ること。生まれ変わった気持ちで新たな人生を歩みだすこと。

- ③ 「教師の話などを聞く」では、必要に応じ、補助資料等を活用し、生徒の状況理解を支援する。

・今、南三陸町では、町民が丸丸とあって、「南三陸町に住んでよかった」と思えるまちづくりを目指して、全力で取り組んでいることを紹介する。

・福島県や身近な地域などのことを紹介する。

例1 震災当日、福島県でも資料のような出来事がたくさんあり、多くの人の命が助けられた。JR新地駅でホームに止まっていた常磐線の電車が津波に襲われた。車両には多くの客が乗っていたが、全員が直前に避難して無事だった。たまたまその電車

に乗っていた福島県警の二人の若い巡査が津波襲来の情報を得て、約四十人の乗客全員を高台にある新地町役場に避難誘導したのだった。(朝日新聞 平成二十三年四月四日の記事に詳細が掲載されている。)

- 例2 震災当時の街の様子と現在の街の様子を写真などで紹介する。

例3 震災当時の学校の様子と現在の学校の様子を写真などで比較する。

例4 震災後、仕事に復帰できた商店の写真や仕事を再開した人の前向きなコメントを紹介する。

例5 震災後、ボランティアとして活動している自校の生徒の例などを紹介する。

例6 ふくしま総文の構成劇「ふくしまからのメッセージ」(「福島に生まれて」八十四頁参照)から 桃子と庄助の最後の台詞を紹介する。

桃子「福島に生まれて、福島で育って……」

庄助「不安な日々が続き、なかなか前へ進めない、……」

- ④ 震災体験や資料中の出来事と類似体験のある生徒などの心情にも十分配慮し、学校や学級での資料使用の適否や資料活用方法について慎重な姿勢で取り扱う。

四 指導上の留意点

- (1) 資料の紹介や関連事項の説明が、被災生徒等の過重な負担にならないよう配慮する。生徒の発達の段階や学校や学級の実態をしっかりと把握し、資料使用の適否や資料活用方法について慎重な姿勢で取り扱う。

(2) 南三陸町での出来事を中心とした題材ではあるが、高良さんがその事実をとらえて「詩」を創作し、それを読んだ筆者がその詩あるいはその

詩の中に使われている言葉に筆者なりの「思い」を持ってコラムを書いたというそれぞれの視点が介在していることに留意して資料を活用する。話し合いの中で多様な考え方や価値観に気付き、友達や自分自身のよさを認め合えるようにする。

五 「授業における予想される生徒の反応」

○自分の生活の中で、どんなときに「命の大切さ」を感じるか。

- 震災のとき
- 誕生日を迎えたとき
- ニュースで映像を見たとき（交通事故、紛争、七五三や成人式等の行事等。）

※その他、自分や周囲の人々の生命について命の大切さや尊さなどについて生徒の考えをもとに話し合わせる。

- 震災で多くの命が失われ、命の大切さを感じた。
- 震災後、たくさん不便があったが、自分が生きているということの大切さを感じた。
- たくさんの人たちが、私たちの生活を支援するため全国各地から駆けつけてくれた。私たちの命は単独で存在するものでなく、多くの命とつながっていることを実感した。

○「高良さんの詩は、ひとりの女性への静かな敬意に満ち、人間が自然への畏怖を忘れてきたことへの悔悟が流れている。」と筆者は言っている。

- ① 筆者は女性職員のどんなところに「敬意」を感じたのか。
- 責任感や住民の命を守ろうとする思いなどについて生徒の考えをもとに話し合わせる。

• 仕事に対する責任感

• 自分以外の人の命を大切にすること

• 女性職員のみんなの命を助けようとする強い思い

• 大自然にあらがって、一人の人間が必死に訴えたこと

※「自然や人間の生命への畏敬」や「新生」という方向に展開し、「命を犠牲にして他者を救うことを肯定する」方向に向かないようにする。

② 「自然への畏怖」とはどのようなことだと思うか。

- 自然の大きさへの畏怖の念
- 人間の力を超越した自然の力への畏れ、などについて生徒の考えをもとに話し合わせる。

- 地震や津波といった自然がもたらす現象への畏れ
- 人間にはどうにもできない大きな力への畏れ
- 人間の力を超越した自然の力を畏れていつも忘れずにいること

◎筆者の言う「新生の声が聞こえる」とは、どんなことだと思うか。

• 詩の中の「いのちが甦る」という言葉

• 生き残った人たちが新しい生活を始めていること

※自然の厳しさを超越する人間の命の尊さなどについて、生徒の考えをもとに話し合わせる。

- 女性職員の命を助けようとする強い思いは消えないということ
- 人の命を救おうとする人間の気高さ、勁さが、自然の厳しさを超越し忘れられない出来事となったという事実

・生き残った人たちが、女性職員の強い思いを大切にして、新たに生活をスタートしたこと
 ・壊滅的な被害を受けたが、それを乗り越えて、新しい生活が始まっていること

○自分の身近なところに「新生」と重なるものはあるだろうか。

・学校が再開した。
 ・震災によって壊れたものが修理され整ってきた。
 ・震災で起こった混乱も徐々に収まり、落ち着きを取り戻してきた。
 ・地域の復興を目標に、毎日勉学に励んでいる。

六 期待される生徒の変化

- ・自分の命も相手の命も大切にすること。
- ・思いやりのある行動ができる。
- ・日常の生活を充実させようと努力すること。
- ・他人のために役立つことを考え、実行すること。
- ・周囲のことを考えた行動ができる。

七 指導上の留意点及び配慮事項

津波・震災で大きな被害を受けた生徒もあり、本資料を使用することが生徒にとって強い刺激とならないよう注意する必要がある。

八 新聞記事（資料）の取り扱い

- (1) 資料とした朝日新聞の「天声人語」は、著作権者の許諾と文章の改編について許可をとる必要がある。そのため、次のような手続きを行った。
 - ① 「天声人語」の使用に係る朝日新聞社の著作権に関する許諾
 - ② 改編の許可（氏名等の個人情報と道徳教材に不必要な情報の部分の削除。）
 - (2) 道徳の授業等で、教科書等以外の補助教材を教員が作成する場合、公表された著作物を複製できる例外規定が、著作権法第三十五条第一項にある。ただし、次のような点に十分留意しなければならない。
 - ・授業のために教員が、公表されている著作物の一部を利用してプリント教材を作り、児童生徒に配付するようなことについては、著作権者の許諾を得ず行うことができる。
 - ・著作物の題名、著作者名などを明示しなければならない。
 - ・授業のために必要と認められる限度を超えて複製することはできない。
- ・授業以外の目的で使用する場合、著作権者の許諾を得る必要がある。
 ・著作物の種類や用途、複製の部数や状態に照らし著作権者の利益を不当に侵害することになる場合は著作権者の許諾が必要となる。例えば、ワークブックなどはその用途に照らし、授業といえども無断で複製し配付することはできない。

「天声人語」

東日本大震災のあと、数多くの言葉が紡がれてきた。印象深かったひとつが、詩人高良留美子さんの一作だ。「その声はいつも」の冒頭を引く。

へあの女はひとり／わたしに立ち向かってきた／南三陸町役場の防災マイクから／その声はいつも響いている／わたしはあの女を町ごと呑みこんでしまったが／その声を消すことはできない。津波を擬人化した「わたし」。「あの女」とは、最後まで避難を呼びかけた宮城県南三陸町のある女性職員のことだ。

あの日、被災地では、それぞれの使命を果たそうとした人たちが尊い命を落とした。警察官や消防署員、消防団員もいた。その職員のいた防災対策庁舎では41人の町職員らが亡くなった。個々の気高さを示しつつ、やはり痛恨のできことには違いない。

このできごとが美談にとどまるなら死者は浮かばれまい。高良さんの詩は、ひとりの女性への静かな敬意に満ち、人間が自然への畏怖を忘れてきたことへの悔悟が流れている。美談を超えていく言葉の勁さがある。

こう結ばれる。へわたしはあの女の声を聞いている／その声のなかから／いのちが甦るのを感じている／わたしはあの女の身体を呑みこんでしまったが／いつもその声はわたしの底に響いている。鎮魂と新生の声が聞こえる。

3 飯館校生の主張

↳教科指導と連動した道徳教育

一 実施のねらい

飯館校の学習指導の課題のひとつとして表現力の向上がある。国語科では一年次に「国語総合」、二年次に「国語表現Ⅰ」「現代文」、三年次に「国語表現Ⅱ」「現代文」を履修する。中でも「国語総合」「国語表現Ⅰ」「国語表現Ⅱ」の三科目は、表現力の向上を図るために設定している科目である。学習指導要領によると、この三科目はいずれも科目の目標に「『国語で表現する能力』『伝えあう力』を育てる」ことが書かれており、内容には「話す」「聞く」「書く」こと、内容の取り扱いには「スピーチ」が取り上げられている。飯館校では、各科目でこれらを踏まえ、年間指導計画に「作文を書いて発表する」学習活動を組み込んで三年間を通じて継続的に指導して表現力の向上を図っている。

一方で、後述のような生徒の実態を受け、自らの生活を見つめ直させる必要性が教員の中で話題となり、個々の生徒が抱く思いを学校全体で共有する方策を検討した。生徒の思いを共有するためには、まずはじめに、生徒一人ひとりが家族や友人、また、ふるさとに対する思いや現在の生活に対する思いなどをそれぞれが顕在化することで、自らの気持ちを整理し理解させなければならなかった。さらに、発表することにより、それぞれの思いを仲間や教員と共感できるようにする指導の工夫が必要であった。これらの課題を踏まえ、国語科の指導としてこれらの思いを表現する学習活動を行うこととした。指導においては、生徒それぞれが心の内に秘めていた思いに気付き向き合えるように「書く」の学習活動以上に「話す」「聞く」の学習活動を十分に取り入れ、発表することをおして思いを共有できる空間を広げていくことにした。これらの一連の指導により、自己理解

二 生徒の実態

と他者理解を深めることにより自分の在り方や他者とのつながりについて考えさせ、今後の生き方について前向きにかつ建設的に考えられるようにするために以下の指導を行うことにした。

東日本大震災及び福島第一原子力発電所の事故により、生徒のほとんどが避難生活を強いられた。さらに、学校のある飯館村は、原発事故の約一か月後に計画的避難区域に指定されたために、飯館校はサテライト校として福島県教育センターに学校機能が移転することとなった。生徒の家族は仮設住宅や借り上げ住宅に小家族に分かれて生活することを強いられ、他の地域より避難指示が出されたのが遅かったこともあり、なかなか進まなかった。そのため、全校生の約七割が寮として準備された教育センターの宿泊棟に入寮して家族の元を離れて生活するようになった。しかし、寮の設置によりほとんどの生徒が転校や分散することがなかったため、学校の再開が生徒たちにとって大きな支えとなった。避難しての生活や家族と離れての生活は大きな負担となったが、生徒自身も被災者のひとりとして現状を受け止め、すべてのことを我慢しなければならぬと感じながらの生活が続いた。

二学期になると、生徒は寮を出て、家族が避難した仮設住宅や借り上げ住宅から通学することができるようになり、わずかながら精神的、肉体的負担が減ってきた。しかし、その一方で、それは今までと違った場所や住宅での生活への不満を生んだ。さらに、家族や友人の放射性物質による内部被爆の検査結果が出始めると、マスクをする生徒が増え、自らの健康に対する不安が生まれた。そして、それらの感情は言葉としては表現されることなく、他者や物へ感情をぶつける行為や他者に依存する行動になって現れることもあった。

三 教材開発の手順

実施のねらいで前述したように、「書く」「話す」「聞く」の活動をとおして自己及び他者を理解し、それを踏まえ、自己のこれからの生き方や在り方を見いだせるように展開を工夫した。実際の指導手順は次のとおりである。

手順1 原稿の作成

各学年とも国語科の授業で自分の思いを文章化する学習活動をさせた。すぐに作文を書かせず、はじめは、周囲に迷惑にならないように留意させて友だち同士で自由に話をさせた。その後、全体で静かに原稿を書く活動をさせた。

手順2 原稿の推敲

できあがった原稿を生徒同士または教員が読み、説明が不足している部分や伝わりにくい表現を指摘し、内容と表現をふくらませていった。特に、原稿に出てくる事実が発表を聞く者に正確に伝わるような表現を追求させた。

手順3 クラスでの発表

できあがった原稿をクラスで発表した。発表は、人前で話をするのをあまり得意としない生徒が多く、不安もあったが、生徒は自分たちの思いを堂々と発表した。発表時には、発表を聞いた生徒及び教員で評価し、高い評価を得た生徒は、飯館校の文化祭である紅葉祭の中で全校生の前で発表させることにした。

手順4 発表者の原稿の再推敲

紅葉祭で発表する原稿をグループで再推敲した。発表を聞いて疑問に思った部分や理解できなかった部分を明らかにし、内容と表現をさらにふくらませた。

手順5 紅葉祭での発表

紅葉祭での発表は「飯館校生の主張」と題してコンテスト形式で開催

した。審査員は教員が務め、順位付けをして最優秀賞のみ選出し、発表したすべての生徒を表彰した。

四 指導上の留意点

導入の段階として、生徒間で自由に話をさせて漠然とした自分の思いを整理させ確かなものとしたり、曖昧な記憶や知識に対して理解を深めたりできるようにした。この活動をとおして、自然に自分の生活や家族、ふるさとのことを見つめ直し向き合えるようにすると同時に、自分の置かれている境遇や思いを仲間と話せる状況をつくった。

発表原稿を書く活動では、仲間との会話によって表現された自分の内面と向き合わせ、それを自分の言葉で表現できるようにした。原稿の内容や表現についてはできる限り教員が指導しないようにした。しかし、前向きで建設的な意見まで考えが至らない生徒に対しては、会話をしながら気付けさせる指導をした。できあがった原稿の中には主語と述語のつながらない文章や伝わりにくい表現もみられたが、あえて手直しは加えずに、できる限り生徒の文章表現を生かすようにした。

原稿の推敲にあたっては、各生徒がはじめに表現した言葉を削ったり変えたりせずに、より表現や内容を深めていくように指導した。特に、原稿中に登場する家族の状況や自分の経験した内容や心情などが正確に聞き手に伝わるようにさせた。

発表活動においては、他人の発表をしっかりと聞くように指導した。自らと同じような境遇の仲間が、それとどのように向き合っているのか、同じように生活している仲間が自分と違った境遇にあるのかをしっかりと認識できるように促した。そして、自己と他者を照らし合わせながら、前向きに生活する術について一人ひとりが考えるきっかけ作りをしていった。

また、飯館校の学習指導上の課題である生徒の表現力の向上については、一人ひとりが「書く」「話す」ことによってその能力の向上を図ることが

できるように意識して指導した。

五 実践報告1「授業における生徒の反応」

いつもはあまりペンが進まない生徒たちも、今回の活動に対しては意欲的かつ精力的に取り組むことができた。今まで家族も仲間も皆、同じ境遇であるがために自分の生活の不安や不満を口にするのを我慢してきたが、それを話したり書いたりすることは実は生徒が望んでいたことであり、自然と活動できたものと考えられる。

また、それぞれの原稿の推敲では、活発な意見交換がなされ、相互の理解を深めることができた。と同時に自己の理解を深めることもでき、自らの力で原稿を完成させることができた。自分自身では理解していても、聞き手が知らない内容を伝えるには、どのように表現したらよいかを学び、次第に聞き手や読み手が理解しやすい文章がかけられるようになった。

クラスでの発表は、それぞれが恥ずかしがりながらも一生懸命伝えようとしていた。内容もすばらしく、誰もがクラスの代表を務められるような発表であった。また、発表を聞く生徒の態度も立派であり、発表会は引き締まったものとなった。

紅葉祭での発表は体育館で行ったが、大きな声で堂々と発表し、どの発表もすばらしかった。特に、経験した者しか表現し得ない「生きた言葉」がたくさん使われていて、各生徒の家族やふるさとへの思いの深さを教員も痛感した。クラスでの発表会と同様に、発表を聞く生徒の態度も立派だった。

六 実践報告2「学校生活における生徒の変化」

これらの活動をとおして、生徒の学校生活はだいたい落ち着きを取り戻した。他者や物にあたる行為は減り、徐々に以前の間人間関係を取り戻してい

た。今回の活動をとおして生徒が自分の思いを仲間に表現したことにより、生徒一人ひとりが抱えていた悩みを生徒間で共有でき、仲間と相互の状況を踏まえながら気軽に話ができるようになったためであると考えられる。さらに、個々の生徒が持つ様々な思いは、生徒間でぶつけ合い会話をとおして問題を解決できるようになった。

また、生徒の自己理解が深められたことと自らの置かれている環境や悩みを共有化できたことで、それらを教員に打ち明ける生徒が増えた。生徒が書いた原稿は面談の事前情報として生徒理解に活用でき、それと面談における情報を元に効果的な指導をすることができた。教員が生徒の理解を深められたこともあるが、生徒が自分のことを教員に理解してもらったことによる安心感が心の安定につながったように思われる。

そして何より大きかったのが、これらの外的な変化により生徒の内的な変化をもたらし、自分の置かれている現状を冷静に捉え、それと向き合い、前向きに考えることができるようになった点である。この変化が、生徒の生活態度の安定を持続させ、精神的な成長につながった。

七 考察

(1) 成果

生徒個々の言語表現力が向上したかどうかについては評価が難しいが、発表された原稿はこれまで生徒が書いた文章に比べ表現力が優れており、他人に自分の思いを伝える表現方法が随所に見られた。指導にあたった国語科の教員は、この単元の目標を達成できたと評価していた。

一方、生徒指導の面においては前記のような生徒の変化が見られ、教員が予想した以上に望ましい効果が得られた。これは「話す」「聞く」の学習活動に時間を十分にかけ、生徒一人ひとりの思いを引き出せたことが良い結果につながったものと考えられる。今回の指導によって生徒の理解を深めることができ、それを踏まえて面談等の個別指導を充実させることができた。

(2) 課題

発表に関しては、すばらしい発表がたくさんあったが、国語科の授業での指導のため、全員の発表を全教員が聞くことができなかつた。少なくとも各学級の担任と副担任が学級内の発表会に参加し全員の発表を聞くことができるように配慮して、生徒理解の参考にすべきであった。

今回の発表において、食についての問題や健康についての不安など様々な分野の問題や悩みが出てきた。これらの問題は生徒全体に広がっているものと考えられる。したがって各教科の担当者は、自分の担当する科目と照らし合わせながら、今後どのように指導していくかを検討していかなければならない。

八 資料 (生徒の発表原稿)

「までい」の村を襲った放射能

みなさん、「までい」という言葉を知っていますか。「までい」とは、「丁寧に」「心を込めて」「手間暇かけて」という意味がある飯館村の方言です。

私は、飯館村の人たちが「までい」に村作りをしていた中、その村を襲った放射能について話をしたいと思います。その理由は、一生懸命作ってきたものを汚されたとき、人はどのような状態になり、またどのように復活することができるのかを考えたいからです。

飯館村は、自然に恵まれ、水や空気がとてもきれいなところでした。その自然からの恵みを十分にあげることができました。自然からの恵みは、米や野菜だけでなく、山からとれる山菜、きのこ、栗などの実などがあります。その中で暮らしている人たちは、とても優しい人たちばかりです。飯館村の自然を愛し、飯館村の伝統を守ってきた人

たちです。

しかし、震災によって、今までの飯館村が一気に変わってしまいました。人々を悩ませたのは、福島第一原子力発電所の事故によって放射能が漏れ、たまたま風向きの関係で高い濃度の放射能が飯館村の、田んぼや畑、そして牧草などの土の上に落ちてしまったのです。私の住んでいるところでも、二〇マイクロシーベルトを超える放射線量があつたと言われています。

その放射能によって、飯館村の人たちは、ひどく怒りっぽくなつたと思います。あんなに優しくかつた人たちが、いろいろなことに対していらいらするようになってしまいました。私は、そのことが非常に悲しいです。

これから飯館村はどのようになるのでしょうか。現在、前に自分が住んでいた頃の様子はまったくありません。村には雑草が一面にはえていて、どこが田んぼだか、畑だか、ぜんぜんわかりません。この様子を見て、いままでも農家の人たちが一生懸命田んぼや畑を整備していたことが分かりました。自然によって人が生かされているように、自然も人によって支えられていると言ふことが分かりました。人は土によって生かされ、土は人によって豊かになっていくのだと分かりました。

土は絶対に人が必要なのです。早く飯館村の人たちが生まれ育つた村に帰って、また以前のように最高の野菜や米をつくってほしいです。

何事にも代えがたいもの

三月十一日、私は自宅にいました。台所の掃除をしているとき、生まれて初めて大震災を経験しました。あの時ほど、身近に死を感じたことはありません。建物だけでなく、地面が大きく揺れ、立っている

ことさえできない恐怖を味わいました。また、地鳴りを伴う余震が続く中、電気が止まり、暗く寒い夜を過ごしたことを思い出します。

そんなある日、新聞にとっても驚くような記事を見つけました。「原子力発電所爆発」。大変な事態が起きていることだけは私にも分かりました。

このニュースがあつてから私の生活は大きく変わりました。三月下旬に再開予定だった学校は臨時休業の措置がとられ、私は須賀川市の親戚の家に避難せざるを得なくなりました。避難生活から二週間ほどが過ぎ、私は飯館村に帰ってきました。しかし、相変わらず原発の方は落ち着かず、最悪の状態が続いていました。四月十一日、飯館村全域が「計画的避難区域」に指定されました。とうとう私は、自分の生まれ育った村から長期間離れなければならなくなったのです。

それからは、とても時間の流れが速かった気がします。このような感覚は、生まれて初めてのものでした。この時期には、さまざまなきごとが起こりました。学校は本来の場所から福島市の県教育センターへ移転し、家族は次の住居が決まるまで村が指定した避難所へ移動しました。私は、学校の寮で生活することを決めました。震災と原発事故によって、同じクラスの友達が二人、茨城県の学校と喜多方市へ転校しました。学校は違ったけどよく遊んでいた友達も、遠くへ引っ越していきました。お別れの言葉を交わすことなく、親しい友人との別れが訪れました。

しかし、悲しいことばかりではありませんでした。避難所では、多くの同年代の人と知り合うことができ、交流を深めることができました。私は、長期間飯館村から離れた機会がなかったので、このような出会い、交流は、非常に貴重な体験だったと感じています。

新しい住居が見つかったからは、寮を出て、自宅から通学することになりました。電車での通学は非常に大変でしたが、久々に暮らすことになった家族との時間は、とても心落ち着くものでした。母の笑顔は、

何ものにも代えがたいものであることが分かりました。以前より、家族の関係が強くなったような気がします。

今後私は、人とのつながりを今まで以上に大切にしたいと思います。震災や原発事故という未曾有の災害の中で、私は人と人との関係について、じっくりと考えることができたのだから。

震災後の飯館村

私は、震災前は飯館村に住んでいました。当時の生活は、家からスクールバスで学校に行き、広い校舎でのびのびと授業を受け、またスクールバスで家に帰るといふものでした。スクールバスに乗っている時間は二〇分ぐらいです。いつも仲間と乗っているので、登下校も非常に楽しかったです。休日も近くの友達と、気軽に遊んでいました。また、家族全員、帰る時間がだいたい同じだったので、家族一緒にご飯を食べていました。いつも、たいしたことのない話で盛り上がっていました。こんな普通の生活が、ずっと続いていくと思っていました。しかし、震災後は、その生活が一変しました。

最初、川俣の母親の実家に避難していたので、そこから教育センターにある飯館校まで通学しました。慣れないバスや電車を使つての通学です。片道一時間以上もかかってしまいます。毎日、通学だけで非常に疲れたのを覚えていきます。その後、南福島に引っ越してきたので、通学時間は多少短くなりました。しかし、以前のように登下校が楽しいわけではありません。休日は、友達と遊ぶことがめっきり減りました。また、家族全員が帰る時間がばらばらになってしまったので、一緒に夕飯を食べることも少なくなりました。

私は、将来、飯館村で家を建て、家族を持ち、飯館村で普通に暮らしたいと思っています。しかし、今は不安でいっぱいです。飯館村は、

どの位汚染されているのか。除染が終わるのは何年か。放射能の将来への影響はどの位なのか。特に子どもたちへの影響はないのか。除染が終わった後、どの位の村民が村に戻ってくるのか。この不安を取り去らないと、前のような飯館村には戻らないような気がします。しかし、信じたいと思います。私が、以前と同じような生活を、飯館村で送る日を。

放射能の影響と私の夢

今回の三月十一日の地震、そして、それによって起こった原発事故は、飯館村に大きな影響をおよぼしました。特に、原発事故による放射能問題は、飯館村に大きなダメージを与えました。水や土がダメになってしまったのです。

私の家で作っていた野菜、そして飼っていた牛もすべてダメになってしまいました。何年もかけて作り上げてきたものが、一瞬でダメになってしまいました。この時、私の父は、ひどく怒っていました。ひどく落ち込んでいました。しかし、こんな中でも、父は諦めていませんでした。計画的避難区域に指定され避難するまで、父は飼っていた牛を最後の最後までしっかりと世話をしていました。父は、牛も自分の家族のように考えていたのです。

このような父の姿をみて、私は家の農業を継ぐと思いました。震災が起きる前までは、そのことを漠然と考えていました。しかし、震災によって漠然と考えていたことが、決意へと変わった気がします。私は、家の農業を継ぎたいのです。

私の代で、何年もかけて作り上げてきた田んぼや畑、そして牧草地をつぶすわけにはいきません。必ず、飯館村の農業を復活させなければなりません。飯館村の除染には、何年かかってもいいです。以前の

ように、米や野菜が作れ、そして家畜が飼えるようになるまであきらめずに取り組んでもらいたいと思います。除染が済んだら、必ず飯館村に帰って、農業をやりたいと思います。

私が、家の農業を継いで、米作りや野菜作り、そして牧畜をするところが、必ず村の復興につながると思っています。新たな飯館村作りに、私は参加したいと思っています。

私の夢

震災前の飯館村は、自然豊かな村で、山菜もたくさん採れ、空気もとてもきれいな村でした。村の人たちは、心あたらない人たちばかりです。しかし、今回の震災でこの自然豊かな村も、ほとんど人が住めない村となってしまいました。私たちが、ふるさとである飯館村にできることは何でしょうか。

私は将来、福祉関係の仕事に就きたいと思っています。その理由は、中学三年生の時、いいたてホーム（特別養護老人ホーム）にインターンシップに行き、高齢者のお世話をしたときに、あるおばあちゃんから、感謝の言葉を言われたからです。その頃は中学生ですので、お世話と言っても、おばあちゃんの話し相手になることしかできなかったと思います。しかし、そのおばあちゃんは私が帰ろうとしたときに、笑顔で「ありがとう」と言ってくれたのです。私は、今まで何もしない人間だと思っていました。そんな私でも人に感謝されるのだなど思った瞬間でした。

福祉関係の仕事に就きたいという夢は、飯館校に入学した後も、どんどんふくらんでいきました。私は、この夢を叶えるため、一年生の時に三か月をかけて二級ホームヘルパーの資格を取得しました。それは、将来はいいたてホームで働き、また、おじいちゃんやおばあちゃん

んの笑顔をみたいと思っただけでした。

震災の時は、停電もあり、私はとても不安な夜を過ごしたのを覚えています。そんな時、私は家族にとっても励まされました。いいたてホームにいるおじいちゃんやおばあちゃんはどうかだったのでしょうか。私よりも、とても不安な夜を過ごしたのではないのでしょうか。また現在、私は、家族とともに福島市に避難してきました。でも、いいたてホームにいるおじいちゃんやおばあちゃんは、まだ飯館村に残っています。誰もいなくなった飯館村に残っているのです。

今、私にできることは何でしょうか。私は、まず我々飯館村で育った人たちが「飯館村に戻りたい」という希望を捨てないことだと思います。そして、復興に向けてチャレンジし続けることだと思います。そして、現在は勉強して、少しでも飯館村に貢献できることを学んでおくことだと思います。

最後に、現在、私たちには多くの支援が寄せられています。今回の震災で、人は大きな力によって生かされていると感じました。今、支えられて命があることに大きな感謝をします。

「ふくしま子ども夢宣言」作文コンクール
「モラル・エッセイ」コンテスト

作品集

「ジュニアサポートフォーラム in 郡山」 平成二十四年十一月十七日（土）

文字にして宣言すれば、夢や目標は必ず実現します！

あなたの心温まる体験談・すてきなエピソードをお聞かせください。



ふくしまから
はじめよう。

Future From Fukushima.

福島県教育委員会

めざすは、ぼくの水族館！

伊達市立保原小学校

六年 佐藤 雄騎

ぼくが、通っていた保原小学校は、去年の三月十一日の東日本大震災でこわれてしまいました。震災が起きる前から建て始まった新しい保原小学校が出来上がりましたが、前の大好きだった保原小学校はとりこわれ、もうなにもなくなってしまうました。だから、ぼくの夢は、元保原小学校跡地に水族館を作る事です。震災前に毎週いっしょに行っていた大好きな相馬の海の魚を集めて相馬の魚の大きなコーナーを作りたいです。震災前、ぼくは、相馬で釣ったり、あみですくったりした魚を三十種類以上育てていました。ぼくは相馬の魚に詳しい水族館の館長になりたいです。絶対になりたい。そして、いつかきつと相馬の漁も前みたいにかんになって、放射能の心配もなくなってぼくとお父さんとどんどん魚を集めて、水そうを魚でいっぱいにする「相馬の海水族館」それがぼくの夢です。

宇宙開発を目指して

福島大学附属小学校

六年 沖野 峻也

僕の将来の夢は宇宙開発に参加し、プロジェクトで活動することだ。宇宙開発はただ遠い星に行くことだけではなく、そのためにできた技術は、はば広く地球の役に立つのだ。地球にはない新たな資源を求めたり、宇宙から地球を観測することで、農作物などの影響を最小限に食い止めることもできる。

この夢を実現するため、僕はこれから三つのことを努力したい。一つ目は、常に自分の周りを整理整頓すること。宇宙探査はぼう大な情報になるため、大切な情報がなくならないように見やすく管理しなければいけない。二つ目は、困難にあった時、一つの視点だけでなく、様々な視点から見ること。小惑星探査機「はやぶさ」もこのようにして困難を乗り越えた。最後に国際人になること。宇宙開発をするには、多くの国と協力しなければ成り立たない。他の国をよく理解することも大切だ。これら三つのことをずっと続けていけば、二十年後にはきっと夢がかなっていると思う。

将来の夢

矢吹町立中畑小学校

六年 鈴木 蓮汰

多くの将来の夢は農業で福島県を元気にすることです。理由は二つあります。

一つ目の理由は、多くの家は農業をしています。小さいころから田植えやトマト作りの手伝いをしているのが楽しかったからです。

二つ目の理由は、同級生の中で野菜が苦手という人がたくさんいます。そういう人達に新鮮な野菜を食べてもらい本当のおいしさを分かってほしいと思うからです。ぼくが作った野菜などを野菜がきらいになっている人に食べてもらいたいので多くの将来の夢は農業をする人になりたいです。

そうすれば、福島県は復興復旧ができると思うので福島県から他県にひなんした人もぼくが作った野菜を食べてもらおうことで福島県にもどって来てもらえると思います。そうすれば福島県産の野菜や魚はもう大丈夫だとアピールもできると思います。

保育士になるまで今できること

下郷町立江川小学校

六年 要 夏帆

私の夢は保育士になることです。

私は小さい子が大好きで小さい子や赤ちゃんをみると元気がでます。それに保育所は人を助ける仕事でもあると思うからです。仕事で子供がみられないという人もたくさんいます。それを助けるのが保育所だと思うから、私はこの仕事をやりたいと思いました。命をあずかる仕事なのでそれだけ責任をもつてやるのが大切です。そのためにも人の気持ちになって行動したり、下級生のめんどうをみたりすることが今、私にできることだと思います。

私はこんな保育所をつくりたいです。それはお年寄りのデイサービスと保育所がいっしょになっていてお年寄りも小さい子がいっしょに遊んだり歌ったりできるので。時にはお年寄りが小さい子のめんどうをみます。保育士もお年寄りに昔のことを教えてもらいます。私はこの夢をかなえるためがんばります。

相馬野馬追を守る

南相馬市立大甕小学校

六年 佐藤 太亮

ぼくの町には、「相馬野馬追」という歴史のあるお祭りがあります。小さいころは、野馬追行列しか見たことがなかったけれど、二年前に、ひばりヶ原で神旗争奪戦や甲冑競馬を見てから、かっこよさに感動して、大好きになりました。自分が育った町にこんな素晴らしいお祭りがあることをほこりに思っています。

今年、震災後、二年ぶりにいつも通りのお祭りが行われて、ぼくは、家族で見に行きました。暑かったけれど、相馬の人たちの勇ましさを感じて、とてもうれしかったです。

ぼくは、この伝統ある相馬野馬追祭りがこれからもずっと続いていくように、また、もっとたくさんの人たちに知ってもらえるように、守っていききたいと思っています。そして、いつか、馬にのって、野馬追にできることが、ぼくの夢です。

今、伝えたいこと

北塩原村立第一中学校

三年 高畑 ゆこ

「お姉ちゃんに問題。生きるってどんなことか分かる？」

弟が不意に私に尋ねてきた。私は「今ここでごはんを食べていること」と答えた。弟は先生が大学でこの問題出るんだよって教えてくれたと笑っていたが私にはよく分からなかった。なぜこんなに簡単な問題を大学で出すのだろうと疑問に思った。たぶんこれが生きるについて考えるきっかけの一つになったのかもしれない。

二〇一一年三月十一日、日本に大きな影響を与える地震が起きた。たった一つの地震で万をこえる人たちの命がうばわれた。命というものはどんなにはかなくて小さなものなのかを私はこのとき強く感じた。でもその反面、命が生まれるときはどうだろう。二つの命から新しい命が誕生する。その二つの命が出会わなければ新しい命は誕生しない。私は命が生まれる、誕生することがきせきだと思う。そしてその誕生した命は、たくさんの人を笑顔にしてくれる。そう思うと命はとても大きいものだ

も思える。命とは不思議なものだと感じた。

弟が私に尋ねてきたことは、答えが一つではないと思っただ。十人に聞けば十個の答え。百人に聞けば百個の答えが出ると思う。そうすると生きるって簡単なようで難しいと思った。だから私は、父と母からもらった命を大切にしていきたいと思う。命を大切にすることと生きるということとは同じだと思うからだ。最近よくテレビや新聞で自殺や殺害したというニュースがある。私はそういう人間に伝えたい。もっと自分の命を考え大切にしたい。そして生きてほしいと。大震災で死にたくないの命をうばわれた人がたくさんいたと思う。だからこそ今、生きている私たちが命を大切に、生きていかなくてはならないと感じた。

ふくしまで生きる

郡山市立小原田中学校

三年 吉田 一翔

十三歳の春に僕たちを襲った東日本大震災から一年半が過ぎた。未だに大きな揺れがあり、あの時の不安と恐怖が心を揺らす。

震災直後、屋外での活動は三時間までと制限された。体育の授業も部活動も、放射性物質から体を守るためにマスク着用。青い空の下……思いつきり空気を吸って、思う存分駆け出したい。伸び伸び部活動もできない毎日にストレスがたまる。イライラしてくる。心が折れそうになる。……その度、「つらいのは僕だけじゃない。今は、ふくしまみんなが辛いんだ。」「ふくしまみんなが踏ん張っているんだ。頑張っているんだ。」「……そう自分を制し、自分を励まして生きてきた。

十五歳の秋を迎え、今年も教室の窓からは黄金色に光る稲穂が見える。震災を乗り越え放射能汚染を乗り越えて、たわわに実った稲穂が、僕には誇らしげに見える。「どうか、この米が風評被害なんかにあいませんように。」と願いを込める。

今の僕にできること。それは、勉強に打ち込み、中学生としての時間を精一杯満喫し、当たり前の毎日に感謝すること。当たり前の毎日が、こんなに貴重で幸せな事なんだと……震災を経験し、身をもって知った。

僕にとって「ふくしまで生きる」とは、僕自身がたくましく太い根になり、成長を続けること。そして、大空に向かって幹を伸ばし枝を広げるように、将来の目標に向かって真っすぐに伸びていくこと、視野を広げていくこと。やがて、大人になった時、僕はしっかりと前を向き、ふくしまで必死に生きる人々の力になっていたい。「うつくしま ふくしま」を取り戻す一端を担ってほしい。「うつくしま ふくしま」を取り戻すまで、僕はふくしまで生きる。よみがえった「ふくしま」をこの目で見届げる。

震災について —— 心温まる話 ——

福島市立北信中学校

二年 菅野 志保

あの日、校長先生は泣きながら、卒業証書を生徒一人一人に丁寧に渡し続ける。しかも、場所は小学校ではなく中学校。二千年に一度といわれるあの東日本大震災は、私達の春休みを強制的に長くした。中学校の入学式が終わった後行われた手作りの卒業式。校長先生の教員生活の中で、小学校から生徒を送り出してやれなかったのは、おそらく、私達の学年が最初で最後であろう。

大好きな校長先生。校長室というと、身構えてしまうが、瀬上小学校の校長室は違っていた。いつも、生徒でいっぱい。なぜかって。答えはみんなが知っている。毎日、朝と帰り校門に立って、生徒を見守っていたこと。授業中、校内を見廻っていたこと。生徒一人一人に心を配り声をかけていたこと。学校が終わると生徒が遊んでいそうな公園などを自転車で一人でパトロール。たまには、生徒達と一緒にサッカーをして身体を動かす。夏休みやゴールデンウィークにも自転車見廻りはかかさない。人に好かれるには、自分が相手を好きにならなければなら

ないんだって身をもって教えてくれた。

卒業式の時、いろんな思いが去来した。平和で変化がない毎日がイヤだと思っていたけど、平和で変化のない毎日其实是ら一番よい。普通に生活するのが難しい日があるなんて、地震前、一度も考えたことがなかった。一日一日、一人一人に感謝できるような気がする。考えること、学ぶこと、想うこと、願うこと、声をかけること、知ること、明るい未来を描くこと、今を生きること。人にはみんなのできることがたくさんある。涙は志・心・魂を成長させる。経験しないと学べないものだ。

私は、福島市のリフレッシュ事業で、復興めざましい、いわきの旅行に参加する。とても楽しみだ。未来を見よう。いつか必ずこうなってみせると力強く。

カイロの温もり

福島県立郡山東高等学校

二年 星 結衣

私は列の中にいた。列は長く伸びて、いつ自分の順番がくるのかも分からなかった。三月の中旬、福島の春は、まだ遠かった。あの日やってきた大きな揺れ、そのために道路は寸断され、いつもなら簡単に手に入るものも列を作らないと手に入らないようになっていた。列を作ったところで、必ず手に入るとは限らないし、何が手に入るのかすら分からない。それでも、私たちはわずかな食料を手に入れるために列を作っていたのだ。中学を卒業したばかりの私も自分から進んでひとり列に並んでいた。その列は長く延びていたが誰も割り込もうとしないし、声を荒げる人もなかった。みんなが黙りこくって整然と列を作っていた。福島の三月はまだ寒い。厚着をし、手袋をしていたが寒さが身に堪えた。私の前に並んでいたのは、六十歳半ばくらいのおばあさんだった。お年寄りも頑張っているんだからと自分に言い聞かせるのだが、私は心細く不安でいっぱいだった。仕方がないと思いつつも涙

が流れて止まらない。その時、おばあさんがにこにこしながら振り返って私を見た。私はちよつと恥ずかしくなって涙をぬぐった。「まだまだ寒いね。」と言いながら、ポケットから何かを取り出すと「ほら。」と私に手渡した。それは、カイロだった。「いえ、大丈夫ですから……。」と返そうとする私を遮るように言った。「いいからポケットに入れておきなさい。ほら、温かいでしょ？」目を丸くしている私を見て、にこにこしながら、おばあさんは続けた。「日本人っていいよね。こんな時にこうやってじつと待ってられる。こんな国は世界中どこを探してもないんだよ。」私はうなずきながらカイロを握りしめた。「おばあさん、ありがとう。」笑顔が自然にこぼれるのを感じた。そのカイロは心までぽかぽかと温まるような気がしてぎゅっと握りしめた。

三月十日と三月十一日

福島県立福島商業高等学校

三年 渡辺 美友

震災当時、私の家は五人家族でした。いつもと同じように過ごしていたはずが、たった一瞬でなにもかもが崩れていきました。

三月十一日、この日は中学校の卒業式があり、後輩に会いに行きました。その後、久しぶりに友達と会い友達の家でご飯を食べ、テレビを見ていました。その時、激しい揺れと外で瓦が割れる音が聞こえました。ただ必死に友達にしがみついていたことを今でもはっきりと覚えています。すぐに家族が心配になり、電話をかけたけど繋がらなくて急いで家に帰りました。なんとか家族が生きていると分かり、安心しました。しかし、電気はつかない、水も出ない、そして余震で何回も揺れてますますこわくなりました。夜になり、祖父がデイサービスに行っていたので行くと、少しこわがった様子でした。それから何日も水と電気が使えない日々を送りました。ですが、震災があったからこそ大切なことも見つけられたし、家族の絆も深まりました。

あれから一年過ぎ、祖父は三月十日に亡くなりました。ちょうど祖父の姉の誕生日で、祖父の結婚記念日でした。亡くなった時刻は祖父の愛した妻の祖母と同じ時間。こんな偶然はなかなかないと思います。そしてたくさんの人が震災で亡くなっていったのに、祖父はこんなにも頑張ってくれました。

三月十日、そして三月十一日は決して忘れることのできない日です。被災した人が苦しんでいるのを見て、全国からたくさんの方の応援をいただきました。まだ復興してないとところもあり、まだまだ地震の爪痕は消えません。全国民が協力して元の平和な日本に戻していきたいと思っています。

この震災で、亡くなった方々の御冥福をお祈り申し上げます。私は、その方々の分まで一生懸命生きていこうと心に誓いました。

災害ボランティアを通じて感じたこと

福島県立本宮高等学校

三年 藤橋 咲耶

私が昨年三月十一日以降に感じたことは、人と人との絆です。それは家族であったり、地域の人であったり様々ですが、その中でも特にそれを強く感じた体験をしました。震災後に参加した災害ボランティアでのことです。

昨年の三月の終わり頃から四月の始め頃まで一週間程ボランティアに参加しました。ボランティアのことを知ったのはテレビで開成山で募集しているという情報を目にした時でした。私自身、何かできることはないかと思っていた時だったので、丁度良いと思い申し込みをしに行きました。活動には翌日から参加しました。当時、開成山陸上競技場は避難所となっており、原発周辺から避難してきていた人達も含めてかなりの数の避難者がいました。ボランティアの内容は郡山市内の避難所に送るための救援物資の仕分けがほとんどでした。様々な年代の人が参加をしているので、自然と作業が分担されていました。私は主に箱の中身の仕分けなどを行っていました。

重い荷物を運ぶ時もあったのですが、その時は大人の方が手伝ってくれて、とても助かっていました。浜通り地方から避難してきている人達も数人参加しており、誰かのために何かをしたいという思いは同じなのだ実感しました。

この経験を通して私が思ったことは、人のつながりの強さです。普段は道端ですれ違うだけのような人達が他人のために一つの場所に集まるのはすごいことだと思います。浜通り地方から避難してきていた人達も、話を聞いていた限り海沿いに住んでいたらしいので津波や原発事故などで大変な状況下で参加していたことはどんな理由であったにせよ純粹に敬意を表するに値すると思います。災害ボランティアはしょっちゅうある訳ではないし、あってほしいものでもありません。けれど、みんなが大変な状況で地域の人がつながり協力していくのは、大切だと思いました。

フライドポテト

福島市在住

横山 ひろこ

私の一人息子は自閉症で養護学校高等部三年です。自閉症がわかったのは三才の時でした。発語がなく、落ち着きもなく、在宅ができない子で朝から夕刻までドライブした時期もありました。小学部四年の秋から施設に入所、隣接した養護学校へ転入し、週末に帰宅する生活を送っています。

自閉症には独特の拘りがあり、息子の場合週末の迎えの帰途、コンビニのフライドポテトを食べることでポテトは必ず売っているとは限りません。出来上がるまでの五分すら待つことができないため、その対応に苦慮する日々でした。そんな時、あるコンビニでのことでした。息子の拘りでポテトは袋に入れてもらわないことを三度目の来店の際、その女性店長は覚えていて下さったのです。このような接客を受けたのは初めてでした。息子のニーズを理解されていたのです。そして夏場はポテトが売られていないことが多いのですが、このコンビニでは必ず常備されていて、待てない息子には大変有難い

限りです。現在は成長した息子を私一人での送迎は難しくなり、父と車で待たせていますが、目も離せない子だけに二人で来店していた頃、息子は奇声を発したり、突発的に商品を壊してしまう可能性もあり、手も離せない状況で会計するのに精一杯でした。下校後や長期の休みは息子と二人、孤立感を抱えながらも地域で過ごさなければなく、自閉症は見えない障がいでも各自違う特性のため、理解は難しく、マイノリティーだけに看過されがちなのです。

自閉症を知らない人にはありふれた光景かもしれませんが、孤独だった私たち親子には手を差し伸べられたような瞬間でした。私は今でも忘れていません、あの日のことは。嬉しくて涙はあふれていました。今でも思い出すと胸が熱くなります。「ありがとう」あの時、私はそう云いたかったのです。

小学校第5学年及び第6学年	中 学 校
(1) 生活習慣の大切さを知り、自分の生活を見直し、節度を守り節制に心掛ける。	(1) 望ましい生活習慣を身に付け、心身の健康の増進を図り、節度を守り節制に心掛け調和のある生活をする。
(2) より高い目標を立て、希望と勇気をもってくじけないで努力する。	(2) より高い目標を目指し、希望と勇気をもって着実にやり抜く強い意志をもつ。
(3) 自由を大切にし、自律的で責任のある行動をする。	(3) 自律の精神を重んじ、自主的に考え、誠実に実行してその結果に責任をもつ。
(4) 誠実に、明るいい心で楽しく生活する。	
(5) 真理を大切にし、進んで新しいものを求め、工夫して生活をよりよくする。	(4) 真理を愛し、真実を求め、理想の実現を目指して自己の人生を切り拓いていく。
(6) 自分の特徴を知って、悪い所を改めよい所を積極的に伸ばす。	(5) 自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求する。
(1) 時と場をわきまえて、礼儀正しく真心をもって接する。	(1) 礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動をとる。
(2) だれに対しても思いやりの心もち、相手の立場に立って親切にする。	(2) 温かい人間愛の精神を深め、他の人々に対し思いやりの心をもつ。
(3) 互いに信頼し、学び合って友情を深め、男女仲よく協力し助け合う。	(3) 友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合う。
(4) 謙虚な心もち、広い心で自分と異なる意見や立場を大切にする。	(4) 男女は、互いに異性についての正しい理解を深め、相手の人格を尊重する。
(5) 日々の生活が人々の支え合いや助け合いで成り立っていることに感謝し、それにこたえる。	(5) それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方があることを理解して、寛容の心もち謙虚に他に学ぶ。
	(6) 多くの人々の善意や支えにより、日々の生活や現在の自分があることに感謝し、それにこたえる。
(1) 生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重する。	(1) 生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重する。
(2) 自然の偉大さを知り、自然環境を大切にする。	(2) 自然を愛護し、美しいものに感動する豊かな心もち、人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深める。
(3) 美しいものに感動する心や人間の力を超えたものに対する畏敬の念をもつ。	(3) 人間には弱さや醜さを克服する強さや気高さがあることを信じて、人間として生きること喜びを見いだすように努める。
(1) 公德心をもって法やきまりを守り、自他の権利を大切にしながら進んで義務を果たす。	(1) 法やきまりの意義を理解し、遵守するとともに、自他の権利を重んじ義務を確実に果たして、社会の秩序と規律を高めるように努める。
(2) だれに対しても差別をすることや偏見をもつことなく公正、公平にし、正義の実現に努める。	(2) 公德心及び社会連帯の自覚を高め、よりよい社会の実現に努める。
(3) 身近な集団に進んで参加し、自分の役割を自覚し、協力して主体的に責任を果たす。	(3) 正義を重んじ、だれに対しても公正、公平にし、差別や偏見のない社会の実現に努める。
(4) 働くことの意義を理解し、社会に奉仕する喜びを知って公共のために役に立つことをする。	(4) 自己が属する様々な集団の意義についての理解を深め、役割と責任を自覚し集団生活の向上に努める。
(5) 父母、祖父母を敬愛し、家族の幸せを求めて、進んで役に立つことをする。	(5) 勤労の尊さや意義を理解し、奉仕の精神をもって、公共の福祉と社会の発展に努める。
(6) 先生や学校の人々への敬愛を深め、みんなで協力し合いよりよい校風をつくる。	(6) 父母、祖父母に敬愛の念を深め、家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築く。
(7) 郷土や我が国の伝統と文化を大切にし、先人の努力を知り、郷土や国を愛する心をもつ。	(7) 学級や学校の一員としての自覚をもち、教師や学校の人々に敬愛の念を深め、協力してよりよい校風を樹立する。
	(8) 地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し、社会に尽くした先人や高齢者に尊敬と感謝の念を深め、郷土の発展に努める。
	(9) 日本人としての自覚をもって国を愛し、国家の発展に努めるとともに、優れた伝統の継承と新しい文化の創造に貢献する。
(8) 外国の人々や文化を大切にする心もち、日本人としての自覚をもって世界の人々と親善に努める。	(10) 世界の中の日本人としての自覚をもち、国際的視野に立って、世界の平和と人類の幸福に貢献する。

「道徳の内容」の学年段階・学校段階の一覧表

小学校第1学年及び第2学年	小学校第3学年及び第4学年
1 主として自分自身に関すること	
(1) 健康や安全に気をつけ、物や金銭を大切に、身の回りを整え、わがままをしないで、規則正しい生活をする。	(1) 自分でできることは自分でやり、よく考えて行動し、節度のある生活をする。
(2) 自分がやらなければならない勉強や仕事は、しっかりと行う。	(2) 自分でやろうと決めたことは、粘り強くやり遂げる。
(3) よいことと悪いことの区別をし、よいと思うことを進んで行う。	(3) 正しいと判断したことは、勇気をもって行う。
(4) うそをついたりごまかしたりしないで、素直に伸び伸びと生活する。	(4) 過ちは素直に改め、正直に明るいい心で元気よく生活する。
	(5) 自分の特徴に気付き、よい所を伸ばす。
2 主として他の人とのかかわりに関すること	
(1) 気持ちのよいあいさつ、言葉遣い、動作などに心掛けて、明るく接する。	(1) 礼儀の大切さを知り、だれに対しても真心をもって接する。
(2) 幼い人や高齢者など身近にいる人に温かい心で接し、親切にする。	(2) 相手のことを思いやり、進んで親切にする。
(3) 友達と仲よくし、助け合う。	(3) 友達と互いに理解し、信頼し、助け合う。
(4) 日ごろ世話になっている人々に感謝する。	(4) 生活を支えている人々や高齢者に、尊敬と感謝の気持ちをもって接する。
3 主として自然や崇高なものとのかかわりに関すること	
(1) 生きることを喜び、生命を大切にする心をもつ。	(1) 生命の尊さを感じ取り、生命あるものを大切ににする。
(2) 身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接する。	(2) 自然のすばらしさや不思議さに感動し、自然や動植物を大切ににする。
(3) 美しいものにふれ、すがすがしい心をもつ。	(3) 美しいものや気高いものに感動する心をもつ。
4 主として集団や社会とのかかわりに関すること	
(1) 約束やきまりを守り、みんなが使う物を大切ににする。	(1) 約束や社会のきまりを守り、公德心をもつ。
(2) 働くことのよさを感じて、みんなのために働く。	(2) 働くことの大切さを知り、進んでみんなのために働く。
(3) 父母、祖父母を敬愛し、進んで家の手伝いなどをして、家族の役に立つ喜びを知る。	(3) 父母、祖父母を敬愛し、家族みんなで協力し合っ て楽しい家庭をつくる。
(4) 先生を敬愛し、学校の人々に親しんで、学級や学校の生活を楽しくする。	(4) 先生や学校の人々を敬愛し、みんなで協力し合っ て楽しい学級をつくる。
(5) 郷土の文化や生活に親しみ、愛着をもつ。	(5) 郷土の伝統と文化を大切に、郷土を愛する心をもつ。
	(6) 我が国の伝統と文化に親しみ、国を愛する心をもつとともに、外国の人々や文化に関心をもつ。

◇特別寄稿

藤永 芳純氏 大阪教育大学 名誉教授

◇監 修

林 泰成氏 上越教育大学大学院 教授

白木みどり氏 上越教育大学大学院 准教授

早川 裕隆氏 上越教育大学大学院 准教授

◇表 紙

朝倉 悠三氏 県美術協会会員 馬の絵コンクール審査員

◇挿 絵

松本 妙子氏 本宮市立和田小学校教頭

◇作成協力者

岩崎 秀幸氏 アクアマリンふくしま 命の教育課指導主事

渡部 忍氏 請戸芸能保存会会長

天野 和彦氏 国立大学法人福島大学うつくしまふくしま未来支援センター 特任准教授

溝井 勇氏 こおりやま文学の森資料館長

◇作成委員

鈴木ヨシ子 郡山市立日和田小学校長

熊坂 洋 本宮市立本宮第二中学校長

佐藤 洋光 新地高等学校長

伊藤 貴史 福島大学附属小学校教諭

柏倉 弘人 郡山市立郡山第三中学校教諭

長沼 千絵 須賀川市立第二中学校教諭

正木絵理子 天栄村立大里小学校教諭

小荒井真紀子 田村市立滝根小学校教諭

榊原 康夫 田村市立滝根中学校教諭

柳沼 昌仁 西郷村立西郷第一中学校教頭

遠藤 浩子 柳津町立柳津小学校教諭

遠藤 寛之 飯舘村立飯樋小学校教諭

森 康博 いわき市立小名浜第一中学校教諭

木村 忍 福島東高等学校教諭

横田 日夏 郡山商業高等学校教諭

佐藤 和義 相馬農業高等学校飯舘校教諭

橋本 一弥 天栄村教育委員会指導主事

先崎 力男 田村市教育委員会指導主事

吉田 洋子 教育総務課管理主事

板橋 竜男 県北教育事務所指導主事

高橋みどり 県中教育事務所指導主事

佐野 常浩 県南教育事務所指導主事

岡崎 秀明 会津教育事務所指導主事

芳賀 稔 南会津教育事務所指導主事

武口 隆行 相双教育事務所指導主事
大内 克之 いわき教育事務所指導主事
二瓶 浩治 教育センター指導主事

◇**県教育庁義務教育・高校教育課**

吉田 尚 義務教育課長
佐川 正人 義務教育課主幹
管原 克章 義務教育課主任指導主事
佐藤 秀美 義務教育課主任指導主事
福地 淳一 義務教育課指導主事
伏見 珠美 義務教育課指導主事
鯨岡 寛泰 義務教育課指導主事
増子 春夫 義務教育課指導主事
阿部 洋己 義務教育課指導主事
菊池 淳一 義務教育課指導主事
渡邊 真魚 義務教育課指導主事
酒井 康雄 義務教育課指導主事
原 孝行 義務教育課指導主事
小松 信哉 義務教育課指導主事
大和田範雄 高校教育課主任指導主事
黒川 佳子 高校教育課指導主事

◇**参考文献**

「柳津町史上巻」（昭和52年5月31日発行 柳津町教育委員会編集 発行者 町長 春日源一）
「柳津町の文化財」（柳津町教育委員会発行）
「東日本大震災警察官の手記」（平成24年 福島県警察本部）
「つむぐ命」（平成24年 福島県警察本部）
「ふくしまに生きる ふくしまを守る」警察官と家族の手記
（平成24年11月30日発行 福島県警察互助会）
「生きている 生きてゆく ビックパレットふくしま避難所記」
（「ビッグパレットふくしま避難所記」刊行委員会）
「太田博遺稿集～無名詩人太田博の生涯と軌跡～」 福島県立郡山商業高等学校同窓会
ひめゆり平和祈念資料館 WEB ページ <http://www.himeyuri.or.jp/top.html>

表紙に寄せて

震災で肉親や家を流され、原発事故でふる里を追われた相馬のサムライたち……。昨年夏に、なんとか相馬野馬追を復活させたいと避難先から続々と戻ってきた。心に深く傷ついた相馬のサムライたちが、騎馬武者姿で堂々と沿道を行進した時、地元の人たちは泣いた。砂ぼこりの顔を涙でクシャクシャにしなから地響き立てて全速力で駆け抜けていくサムライたちを私は何度も見た。すべての力を出し切って、無心で挑む姿は美しい。一生懸命生きようとする強い力が心を動かすからなのだろう。

県美術協会会員 馬の絵コンクール審査員 朝倉 悠三

平成25年3月1日 印刷

平成25年3月11日 発行

編 集 福島県教育委員会
発行所兼印刷所 株式会社 プロセス印刷

道徳教育総合支援事業（文部科学省）により制作しました。

